

科目名	ソルフェージュ1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	河合 摂子、○田中 伴子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。	
授業概要	
音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとるなど、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音)を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜することが必要である。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
後期試験	40
前期試験	40
主体的な授業参加	20

教科書			
教科書1	適宜プリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調
6	近親調の学習 4度5度音程。
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練
10	ホ短調にて
11	ヘ長調にて
12	ニ短調にて
13	聴音課題とテスト
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習

	簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	河合 摂子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。	
授業概要	
音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとるなど、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音)を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜することが必要である。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
後期試験	40
前期試験	40
主体的な授業参加	20

教科書			
教科書1	適宜プリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調
6	近親調の学習 4度5度音程。
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練
10	ホ短調にて
11	ヘ長調にて
12	ニ短調にて
13	前期聴音課題とテスト
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習

	簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	○岡本 時子、河合 摂子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。	
授業概要	
音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとるなど、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音)を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜することが必要である。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
後期試験	40
前期試験	40
主体的な授業参加	20

教科書			
教科書1	適宜プリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調
6	近親調の学習 4度5度音程。
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練
10	ホ短調にて
11	ヘ長調にて
12	ニ短調にて
13	前期聴音課題とテスト
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習

	簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	河合 摂子、○田中 伴子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。	
授業概要	
音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとるなど、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音)を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜することが必要である。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
後期試験	40
前期試験	40
主体的な授業参加	20

教科書			
教科書1	適宜プリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調
6	近親調の学習 4度5度音程。
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練
10	ホ短調にて
11	ヘ長調にて
12	ニ短調にて
13	前期聴音課題とテスト
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習

	簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	河合 摂子、○川喜多 史子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。	
授業概要	
音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとるなど、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音)を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜することが必要である。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
後期試験	40
前期試験	40
主体的な授業参加	20

教科書			
教科書1	適宜プリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調
6	近親調の学習 4度5度音程。
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練
10	ホ短調にて
11	ヘ長調にて
12	ニ短調にて
13	前期聴音課題とテスト
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト
16	前期の復習

	簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	河合 摂子、○田坂 千禎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽の演奏、創作や研究に必要な基礎能力を養う。簡単な旋律・密集四声体の聴音、簡単な新曲視唱・弾き歌いができるようにする。	
授業概要	
音楽の基礎訓練として、楽譜を読む、旋律を歌う、旋律や和声を書きとるなど、音楽の構造(特に和声進行)を理解しながら学習する。クラスによって学習する調や進度が少しずつ変わることがある。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
音楽の基礎的能力を付けるため、楽典(特に音程と諸調の音階の構成音)を予習し、継続して授業に出席し、私語をせず授業内容に集中する。また授業で学んだ課題を繰り返し復習し他の調に移調して歌い、弾き、記譜することが必要である。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
後期試験	40
前期試験	40
主体的な授業参加	20

教科書			
教科書1	適宜プリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
オルガニスト、作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ソルフェージュについて説明。 音部記号、音階、音名、以降楽典と関係付けながら進める。
2	音階の説明(ハ長調、イ短調で) 高音部譜表にて2度音程の学習、音符の説明
3	ハ長調、イ短調にて 半音階。2度音程で視唱 2/4、3/4、4/4 拍子(以後 28 週まで学習する各音程を含む課題)
4	ハ長調、イ短調にて 3度音程。旋律聴音開始(以後 28 週まで聴音と視唱)
5	ハ長調、イ短調にて 3度音程。2度3度上下調に移調
6	近親調の学習 4度5度音程。
7	ハ長調、イ短調にて 6度7度音程。3/8 拍子、6/8 拍子
8	ハ長調、イ短調にて 8度音程。低音部譜表の学習、密集四声体聴音開始
9	ト長調にて 少しずつそれぞれの音程、リズムを訓練
10	ホ短調にて
11	ヘ長調にて
12	ニ短調にて
13	前期聴音課題とテスト
14	前期学習の復習とまとめ
15	新曲視唱課題学習とテスト

16	前期の復習 簡単なリズムのポップス名曲の視唱
17	前期で学習した各訓練の続行(27週まで)、 4小節の簡単な弾き歌い
18	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
19	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
20	細分化したリズムの視唱と聴音 4小節の簡単な弾き歌い
21	細分化したリズムの視唱と聴音 やや複雑なポップス名曲の視唱
22	混合拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
23	変拍子の視唱 8小節のやや複雑な弾き歌い
24	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
25	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
26	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
27	前期で学習した以外の諸調にて さらに進んだ課題の学習 8小節のやや複雑な弾き歌い
28	後期学習の復習とまとめ
29	聴音学習と試験
30	新曲視唱学習と試験

科目名	ソルフェージュ2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	河合 摂子、○田中 伴子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
ソルフェージュ1の授業内容を継続するが、バランスのとれたソルフェージュ能力を持つこと、表現や音に対する細やかな感覚を持つことを図る。 ソルフェージュ1よりやや複雑な旋律(単・複)、開離四声体の聴音、やや複雑な新曲視唱、弾き歌いができるようにする。	
授業概要	
ソルフェージュ1と同様の訓練を引き続きさらに多くの調で行うが、四声体が開離配置になり、複旋律聴音が増える。クラスの進展によりさらに高度な能力を養うため学習範囲を広げる。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
継続して受講することは言うまでもないが、バランスのとれたソルフェージュ能力を持てるように、自分の弱い点を知り克服しようとする意志を持ってほしい。内容が高度になってくるので楽曲全般を学習し基礎和声法やコード理論を理解して応用できるように対応し、授業で学んだ内容を他の調でも復習することが重要である。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
主体的な授業参加	20
前期試験	40
後期試験	40

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ソルフェージュ1の復習 開離四声体聴音の学習(28週まで)
2	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)
3	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
4	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
5	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
6	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
7	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
8	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
9	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
10	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、12小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
11	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。

	視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
12	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
13	復習
14	聴音小試験
15	新曲視唱小試験
16	前期の復習
17	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
18	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
19	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
20	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
21	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
22	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
23	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、混合拍子の課題視唱
24	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、変拍子の課題視唱
25	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
26	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
27	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
28	復習
29	聴音小試験
30	新曲視唱小試験

科目名	ソルフェージュ2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	河合 摂子、○川喜多 史子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
ソルフェージュ1の授業内容を継続するが、バランスのとれたソルフェージュ能力を持つこと、表現や音に対する細やかな感覚を持つことを図る。 ソルフェージュ1よりやや複雑な旋律(単・複)、開離四声体の聴音、やや複雑な新曲視唱、弾き歌いができるようにする。	
授業概要	
ソルフェージュ1と同様の訓練を引き続きさらに多くの調で行うが、四声体が開離配置になり、複旋律聴音が増える。クラスの進展によりさらに高度な能力を養うため学習範囲を広げる。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
継続して受講することは言うまでもないが、バランスのとれたソルフェージュ能力を持てるように、自分の弱い点を知り克服しようとする意志を持ってほしい。内容が高度になってくるので楽曲全般を学習し基礎和声法やコード理論を理解して応用できるように対応し、授業で学んだ内容を他の調でも復習することが重要である。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
主体的な授業参加	20
前期試験	40
後期試験	40

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ソルフェージュ1の復習 開離四声体聴音の学習(28週まで)
2	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)
3	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
4	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
5	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
6	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
7	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
8	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
9	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
10	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、12小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
11	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。

	視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
12	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
13	復習
14	聴音小試験
15	新曲視唱小試験
16	前期の復習
17	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
18	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
19	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
20	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
21	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
22	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
23	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、混合拍子の課題視唱
24	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、変拍子の課題視唱
25	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
26	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
27	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
28	復習
29	聴音小試験
30	新曲視唱小試験

科目名	ソルフェージュ2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	河合 摂子、○田坂 千禎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
ソルフェージュ1の授業内容を継続するが、バランスのとれたソルフェージュ能力を持つこと、表現や音に対する細やかな感覚を持つことを図る。 ソルフェージュ1よりやや複雑な旋律(単・複)、開離四声体の聴音、やや複雑な新曲視唱、弾き歌いができるようにする。	
授業概要	
ソルフェージュ1と同様の訓練を引き続きさらに多くの調で行うが、四声体が開離配置になり、複旋律聴音が増える。クラスの進展によりさらに高度な能力を養うため学習範囲を広げる。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
継続して受講することは言うまでもないが、バランスのとれたソルフェージュ能力を持てるように、自分の弱い点を知り克服しようとする意志を持ってほしい。内容が高度になってくるので楽曲全般を学習し基礎和声法やコード理論を理解して応用できるように対応し、授業で学んだ内容を他の調でも復習することが重要である。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
主体的な授業参加	20
前期試験	40
後期試験	40

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	オルガニスト、作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ソルフェージュ1の復習 開離四声体聴音の学習(28週まで)
2	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)
3	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
4	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
5	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
6	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
7	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
8	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
9	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
10	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、12小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習

11	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、12小節以上の聴音(含借用和音)、 転調の学習
12	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、12小節以上の聴音(含借用和音)、 転調の学習
13	復習
14	聴音小試験
15	新曲視唱小試験
16	前期の復習
17	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)
18	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)
19	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)、アルト譜表の理解と視唱
20	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)、アルト譜表の理解と視唱
21	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)、テノール譜表の理解と視唱
22	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)、テノール譜表の理解と視唱
23	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)、混合拍子の課題視唱
24	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)、変拍子の課題視唱
25	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
26	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
27	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
28	復習
29	聴音小試験
30	新曲視唱小試験

科目名	ソルフェージュ2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	○岡本 時子、河合 摂子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
ソルフェージュ1の授業内容を継続するが、バランスのとれたソルフェージュ能力を持つこと、表現や音に対する細やかな感覚を持つことを図る。 ソルフェージュ1よりやや複雑な旋律(単・複)、開離四声体の聴音、やや複雑な新曲視唱、弾き歌いができるようにする。	
授業概要	
ソルフェージュ1と同様の訓練を引き続きさらに多くの調で行うが、四声体が開離配置になり、複旋律聴音が増える。クラスの進展によりさらに高度な能力を養うため学習範囲を広げる。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
継続して受講することは言うまでもないが、バランスのとれたソルフェージュ能力を持てるように、自分の弱い点を知り克服しようとする意志を持ってほしい。内容が高度になってくるので楽曲全般を学習し基礎和声法やコード理論を理解して応用できるように対応し、授業で学んだ内容を他の調でも復習することが重要である。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
主体的な授業参加	20
前期試験	40
後期試験	40

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ソルフェージュ1の復習 開離四声体聴音の学習(28週まで)
2	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)
3	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
4	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
5	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
6	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
7	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
8	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
9	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、簡単な複旋律聴音
10	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28週まで)、12小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
11	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28週まで)。

	視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
12	# b 2つまでの長短調とハ短調での聴音(28 週まで)。 視唱(含ポップス)、弾き歌い(28 週まで)、やや複雑な単旋律聴音(28 週まで)、12 小節以上の聴音(含借用和音)、転調の学習
13	復習
14	聴音小試験
15	新曲視唱小試験
16	前期の復習
17	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
18	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)
19	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
20	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、アルト譜表の理解と視唱
21	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
22	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、テノール譜表の理解と視唱
23	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、混合拍子の課題視唱
24	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、変拍子の課題視唱
25	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
26	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
27	前期と同様に聴音(四声体、単・複旋律)視唱(含ポップス)弾き歌い(28 週まで)、強弱記号等を伴った課題の視唱
28	復習
29	聴音小試験
30	新曲視唱小試験

科目名	声楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	樽谷 昌子、○村井 幹子				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標	
基礎的な発声法を学習しながら、より豊かな音楽性の習得を目的とし、舞台芸術学科の各分野での表現に活かしていく。	
授業概要	
各担当教員の指導の下に、各自の個性に応じた曲を選曲し、歌唱表現について研究する。	
<試験課題曲>	
前期: イタリア古典歌曲集(全音出版) I・II巻より1曲。(移調は可とする)	
後期: 任意の日本歌曲1曲。(移調は可とする)	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
前期のイタリア歌曲においては、イタリア語を何回も声に出して発音の練習をする。楽譜のリズムに合わせて読むことも大事である。	
後期の日本歌曲では、日本語の鼻濁音や子音の発音に留意し受講すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験	70%
平常点	30%

教科書			
教科書1	各担当教員が各自に相応しい課題を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	声楽家。歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	受講生は、イタリア古典歌曲集Ⅰ・Ⅱ巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
2	受講生は、イタリア古典歌曲集Ⅰ・Ⅱ巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
3	受講生は、イタリア古典歌曲集Ⅰ・Ⅱ巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
4	受講生は、イタリア古典歌曲集Ⅰ・Ⅱ巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
5	受講生は、イタリア古典歌曲集Ⅰ・Ⅱ巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
6	受講生は、イタリア古典歌曲集Ⅰ・Ⅱ巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
7	受講生は、イタリア古典歌曲集Ⅰ・Ⅱ巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
8	受講生は、イタリア古典歌曲集Ⅰ・Ⅱ巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
9	受講生は、イタリア古典歌曲集Ⅰ・Ⅱ巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
10	受講生は、イタリア古典歌曲集Ⅰ・Ⅱ巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
11	前期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。

12	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
13	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
14	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
15	声楽実技試験を受ける。前期の総括をし、後期課題、個々の目標を教員が提示する。
16	後期課題の任意の日本歌曲を担当教員と相談し、複数の候補曲の中から各自が選択しレッスンを受ける。日本語の発音にも慎重に取り組む。
17	前期のイタリア語の発声と日本語の発声では異なる点もあるが、そのことを理解して作品研究と演奏に取り組む。
18	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
19	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
20	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
21	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
22	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
23	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
24	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
25	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
26	後期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。
27	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
28	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
29	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
30	後期声楽試験。年間の総括と、次年度への目標、技術向上につながる課題を教員が提示する。

科目名	声楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	河田 早紀、○村井 幹子				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標	
基礎的な発声法を学習しながら、より豊かな音楽性の習得を目的とし、舞台芸術学科の各分野での表現に活かしていく。	
授業概要	
各担当教員の指導の下に、各自の個性に応じた曲を選曲し、歌唱表現について研究する。	
<試験課題曲>	
前期: イタリア古典歌曲集(全音出版) I・II巻より1曲。(移調は可とする)	
後期: 任意の日本歌曲1曲。(移調は可とする)	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
前期のイタリア歌曲においては、イタリア語を何回も声に出して発音の練習をする。楽譜のリズムに合わせて読むことも大事である。	
後期の日本歌曲では、日本語の鼻濁音や子音の発音に留意し受講すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験	70%
平常点	30%

教科書			
教科書1	各担当教員が各自に相応しい課題を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	声楽家。歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
2	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
3	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
4	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
5	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
6	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
7	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
8	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
9	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
10	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
11	前期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。

12	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
13	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
14	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
15	声楽実技試験を受ける。前期の総括をし、後期課題、個々の目標を教員が提示する。
16	後期課題の任意の日本歌曲を担当教員と相談し、複数の候補曲の中から各自が選択しレッスンを受ける。日本語の発音にも慎重に取り組む。
17	前期のイタリア語の発声と日本語の発声では異なる点もあるが、そのことを理解して作品研究と演奏に取り組む。
18	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
19	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
20	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
21	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
22	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
23	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
24	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
25	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
26	後期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。
27	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
28	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
29	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
30	後期声楽試験。年間の総括と、次年度への目標、技術向上につながる課題を教員が提示する。

科目名	声楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	中川 恵理子、○村井 幹子				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標	
基礎的な発声法を学習しながら、より豊かな音楽性の習得を目的とし、舞台芸術学科の各分野での表現に活かしていく。	
授業概要	
各担当教員の指導の下に、各自の個性に応じた曲を選曲し、歌唱表現について研究する。	
＜試験課題曲＞	
前期: イタリア古典歌曲集(全音出版) I・II巻より1曲。(移調は可とする)	
後期: 任意の日本歌曲1曲。(移調は可とする)	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
前期のイタリア歌曲においては、イタリア語を何回も声に出して発音の練習をする。楽譜のリズムに合わせて読むことも大事である。	
後期の日本歌曲では、日本語の鼻濁音や子音の発音に留意し受講すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験	70%
平常点	30%

教科書			
教科書1	各担当教員が各自に相応しい課題を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	声楽家。歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
2	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
3	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
4	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
5	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
6	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
7	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
8	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
9	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
10	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
11	前期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。

12	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
13	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
14	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
15	声楽実技試験を受ける。前期の総括をし、後期課題、個々の目標を教員が提示する。
16	後期課題の任意の日本歌曲を担当教員と相談し、複数の候補曲の中から各自が選択しレッスンを受ける。日本語の発音にも慎重に取り組む。
17	前期のイタリア語の発声と日本語の発声では異なる点もあるが、そのことを理解して作品研究と演奏に取り組む。
18	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
19	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
20	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
21	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
22	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
23	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
24	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
25	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
26	後期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。
27	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
28	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
29	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
30	後期声楽試験。年間の総括と、次年度への目標、技術向上につながる課題を教員が提示する。

科目名	声楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	南川 良治、○村井 幹子				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標	
基礎的な発声法を学習しながら、より豊かな音楽性の習得を目的とし、舞台芸術学科の各分野での表現に活かしていく。	
授業概要	
各担当教員の指導の下に、各自の個性に応じた曲を選曲し、歌唱表現について研究する。	
<試験課題曲>	
前期:イタリア古典歌曲集(全音出版)Ⅰ・Ⅱ巻より1曲。(移調は可とする)	
後期:任意の日本歌曲1曲。(移調は可とする)	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
前期のイタリア歌曲においては、イタリア語を何回も声に出して発音の練習をする。楽譜のリズムに合わせて読むことも大事である。	
後期の日本歌曲では、日本語の鼻濁音や子音の発音に留意し受講すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験	70%
平常点	30%

教科書			
教科書1	各担当教員が各自に相応しい課題を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	声楽家。歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
2	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
3	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
4	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
5	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
6	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
7	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
8	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
9	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
10	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
11	前期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。

12	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
13	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
14	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
15	声楽実技試験を受ける。前期の総括をし、後期課題、個々の目標を教員が提示する。
16	後期課題の任意の日本歌曲を担当教員と相談し、複数の候補曲の中から各自が選択しレッスンを受ける。日本語の発音にも慎重に取り組む。
17	前期のイタリア語の発声と日本語の発声では異なる点もあるが、そのことを理解して作品研究と演奏に取り組む。
18	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
19	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
20	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
21	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
22	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
23	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
24	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
25	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
26	後期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。
27	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
28	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
29	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
30	後期声楽試験。年間の総括と、次年度への目標、技術向上につながる課題を教員が提示する。

科目名	声楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	田代 恭也、○村井 幹子				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標	
基礎的な発声法を学習しながら、より豊かな音楽性の習得を目的とし、舞台芸術学科の各分野での表現に活かしていく。	
授業概要	
各担当教員の指導の下に、各自の個性に応じた曲を選曲し、歌唱表現について研究する。	
<試験課題曲>	
前期:イタリア古典歌曲集(全音出版)Ⅰ・Ⅱ巻より1曲。(移調は可とする)	
後期:任意の日本歌曲1曲。(移調は可とする)	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
前期のイタリア歌曲においては、イタリア語を何回も声に出して発音の練習をする。楽譜のリズムに合わせて読むことも大事である。	
後期の日本歌曲では、日本語の鼻濁音や子音の発音に留意し受講すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験	70%
平常点	30%

教科書			
教科書1	各担当教員が各自に相応しい課題を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	声楽家。歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
2	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
3	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
4	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
5	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
6	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
7	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
8	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
9	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
10	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
11	前期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。

12	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
13	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
14	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
15	声楽実技試験を受ける。前期の総括をし、後期課題、個々の目標を教員が提示する。
16	後期課題の任意の日本歌曲を担当教員と相談し、複数の候補曲の中から各自が選択しレッスンを受ける。日本語の発音にも慎重に取り組む。
17	前期のイタリア語の発声と日本語の発声では異なる点もあるが、そのことを理解して作品研究と演奏に取り組む。
18	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
19	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
20	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
21	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
22	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
23	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
24	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
25	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
26	後期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。
27	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
28	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
29	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
30	後期声楽試験。年間の総括と、次年度への目標、技術向上につながる課題を教員が提示する。

科目名	声楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	河田 早紀、○村井 幹子				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標	
基礎的な発声法を学習しながら、より豊かな音楽性の習得を目的とし、舞台芸術学科の各分野での表現に活かしていく。	
授業概要	
各担当教員の指導の下に、各自の個性に応じた曲を選曲し、歌唱表現について研究する。	
<試験課題曲>	
前期:イタリア古典歌曲集(全音出版)Ⅰ・Ⅱ巻より1曲。(移調は可とする)	
後期:任意の日本歌曲1曲。(移調は可とする)	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
前期のイタリア歌曲においては、イタリア語を何回も声に出して発音の練習をする。楽譜のリズムに合わせて読むことも大事である。	
後期の日本歌曲では、日本語の鼻濁音や子音の発音に留意し受講すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験	70%
平常点	30%

教科書			
教科書1	各担当教員が各自に相応しい課題を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	声楽家。歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
2	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
3	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
4	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
5	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
6	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
7	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
8	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
9	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
10	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
11	前期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。

12	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
13	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
14	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
15	声楽実技試験を受ける。前期の総括をし、後期課題、個々の目標を教員が提示する。
16	後期課題の任意の日本歌曲を担当教員と相談し、複数の候補曲の中から各自が選択しレッスンを受ける。日本語の発音にも慎重に取り組む。
17	前期のイタリア語の発声と日本語の発声では異なる点もあるが、そのことを理解して作品研究と演奏に取り組む。
18	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
19	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
20	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
21	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
22	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
23	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
24	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
25	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
26	後期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。
27	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
28	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
29	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
30	後期声楽試験。年間の総括と、次年度への目標、技術向上につながる課題を教員が提示する。

科目名	声楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	磯本 龍成、○村井 幹子				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標	
基礎的な発声法を学習しながら、より豊かな音楽性の習得を目的とし、舞台芸術学科の各分野での表現に活かしていく。	
授業概要	
各担当教員の指導の下に、各自の個性に応じた曲を選曲し、歌唱表現について研究する。	
<試験課題曲>	
前期:イタリア古典歌曲集(全音出版)Ⅰ・Ⅱ巻より1曲。(移調は可とする)	
後期:任意の日本歌曲1曲。(移調は可とする)	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
前期のイタリア歌曲においては、イタリア語を何回も声に出して発音の練習をする。楽譜のリズムに合わせて読むことも大事である。	
後期の日本歌曲では、日本語の鼻濁音や子音の発音に留意し受講すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験	70%
平常点	30%

教科書			
教科書1	各担当教員が各自に相応しい課題を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	声楽家。歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
2	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
3	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
4	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
5	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
6	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
7	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
8	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
9	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
10	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
11	前期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。

12	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
13	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
14	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
15	声楽実技試験を受ける。前期の総括をし、後期課題、個々の目標を教員が提示する。
16	後期課題の任意の日本歌曲を担当教員と相談し、複数の候補曲の中から各自が選択しレッスンを受ける。日本語の発音にも慎重に取り組む。
17	前期のイタリア語の発声と日本語の発声では異なる点もあるが、そのことを理解して作品研究と演奏に取り組む。
18	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
19	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
20	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
21	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
22	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
23	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
24	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
25	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
26	後期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。
27	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
28	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
29	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
30	後期声楽試験。年間の総括と、次年度への目標、技術向上につながる課題を教員が提示する。

科目名	声楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	岩城 拓也、○村井 幹子				
クラス名	舞台芸術学科				

授業目的と到達目標	
基礎的な発声法を学習しながら、より豊かな音楽性の習得を目的とし、舞台芸術学科の各分野での表現に活かしていく。	
授業概要	
各担当教員の指導の下に、各自の個性に応じた曲を選曲し、歌唱表現について研究する。	
<試験課題曲>	
前期:イタリア古典歌曲集(全音出版)Ⅰ・Ⅱ巻より1曲。(移調は可とする)	
後期:任意の日本歌曲1曲。(移調は可とする)	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
前期のイタリア歌曲においては、イタリア語を何回も声に出して発音の練習をする。楽譜のリズムに合わせて読むことも大事である。	
後期の日本歌曲では、日本語の鼻濁音や子音の発音に留意し受講すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験	70%
平常点	30%

教科書			
教科書1	各担当教員が各自に相応しい課題を与える。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	声楽家。歌曲の演奏活動の経験を活かし表現力を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
2	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
3	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
4	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
5	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。
6	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
7	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
8	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
9	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
10	受講生は、イタリア古典歌曲集 I・II 巻より、担当教員と相談し各自の声質に合う曲を担当教員に選択してもらいレッスンを受ける。発声・読譜などの基礎を学び、声楽作品の研究と演奏法を学ぶ。イタリア語の発音を学ぶ。担当教員と相談し、レパートリーを増やしていく。
11	前期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。

12	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
13	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
14	前期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
15	声楽実技試験を受ける。前期の総括をし、後期課題、個々の目標を教員が提示する。
16	後期課題の任意の日本歌曲を担当教員と相談し、複数の候補曲の中から各自が選択しレッスンを受ける。日本語の発音にも慎重に取り組む。
17	前期のイタリア語の発声と日本語の発声では異なる点もあるが、そのことを理解して作品研究と演奏に取り組む。
18	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
19	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
20	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。
21	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
22	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
23	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
24	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
25	美しい日本語の発声を習得しながら、様々な日本歌曲の作品を研究する。曲中の強弱、フレーズの流れ、拍子の変化など、日本歌曲の特有な表現などを研究する。
26	後期試験で歌う曲を担当教員と相談し決める。
27	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
28	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
29	後期試験曲を暗譜し、歌詞の内容を十分に把握する。豊かな表現を目指し、曲を仕上げていく。
30	後期声楽試験。年間の総括と、次年度への目標、技術向上につながる課題を教員が提示する。

科目名	教育声楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	3
授業期間	2023年度 通年	形態	レッスン(代表採点)		
教員名	秋本 靖仁、磯本 龍成、岩城 拓也、河田 早紀、篠部 信宏、田代 睦美、田代 恭也、樽谷 昌子、中川 恵理子、永松 圭子、○東野 亜弥子、福井 雅志、松井 るみ、水口 聡、南川 良治、三原 剛、村井 幹子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>基礎的発声法を学習しながら、各自の専門分野においてより豊かな音楽性を習得する為、声楽を学ぶ。          学校教育(音楽科)や音楽教育の現場において将来教職に就く者にとって授業の発信力となる「発声法」の修得や「読譜力」の充実を目指す。</p>	
授業概要	
<p>担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。          《試験曲》          前期:読譜力テスト(コンコーネ 50 番より 5 曲 試験当日 1 曲指定)          後期:声楽作品歌唱テスト</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
しっかりとした予習・復習	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験	100

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
読譜カテスト不合格者及びレッスン受講回数 <sup>が</sup> 20回に達していない場合は単位認定出来ない。
教員実務経験
声楽家、オペラ歌手、宗教曲などのソリスト。 演奏活動や指導者としての経験を活かし技術、表現力を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
2	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
3	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
4	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
5	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
6	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
7	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
8	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
9	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
10	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
11	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
12	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。



科目名	教育声楽2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	3
授業期間	2023年度 通年	形態	レッスン(代表採点)		
教員名	秋本 靖仁、磯本 龍成、岩城 拓也、河田 早紀、篠部 信宏、田代 睦美、田代 恭也、樽谷 昌子、中川 恵理子、永松 圭子、○東野 亜弥子、福井 雅志、松井 るみ、水口 聡、南川 良治、三原 剛、村井 幹子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>基礎的発声法を学習しながら、各自の専門分野においてより豊かな音楽性を習得する為、声楽を学ぶ。          学校教育(音楽科)や音楽教育の現場において将来教職に就く者にとって授業の発信力となる「発声法」の修得や「読譜力」の充実を目指す。</p>	
授業概要	
<p>担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。          《試験曲》          前期:読譜力テスト(コンコーネ 50 番より 5 曲 試験当日 1 曲指定)          後期:声楽作品歌唱テスト</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
しっかりとした予習・復習	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験	100

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
読譜カテスト不合格者及びレッスン受講回数 <sup>が</sup> 20回に達していない場合は単位認定出来ない。
教員実務経験
声楽家、オペラ歌手、合唱指導者、宗教曲などのソリスト。 演奏活動や指導者としての経験を活かし技術、表現力を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
2	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
3	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
4	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
5	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
6	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
7	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究、及び各々のレベルにあった声楽作品の歌唱研究。
8	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
9	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
10	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
11	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。
12	担当教員の指導のもとに各自に応じた選曲をし、歌唱表現について研究する。 発声など基礎的な研究に加えて課題曲その他の声楽作品の演奏研究。



科目名	合唱1【音楽学科】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	秋本 靖仁、磯本 龍成、永松 圭子、○福井 雅志				
クラス名					

授業目的と到達目標	
各曲を全員で呼吸を合わせ奏でる事で合唱を理解し豊かな心を育てる。そして12月に開催される特別演奏会を目指すことで心をつにし、今後社会で協調性のある人間の育成を目指す。	
授業概要	
基本、毎週4人の講師がそれぞれ4部屋に分かれ4パートを指導し練習し、時には全体練習を行う。そして公演前には指揮者とのオーケストラリハーサルを行い本番を目指す。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
12月に行われる「大阪芸術大学特別演奏会」に出演すること。 また上記の特別演奏会の直前の特別練習(指揮者練習・オーケストラ合わせなど)に出席すること。 毎週の授業に積極的に受講すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業への積極的参加度	100

教科書			
教科書1	指定の楽譜を授業内で購入		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			

出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	秋本靖仁 これまでプロ合唱団神戸市混声合唱団に14年所属し合唱団員として演奏してきた経験や合唱指導者や合唱指揮者としての経験を活かし、合唱することの喜び、魅力を伝える。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ガイダンス(授業での心構え、授業概要) 過去の特別演奏会を鑑賞することもある。 パート分け(ソプラノ・アルト・テノール・バス) 声を出す上での身体の使い方、発声練習(発声については毎回の授業に於いて譜読みと並行して指導する)
2	特別演奏会に向けての譜読みを開始 パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱①
3	パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱②
4	パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱③
5	パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱④
6	パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱⑤
7	パートに分かれて階名、母音、歌詞よる歌唱⑥
8	全体練習①(それぞれのパートの音の重なりを感じる)
9	全体練習②(それぞれのパートの音の重なりを感じる)
10	パートに分かれて歌詞による歌唱①
11	パートに分かれて歌詞による歌唱②
12	パートに分かれて歌詞による歌唱③
13	パートに分かれて歌詞による歌唱④
14	パートに分かれて歌詞による歌唱⑤
15	全体練習③(前期のまとめ)
16	パートに分かれて歌詞による歌唱⑥
17	パートに分かれて歌詞による歌唱⑦
18	パートに分かれて歌詞による歌唱⑧
19	パートに分かれて歌詞による歌唱⑨
20	パートに分かれて歌詞による歌唱⑩
21	全体練習④(全曲を通して練習)
22	全体練習⑤(全曲を通して練習)

23	パートに分かれて歌詞による歌唱⑪
24	パートに分かれて歌詞による歌唱⑫
25	全体練習⑥(歌い込み)
26	全体練習⑦(歌い込み)
27	特別演奏会の演奏を鑑賞しディスカッション
28	混声4部合唱曲を用いてハーモニーを養う①
29	混声4部合唱曲を用いてハーモニーを養う②
30	全体でこれまでのまとめ、発表など

科目名	ピアノ1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	レッスン(代表採点)		
教員名	秋山 裕子、○今川 裕代、遠藤 玲子、岡田 陽子、笠原 純子、片山 優陽、河合 摂子、川喜多 史子、木田 志津加、熊本 マリ、黒瀬 紀久子、兒玉 千沙子、小林 かずみ、阪本 朋子、阪本 久美、島本 淳子、高久 理恵、多川 響子、田中 伴子、田中 正也、辻川 謙次、仲道 祐子、中村 佳世子、中村 勝樹、初瀬川 未雪、深井 千聡、三木 康子、宮原 雄大、山崎 葉子、山田 真由美				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>音楽の基礎としてクラシックのピアノを学ぶ。ピアノを弾くことにより、読譜力、和声感覚、音楽の全体像を捉える力などを身につけ、各自の専攻する器楽や声楽の演奏の向上の助けとなることを目的とする。</p> <p>また必要に応じて中学・高校音楽科教職課程にも対応し、楽譜を正確に読み取りピアノで表現できることを目標とする。</p>	
授業概要	
<p>対面授業 週1回 20分の個人レッスン。</p> <p>1年次前期は経験者、初心者に係わらずピアノ演奏の基礎から指導する。</p> <p>それぞれの進度に応じて担当教員から出される課題(自由曲)に取り組み、ピアノ演奏に必要な技術の習得を目指す。</p> <p>基礎をしっかり身に付ける事を重要視し、前期試験は行わず後期試験(自由曲)でその成果を見る。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>毎日の練習を欠かさないこと。</p> <p>楽語など、事前に調べておくこと。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
後期実技試験	100

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	<p>レッスン受講回数が20回に満たない場合は単位認定できない。</p> <p>教職課程を履修する学生が教育実習に行くためには、定期試験とは別に実施される教職認定試験(2年次~3年次)に、合格しなくてはならない。</p>
教員実務経験	<p>教員の豊富な経験により、学生の技量に合わせた選曲と指導を行う。</p>

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	進度の見極めと前期課題の決定
2	個人の進度に合わせたレッスン1
3	個人の進度に合わせたレッスン2
4	個人の進度に合わせたレッスン3
5	個人の進度に合わせたレッスン4
6	個人の進度に合わせたレッスン5
7	個人の進度に合わせたレッスン6
8	個人の進度に合わせたレッスン7
9	個人の進度に合わせたレッスン8
10	個人の進度に合わせたレッスン9
11	個人の進度に合わせたレッスン10
12	個人の進度に合わせたレッスン11
13	個人の進度に合わせたレッスン12
14	個人の進度に合わせたレッスン13
15	個人の進度に合わせたレッスン14 後期課題の提案
16	後期課題の決定 個人の進度に合わせたレッスン1
17	個人の進度に合わせたレッスン2
18	個人の進度に合わせたレッスン3

19	個人の進度に合わせたレッスン4
20	個人の進度に合わせたレッスン5
21	個人の進度に合わせたレッスン6
22	個人の進度に合わせたレッスン7
23	個人の進度に合わせたレッスン8
24	個人の進度に合わせたレッスン9
25	個人の進度に合わせたレッスン10
26	個人の進度に合わせたレッスン11
27	個人の進度に合わせたレッスン12
28	個人の進度に合わせたレッスン13
29	個人の進度に合わせたレッスン14
30	後期試験に向けての最終レッスン

科目名	ピアノ2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	レッスン(代表採点)		
教員名	秋山 裕子、○今川 裕代、遠藤 玲子、岡田 陽子、笠原 純子、片山 優陽、河合 摂子、川喜多 史子、木田 志津加、熊本 マリ、黒瀬 紀久子、兒玉 千沙子、小林 かずみ、阪本 朋子、阪本 久美、島本 淳子、高久 理恵、多川 響子、田中 伴子、田中 正也、辻川 謙次、仲道 祐子、中村 佳世子、中村 勝樹、初瀬川 未雪、深井 千聡、三木 康子、宮原 雄大、山崎 葉子、山田 真由美				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽の基礎としてクラシックのピアノを学ぶ。ピアノを弾くことにより、読譜力、和声感覚、音楽の全体像を捉える力などを身につけ、各自が専攻するコースの、専門科目の理解の助けとなることを目的とする。また、必要に応じて中学・高校音楽科教職課程にも対応し、楽譜を正確に読み取りピアノで表現できることを目標とする。	
授業概要	
対面授業 週1回 20分の個人レッスン。 1年次で学んだ事を更に深く学習する。それぞれの進度に応じて担当教員から出される課題(自由曲)に取り組み、ピアノ演奏に必要な技術の更なる習得を目指す。前期試験(自由曲)、後期試験(自由曲)でその成果を見る。 教職課程履修者は認定試験に向けて準備する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
毎日の練習を欠かさないこと。 楽語などは事前に調べておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期・後期実技試験	100

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	<p>レッスン受講回数が20回に満たない場合は単位認定できない。</p> <p>教職課程を履修する学生が教育実習に行くためには、定期試験とは別に実施される教職認定試験(2年次～3年次)に、合格しなくてはならない。</p>
教員実務経験	<p>教員の豊富な経験により、学生の技量に合わせた選曲と指導を行う。</p>

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	前期課題の決定 教職課程を履修している学生に対しては、教職認定試験の課題曲も決定する
2	個人の進度に合わせたレッスン1
3	個人の進度に合わせたレッスン2
4	個人の進度に合わせたレッスン3
5	個人の進度に合わせたレッスン4
6	個人の進度に合わせたレッスン5
7	個人の進度に合わせたレッスン6
8	個人の進度に合わせたレッスン7
9	個人の進度に合わせたレッスン8
10	個人の進度に合わせたレッスン9
11	個人の進度に合わせたレッスン10
12	個人の進度に合わせたレッスン11
13	個人の進度に合わせたレッスン12
14	個人の進度に合わせたレッスン13
15	前期試験に向けてのレッスン
16	後期課題の決定及び教職認定試験を受験する学生の受験曲確認 個人の進度に合わせたレッスン1
17	個人の進度に合わせたレッスン2
18	個人の進度に合わせたレッスン3

19	個人の進度に合わせたレッスン4
20	個人の進度に合わせたレッスン5
21	個人の進度に合わせたレッスン6
22	個人の進度に合わせたレッスン7
23	個人の進度に合わせたレッスン8
24	個人の進度に合わせたレッスン9
25	個人の進度に合わせたレッスン10
26	個人の進度に合わせたレッスン11
27	個人の進度に合わせたレッスン12
28	個人の進度に合わせたレッスン13
29	個人の進度に合わせたレッスン14
30	後期試験に向けての最終レッスン

科目名	ピアノ3	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	レッスン(代表採点)		
教員名	秋山 裕子、○今川 裕代、遠藤 玲子、岡田 陽子、笠原 純子、片山 優陽、河合 摂子、川喜多 史子、木田 志津加、熊本 マリ、黒瀬 紀久子、兒玉 千沙子、小林 かずみ、阪本 朋子、阪本 久美、島本 淳子、高久 理恵、多川 響子、田中 伴子、田中 正也、辻川 謙次、仲道 祐子、中村 佳世子、中村 勝樹、初瀬川 未雪、深井 千聡、三木 康子、宮原 雄大、山崎 葉子、山田 真由美				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽の基礎としてクラシックのピアノを学ぶ。ピアノを弾くことにより、読譜力、和声感覚、音楽の全体像を捉える力などを身につけ、各自が専攻するコースの、専門科目の理解の助けとなることを目的とする。また、必要に応じて中学・高校音楽科教職課程にも対応し、楽譜を正確に読み取りピアノで表現できることを目標とする。	
授業概要	
対面授業 週1回 20分の個人レッスン。 1・2年次で学んだ事を更に深く学習する。それぞれの進度に応じて担当教員から出される課題(自由曲)に取り組み、ピアノ演奏に必要な技術の更なる習得を目指す。前期試験(自由曲)、後期試験(自由曲)でその成果を見る。 教職課程履修者は認定試験に向けて準備する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
毎日の練習を欠かさないこと。 楽語などは事前に調べておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期・後期実技試験	100

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	<p>レッスン受講回数が20回に満たない場合は単位認定できない。</p> <p>教職課程を履修する学生が教育実習に行くためには、定期試験とは別に実施される教職認定試験(2年次～3年次)に、合格しなくてはならない。</p>
教員実務経験	<p>教員の豊富な経験により、学生の技量に合わせた選曲と指導を行う。</p>

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	前期課題の決定 教職認定試験の受験が必要な学生に対しては、その課題曲の決定
2	個人の進度に合わせたレッスン1
3	個人の進度に合わせたレッスン2
4	個人の進度に合わせたレッスン3
5	個人の進度に合わせたレッスン4
6	個人の進度に合わせたレッスン5
7	個人の進度に合わせたレッスン6
8	個人の進度に合わせたレッスン7
9	個人の進度に合わせたレッスン8
10	個人の進度に合わせたレッスン9
11	個人の進度に合わせたレッスン10
12	個人の進度に合わせたレッスン11
13	個人の進度に合わせたレッスン12
14	個人の進度に合わせたレッスン13
15	前期試験に向けての最終レッスン
16	後期課題の決定及び個人の進度に合わせたレッスン1
17	個人の進度に合わせたレッスン2
18	個人の進度に合わせたレッスン3
19	個人の進度に合わせたレッスン4

20	個人の進度に合わせたレッスン5
21	個人の進度に合わせたレッスン6
22	個人の進度に合わせたレッスン7
23	個人の進度に合わせたレッスン8
24	個人の進度に合わせたレッスン9
25	個人の進度に合わせたレッスン10
26	個人の進度に合わせたレッスン11
27	個人の進度に合わせたレッスン12
28	個人の進度に合わせたレッスン13
29	個人の進度に合わせたレッスン14
30	後期試験に向けての最終レッスン

科目名	教育ピアノ1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	3
授業期間	2023年度 通年	形態	レッスン(代表採点)		
教員名	秋山 裕子、○今川 裕代、遠藤 玲子、岡田 陽子、笠原 純子、片山 優陽、河合 摂子、川喜多 史子、木田 志津加、熊本 マリ、黒瀬 紀久子、兒玉 千沙子、小林 かずみ、阪本 朋子、阪本 久美、島本 淳子、高久 理恵、多川 響子、田中 伴子、田中 正也、辻川 謙次、仲道 祐子、中村 佳世子、中村 勝樹、初瀬川 未雪、深井 千聡、三木 康子、宮原 雄大、山崎 葉子、山田 真由美				
クラス名					

授業目的と到達目標	
教育実習や教員採用試験を受ける際に有用な、又、中学・高校音楽教師やピアノ等の教師として必要なピアノ演奏能力と指導力を身につける事を目的とする。 クラシックピアノの演奏技術を基礎から学び、音楽的感性と表現力の向上を目標とする。	
授業概要	
対面授業 週1回 30分の個人レッスン。 前期課題:スケール(全調とするが、個々の進度に応じて少なくとも#b3つまで)・自由曲 後期課題:エチュード(指定された課題曲から任意の1曲)・自由曲 いずれも担当教員とよく相談の上、個々の段階に応じた選曲を心がけ、演奏技術の向上とより深い音楽的表現を目指す。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
毎日の練習を欠かさないこと。 楽語など、事前に調べておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期・後期実技試験	100

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
<p>レッスン受講回数が20回に達していない場合は単位認定出来ない。</p> <p>教育ピアノの履修者であっても教育実習に行くためには、定期試験とは別に実施される教職認定試験(2年次~3年次)に合格しなくてはならない。</p> <p>エチュード、自由曲の詳細は、課題曲表で確認すること。</p>
教員実務経験
<p>教員の豊富な経験により、学生の技量に合わせた選曲と指導を行う。</p>

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	進度の見極めと前期課題の決定
2	個人の進度に合わせたレッスン1
3	個人の進度に合わせたレッスン2
4	個人の進度に合わせたレッスン3
5	個人の進度に合わせたレッスン4
6	個人の進度に合わせたレッスン5
7	個人の進度に合わせたレッスン6
8	個人の進度に合わせたレッスン7
9	個人の進度に合わせたレッスン8
10	個人の進度に合わせたレッスン9
11	個人の進度に合わせたレッスン10
12	個人の進度に合わせたレッスン11
13	個人の進度に合わせたレッスン12
14	個人の進度に合わせたレッスン13
15	前期試験に向けての最終レッスン
16	後期課題の決定 個人の進度に合わせたレッスン1
17	個人の進度に合わせたレッスン2
18	個人の進度に合わせたレッスン3

19	個人の進度に合わせたレッスン4
20	個人の進度に合わせたレッスン5
21	個人の進度に合わせたレッスン6
22	個人の進度に合わせたレッスン7
23	個人の進度に合わせたレッスン8
24	個人の進度に合わせたレッスン9
25	個人の進度に合わせたレッスン10
26	個人の進度に合わせたレッスン11
27	個人の進度に合わせたレッスン12
28	個人の進度に合わせたレッスン13
29	個人の進度に合わせたレッスン14
30	後期試験に向けての最終レッスン

科目名	教育ピアノ2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	3
授業期間	2023年度 通年	形態	レッスン(代表採点)		
教員名	秋山 裕子、○今川 裕代、遠藤 玲子、岡田 陽子、笠原 純子、片山 優陽、河合 摂子、川喜多 史子、木田 志津加、熊本 マリ、黒瀬 紀久子、兒玉 千沙子、小林 かずみ、阪本 朋子、阪本 久美、島本 淳子、高久 理恵、多川 響子、田中 伴子、田中 正也、辻川 謙次、仲道 祐子、中村 佳世子、中村 勝樹、初瀬川 未雪、深井 千聡、三木 康子、宮原 雄大、山崎 葉子、山田 真由美				
クラス名					

授業目的と到達目標	
教育実習や教員採用試験を受ける際に有用な、又、中学・高校音楽教師やピアノ等の教師として必要なピアノ演奏能力と指導力を身につける事を目的とする。 クラシックピアノの演奏技術を基礎から学び、音楽的感性と表現力の向上を目標とする。	
授業概要	
対面授業 週1回 30分の個人レッスン。 前期課題: バッハ(インヴェンション又はシンフォニア)・ハイドン又はモーツァルトのソナタ 後期課題: エチュード(指定された課題から任意の1曲)・自由曲 いずれも担当教員とよく相談の上、個々の段階に応じた選曲を心がけ、演奏技術の向上とより深い音楽的表現を目指す。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
毎日の練習を欠かさないこと。楽語など、事前に調べておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期・後期実技試験	100

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			

出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
<p>レッスン受講回数が 20 回に達していない場合は単位認定出来ない。</p> <p>教育ピアノの履修者であっても教育実習に行くためには、定期試験とは別に実施される教職認定試験(2 年次~3 年次)に合格しなくてはならない。</p> <p>エチュード、バッハ、自由曲の詳細は課題曲表で確認すること。</p>
教員実務経験
<p>教員の豊富な経験により、学生の技量に合わせた選曲と指導を行う。</p>

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	前期課題と教職認定試験のための受験曲の決定
2	個人の進度に合わせたレッスン1
3	個人の進度に合わせたレッスン2
4	個人の進度に合わせたレッスン3
5	個人の進度に合わせたレッスン4
6	個人の進度に合わせたレッスン5
7	個人の進度に合わせたレッスン6
8	個人の進度に合わせたレッスン7
9	個人の進度に合わせたレッスン8
10	個人の進度に合わせたレッスン9
11	個人の進度に合わせたレッスン10
12	個人の進度に合わせたレッスン11
13	個人の進度に合わせたレッスン12
14	個人の進度に合わせたレッスン13
15	前期試験および教職認定試験に向けての最終レッスン
16	後期課題の決定及び教職認定試験の必要な学生の受験曲確認 個人の進度に合わせたレッスン1
17	個人の進度に合わせたレッスン2
18	個人の進度に合わせたレッスン3
19	個人の進度に合わせたレッスン4

20	個人の進度に合わせたレッスン5
21	個人の進度に合わせたレッスン6
22	個人の進度に合わせたレッスン7
23	個人の進度に合わせたレッスン8
24	個人の進度に合わせたレッスン9
25	個人の進度に合わせたレッスン10
26	個人の進度に合わせたレッスン11
27	個人の進度に合わせたレッスン12
28	個人の進度に合わせたレッスン13
29	個人の進度に合わせたレッスン14
30	後期試験及び教職認定試験(2回目)に向けての最終レッスン

科目名	器楽合奏法	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	西田 和久				
クラス名	AD/P/V コース対象				

授業目的と到達目標	
<p>器楽の合奏指導について、楽器演奏に共通する基本的性質の理解を通して、合奏指導に必要な知識を学び、能力を習得する。また、この科目で使用されるリコーダーの演奏技術を習得して、教員採用試験に備える。なお、自ら演奏できるだけでなく、指導という視点も併せて身につける。</p>	
授業概要	
<p>対面授業  アルト・リコーダーの演奏技術を習得する過程で、  楽器演奏の特質を理解させ、合奏への適用を経験することにより  「分業である合奏」の指導方法を身につける。  また、リコーダー・アンサンブルの指揮を経験して、実際に指導を行う。  なお、授業中に課題の演奏を課したり、小テストを行い、  学習状態の把握や修正を行う。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>教職に関係する授業なので、最低限の音楽的基礎知識、及び基礎能力を持って授業に出席してください。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
平常成績(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を前提とした割合を以下に示す。)	30
筆記試験(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を前提とした割合を以下に示す。)	30
実技試験(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を前提とした割合を以下に示す。)	40

教科書			
教科書1	必要な楽譜を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	バロック式アルト・リコーダーを持参してください。
教員実務経験	担当者:チューバ奏者そして在阪の職業演奏団体に演奏。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	授業目的、概要、使用楽器、教材等の説明、アンケートを実施する。
2	リコーダーの基礎奏法の説明(呼吸、運指、タンギング/作音楽器としてのリコーダー演奏の経験を通して、管楽器一般に共通する演奏の特徴を学ぶ)、及び受講生の状態を確認する。
3	器楽指導についての基本理念を口実筆記する。また、以後数週間に亘り、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。まずはハ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。 また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルの基礎を学ぶ。
4	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。
5	教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルの基礎を学ぶ。また、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にト長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。
6	器楽演奏の特徴について説明する。また、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。
7	管楽器のアーティキュレーションを学ぶ。演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。また、以後は小テストを随時行い、受講生の習得状態の把握や修正を行う。
8	練習曲を課題としてリコーダー・アンサンブルの演奏を行う。またその演奏を受講生相互で評価する事により、演奏

	状態の把握や指導について学ぶ。
9	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次に変口長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
10	練習曲を課題としてリコーダー・アンサンブルの演奏を行う。またその演奏を受講生相互で評価する事により、演奏状態の把握や指導について学ぶ。(難易度を上げる)
11	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にト短調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
12	今までに学習した音階と分散和音やアーティキュレーションの復習を通して、楽器演奏の特徴についての理解を深める。
13	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にニ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
14	音階と分散和音の復習、実技試験曲の練習、及び前期にて学習した内容を受講生が筆記にてまとめ、提出する。
15	授業のまとめ。及び、期末試験:実技(音階と分散和音、アーティキュレーション、独奏と2重奏)
16	期末試験(実技)の結果を受けて、前記授業内容の復習、および知識的内容のまとめを受けて、修正及び復習。
17	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にイ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
18	合奏の構造と作音楽器のコントロールの関係について学ぶ。
19	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にイ短調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
20	前期から後期にかけて学習した練習曲の中から、指揮の学習に使用するものを選択し、レパートリーを作る。
21	指揮について(指揮者がなすべき内容、技術)説明し、技術的内容を練習する。
22	先立って練習したレパートリーを使い、合奏指導に関するリハーサル・テクニックを学ぶ。
23	合奏指導:指揮(簡単な曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する)
24	合奏指導:指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) #1:以後4週間に亘って受講生全員が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
25	合奏指導:指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) #2:受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
26	合奏指導:指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) #3:受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
27	合奏指導:指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) #4:受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
28	器楽指導法について授業を振り返り概観する。及び、期末試験:筆記(前・後期を通して学んだ知識的な内容を総合した設問に答える)
29	実技内容の復習。及び、期末試験:実技(音階と分散和音、アーティキュレーション、独奏と2重奏)



科目名	器楽合奏法	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	西田 和久				
クラス名	ME/PMコース 対象				

授業目的と到達目標	
<p>器楽の合奏指導について、楽器演奏に共通する基本的性質の理解を通して、合奏指導に必要な知識を学び、能力を習得する。また、この科目で使用されるリコーダーの演奏技術を習得して、教員採用試験に備える。なお、自ら演奏できるだけでなく、指導という視点も併せて身につける。</p>	
授業概要	
<p>アルト・リコーダーの演奏技術を習得する過程で、楽器演奏の特質を理解させ、合奏への適用を経験することにより、「分業である合奏」の指導方法を身につける。また、リコーダー・アンサンブルの指揮を経験して、実際に指導を行う。なお、授業中に課題の演奏を課したり、小テストを行い、学習状態の把握や修正を行う。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>教職に関係する授業なので、最低限の音楽的基礎知識、及び基礎能力を持って授業に出席してください。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技試験(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を前提とした割合を以下に示す。)	40
筆記試験(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を前提とした割合を以下に示す。)	30
平常成績(評価の種別を問わず、全ての試験を受ける事を前提とした割合を以下に示す。)	30

教科書			
教科書1	必要な楽譜を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献
----------

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	バロック式アルト・リコーダーを持参してください。
教員実務経験	担当者:チューバ奏者として在阪の職業演奏団体に演奏。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	授業目的、概要、使用楽器、教材等の説明、アンケートを実施する。
2	リコーダーの基礎奏法の説明(呼吸、運指、タンギング/作音楽器としてのリコーダー演奏の経験を通して、管楽器一般に共通する演奏の特徴を学ぶ)、及び受講生の状態を確認する。
3	器楽指導についての基本理念を口実筆記する。また、以後数週間に亘り、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。まずはハ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルの基礎を学ぶ。
4	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。
5	教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルの基礎を学ぶ。また、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にト長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。
6	器楽演奏の特徴について説明する。また、演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。
7	管楽器のアーティキュレーションを学ぶ。演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する(難易度を上げる)。また、以後は小テストを随時行い、受講生の習得状態の把握や修正を行う。
8	練習曲を課題としてリコーダー・アンサンブルの演奏を行う。またその演奏を受講生相互で評価する事により、演奏状態の把握や指導について学ぶ。
9	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次に変ロ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習

	曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
10	練習曲を課題としてリコーダー・アンサンブルの演奏を行う。またその演奏を受講生相互で評価する事により、演奏状態の把握や指導について学ぶ。(難易度を上げる)
11	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にト短調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
12	今までに学習した音階と分散和音やアーティキュレーションの復習を通して、楽器演奏の特徴についての理解を深める。
13	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にニ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
14	音階と分散和音の復習、実技試験曲の練習、及び前期にて学習した内容を受講生が筆記にてまとめ、提出する。
15	授業とまとめ。及び、期末試験:実技(音階と分散和音、アーティキュレーション、独奏と2重奏)
16	期末試験(実技)の結果を受けて、前記授業内容の復習、および知識的内容のまとめを受けて、修正及び復習。
17	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にイ長調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
18	合奏の構造と作音楽器のコントロールの関係について学ぶ。
19	演奏の基礎技術として音階と分散和音の練習や、アンサンブルの基礎として音感とビート感に基づいたリコーダーの演奏を経験する。次にイ短調の音階と分散和音を使い、運指の学習プロセスを学ぶ。また、教科書の中の練習曲を使い、アンサンブルを学ぶ。
20	前期から後期にかけて学習した練習曲の中から、指揮の学習に使用するものを選択し、レパトリーを作る。
21	指揮について(指揮者がなすべき内容、技術)説明し、技術的内容を練習する。
22	先立って練習したレパトリーを使い、合奏指導に関するリハーサル・テクニックを学ぶ。
23	合奏指導:指揮(簡単な曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する)
24	合奏指導:指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) #1:以後4週間に亘って受講生全員が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
25	合奏指導:指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) #2:受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
26	合奏指導:指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) #3:受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
27	合奏指導:指揮(様々な曲舞曲をリコーダー・アンサンブルで演奏し、受講生が指揮を経験する) #4:受講生が合奏指揮を行い、実際の指導を経験する。また、指揮をする学生以外はアンサンブルで演奏をする。
28	器楽指導法について授業を振り返り概観する。及び、期末試験:筆記(前・後期を通して学んだ知識的な内容を総合した設問に答える)
29	実技内容を復習する。及び、期末試験:実技(音階と分散和音、アーティキュレーション、独奏と2重奏)
30	期末試験を受けて、内容の復習及び修正を行う。

科目名	鍵盤和声法	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	河合 摂子、○田坂 千禎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>鍵盤和声法(キーボードハーモニー)は、ピアノを中心とした鍵盤楽器で右手のメロディーに左手の伴奏をつけるための和声(ハーモニー)と和音(コード)の実用的な音楽的応用の理論と演奏技法の習得の演習です。音楽現場や教育現場で必要に応じてメロディーから充実した音楽に仕上げられるようにします。</p>	
授業概要	
<p>和声法のバス課題をよく理解し、鍵盤上でソプラノ課題を学習して、メロディーの和音設定をすることにつなげます。そして和音付けを考えながら弾いたり、コードネームの学習、引き歌い、移調奏をするなど総合的かつ実用的に学習します。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>教科書のメロディ課題は世界の古今の音楽を使っています。歌ったりピアノで弾いたりして、カデンツの移調奏ともあわせて予習復習してください。また諸調の音階の構成音と和音の音の把握も重要です。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
試験	80
主体的な授業参加	20

教科書			
教科書1	はじめてのソルフェージュ5 キーボード・ハーモニー		
出版社名	全音楽譜出版社	著者名	吉川和夫・舟橋三千子他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	オルガニスト、作・編曲家、ピアノ指導者、高等学校音楽コース講師としての視点から、演奏表現に不可欠な重要な点を指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	和音進行法と伴奏付け Step.1 IとV
2	和音進行法と伴奏付け Step.1 IとV 更に多くの課題で学習
3	和音の構成法と名称について
4	和音の構成法と名称について コードネームの説明、理解と練習。28週まで適宜演習 (ポピュラー音楽課題を含む)
5	Step.2 IV
6	Step.2 IV 更に多くの課題で学習
7	Step.3 Iの第2転回形と V
8	Step.9より Iの第1転回形
9	非和声音について
10	Step.4 属7の和音
11	Step.6 II、IIの第1転回形
12	Step.7 VI
13	復習と移調練習
14	バス進行の和音付け移調課題と伴奏つきメロディの移調実技学習と小試験
15	メロディーの伴奏付け実技学習と小試験
16	借用和音について Step.5 借用和音その1
17	借用和音について

	Step.5 借用和音その1 更に多くの課題で学習
18	Step.8 借用和音その2
19	Step.8 借用和音その2 更に多くの課題で学習
20	Step.9 IVの第1転回形、Vの第1転回形
21	Step.9 IVの第1転回形、Vの第1転回形 更に多くの課題で学習
22	Step.10 IVの第2転回形、Vの第2転回形
23	Step.11 属7の転回形
24	Step.11 属7の転回形 更に多くの課題で学習
25	Step.12 借用和音の転回形
26	Step.12 借用和音の転回形 更に多くの課題で学習
27	Step.13 準固有和音
28	Step.14 転調、中学校・高校教材の復習(p42、50、51、92、93、102、104)
29	バス進行の和音付け移調課題と伴奏つきメロディの移調実技学習と小試験と復習
30	メロディの伴奏付け実技学習と小試験

科目名	鍵盤和声法	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	河合 摂子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>鍵盤和声法(キーボードハーモニー)は、ピアノを中心とした鍵盤楽器で右手のメロディーに左手の伴奏をつけるための和声(ハーモニー)と和音(コード)の実用的な音楽的応用の理論と演奏技法の習得の演習です。音楽現場や教育現場で必要に応じてメロディーから充実した音楽に仕上げられるようにします。</p>	
授業概要	
<p>和声法のバス課題をよく理解し、鍵盤上でソプラノ課題を学習して、メロディーの和音設定をすることにつなげます。そして和音付けを考えながら弾いたり、コードネームの学習、引き歌い、移調奏をするなど総合的かつ実用的に学習します。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>教科書のメロディ課題は世界の古今の音楽を使っています。歌ったりピアノで弾いたりして、カデンツの移調奏ともあわせて予習復習してください。また諸調の音階の構成音と和音の音の把握も重要です。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
試験	80
主体的な授業参加	20

教科書			
教科書1	はじめてのソルフェージュ5 キーボード・ハーモニー		
出版社名	全音楽譜出版社	著者名	吉川和夫・舟橋三千子他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	作・編曲家、ピアノ指導者としての視点から、徐々により良い音楽に仕上げるように指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	和音進行法と伴奏付け Step.1 IとV
2	和音進行法と伴奏付け Step.1 IとV 更に多くの課題で学習
3	和音の構成法と名称について
4	和音の構成法と名称について コードネームの説明、理解と練習。28 週まで適宜演習 (ポピュラー音楽課題を含む)
5	Step.2 IV
6	Step.2 IV 更に多くの課題で学習
7	Step.3 I の第 2 転回形と V
8	Step.9 より I の第 1 転回形
9	非和声音について
10	Step.4 属 7 の和音
11	Step.6 II、II の第 1 転回形
12	Step.7 VI
13	復習と移調練習
14	バス進行の和音付け移調課題と伴奏つきメロディの移調実技学習と小試験
15	メロディーの伴奏付け実技学習と小試験
16	借用和音について Step.5 借用和音その 1
17	借用和音について Step.5 借用和音その 1 更に多くの課題で学習

18	Step.8 借用和音その2
19	Step.8 借用和音その2 更に多くの課題で学習
20	Step.9 IVの第1転回形、Vの第1転回形
21	Step.9 IVの第1転回形、Vの第1転回形 更に多くの課題で学習
22	Step.10 IVの第2転回形、Vの第2転回形
23	Step.11 属7の転回形
24	Step.11 属7の転回形 更に多くの課題で学習
25	Step.12 借用和音の転回形
26	Step.12 借用和音の転回形 更に多くの課題で学習
27	Step.13 準固有和音
28	Step.14 転調、中学校・高校教材の復習(p42、50、51、92、93、102、104)
29	バス進行の和音付け移調課題と伴奏つきメロディの移調実技学習と小試験と復習
30	メロディの伴奏付け実技学習と小試験

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 小希郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
三味線音楽のジャンルの一つである長唄の唄と三味線を学ぶことで、音楽の世界観を広げる事を目的とし、長唄古典小曲の演奏を目標とする。	
授業概要	
<p>授業一コマを前後半に分け唄と三味線をそれぞれ指導します。</p> <p>基礎的な奏法から始め、古典小曲を数曲演奏できるように考えています。</p> <p>コロナの感染状況等により唄の割合は少なくなるかもしれません。</p> <p>遠隔授業へ変更の場合は授業の進行状況をふまえ内容を考えます。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
楽器を用いた演奏であるので三味線に触れる時間を多く作り、復習に重点を置いて練習すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
平常点	70
合同演奏会	30

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL			
特記事項	はじめに撥・指すり・膝ゴムを購入。楽譜等はその都度プリントを配布。		
教員実務経験	邦楽演奏家 京都・大阪 NHK 文化センター講師		

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	長唄の概要解説、唄・三味線の基本解説。
2	練習曲・松の緑
3	練習曲・松の緑
4	練習曲・松の緑
5	練習曲・松の緑
6	練習曲・松の緑
7	練習曲・松の緑
8	練習曲・松の緑
9	練習曲・松の緑
10	練習曲・松の緑
11	松の緑・末広狩
12	松の緑・末広狩
13	松の緑・末広狩
14	松の緑・末広狩
15	松の緑・末広狩、小テスト
16	松の緑・末広狩
17	松の緑・末広狩
18	松の緑・末広狩
19	松の緑・末広狩
20	松の緑・末広狩
21	都鳥もしくは末広狩・小鍛冶
22	都鳥、末広狩・小鍛冶
23	都鳥、末広狩・小鍛冶
24	都鳥、末広狩・小鍛冶
25	都鳥、末広狩・小鍛冶
26	都鳥、末広狩・小鍛冶

27	都鳥、末広狩・小鍛冶
28	都鳥、末広狩・小鍛冶
29	都鳥、末広狩・小鍛冶
30	都鳥、末広狩・小鍛冶、小テスト

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 小希郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
三味線音楽のジャンルの一つである長唄の唄と三味線を学ぶことで、音楽の世界観を広げる事を目的とし、長唄古典小曲の演奏を目標とする。	
授業概要	
<p>授業一コマを前後半に分け唄と三味線をそれぞれ指導します。</p> <p>基礎的な奏法から始め、古典小曲を数曲演奏できるように考えています。</p> <p>コロナの感染状況等により唄の割合は少なくなるかもしれません。</p> <p>遠隔授業へ変更の場合は授業の進行状況をふまえ内容を考えます。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
楽器を用いた演奏であるので三味線に触れる時間を多く作り、復習に重点を置いて練習すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
平常点	70
合同演奏会	30

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	はじめに撥・指すり・膝ゴムを購入。楽譜等はその都度プリントを配布。
教員実務経験	邦楽演奏家 京都・大阪 NHK 文化センター講師

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	長唄の概要解説、唄・三味線の基本解説。
2	練習曲・松の緑
3	練習曲・松の緑
4	練習曲・松の緑
5	練習曲・松の緑
6	練習曲・松の緑
7	練習曲・松の緑
8	練習曲・松の緑
9	練習曲・松の緑
10	練習曲・松の緑
11	松の緑・末広狩
12	松の緑・末広狩
13	松の緑・末広狩
14	松の緑・末広狩
15	松の緑・末広狩、小テスト
16	松の緑・末広狩
17	松の緑・末広狩
18	松の緑・末広狩
19	松の緑・末広狩
20	松の緑・末広狩
21	都鳥もしくは末広狩・小鍛冶
22	都鳥、末広狩・小鍛冶
23	都鳥、末広狩・小鍛冶
24	都鳥、末広狩・小鍛冶
25	都鳥、末広狩・小鍛冶
26	都鳥、末広狩・小鍛冶

27	都鳥、末広狩・小鍛冶
28	都鳥、末広狩・小鍛冶
29	都鳥、末広狩・小鍛冶
30	都鳥、末広狩・小鍛冶、小テスト

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 小希郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
三味線音楽のジャンルの一つである長唄の唄と三味線を学ぶことで、音楽の世界観を広げる事を目的とし、長唄古典小曲の演奏を目標とする。	
授業概要	
<p>授業一コマを前後半に分け唄と三味線をそれぞれ指導します。</p> <p>基礎的な奏法から始め、古典小曲を数曲演奏できるように考えています。</p> <p>コロナの感染状況等により唄の割合は少なくなるかもしれません。</p> <p>遠隔授業へ変更の場合は授業の進行状況をふまえ内容を考えます。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
楽器を用いた演奏であるので三味線に触れる時間を多く作り、復習に重点を置いて練習すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
平常点	70
合同演奏会	30

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL			
特記事項	はじめに撥・指すり・膝ゴムを購入。楽譜等はその都度プリントを配布。		
教員実務経験	邦楽演奏家 京都・大阪 NHK 文化センター講師		

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	長唄の概要解説、唄・三味線の基本解説。
2	練習曲・松の緑
3	練習曲・松の緑
4	練習曲・松の緑
5	練習曲・松の緑
6	練習曲・松の緑
7	練習曲・松の緑
8	練習曲・松の緑
9	練習曲・松の緑
10	練習曲・松の緑
11	松の緑・末広狩
12	松の緑・末広狩
13	松の緑・末広狩
14	松の緑・末広狩
15	松の緑・末広狩、小テスト
16	松の緑・末広狩
17	松の緑・末広狩
18	松の緑・末広狩
19	松の緑・末広狩
20	松の緑・末広狩
21	都鳥もしくは末広狩・小鍛冶
22	都鳥、末広狩・小鍛冶
23	都鳥、末広狩・小鍛冶
24	都鳥、末広狩・小鍛冶
25	都鳥、末広狩・小鍛冶
26	都鳥、末広狩・小鍛冶

27	都鳥、末広狩・小鍛冶
28	都鳥、末広狩・小鍛冶
29	都鳥、末広狩・小鍛冶
30	都鳥、末広狩・小鍛冶、小テスト

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 小希郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
三味線音楽のジャンルの一つである長唄の唄と三味線を学ぶことで、音楽の世界観を広げる事を目的とし、長唄古典小曲の演奏を目標とする。	
授業概要	
<p>授業一コマを前後半に分け唄と三味線をそれぞれ指導します。</p> <p>基礎的な奏法から始め、古典小曲を数曲演奏できるように考えています。</p> <p>コロナの感染状況等により唄の割合は少なくなるかもしれません。</p> <p>遠隔授業へ変更の場合は授業の進行状況をふまえ内容を考えます。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
楽器を用いた演奏であるので三味線に触れる時間を多く作り、復習に重点を置いて練習すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
平常点	70
合同演奏会	30

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	はじめに撥・指すり・膝ゴムを購入。楽譜等はその都度プリントを配布。
教員実務経験	邦楽演奏家 京都・大阪 NHK 文化センター講師

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	長唄の概要解説、唄・三味線の基本解説。
2	練習曲・松の緑
3	練習曲・松の緑
4	練習曲・松の緑
5	練習曲・松の緑
6	練習曲・松の緑
7	練習曲・松の緑
8	練習曲・松の緑
9	練習曲・松の緑
10	練習曲・松の緑
11	松の緑・末広狩
12	松の緑・末広狩
13	松の緑・末広狩
14	松の緑・末広狩
15	松の緑・末広狩、小テスト
16	松の緑・末広狩
17	松の緑・末広狩
18	松の緑・末広狩
19	松の緑・末広狩
20	松の緑・末広狩
21	都鳥もしくは末広狩・小鍛冶
22	都鳥、末広狩・小鍛冶
23	都鳥、末広狩・小鍛冶
24	都鳥、末広狩・小鍛冶
25	都鳥、末広狩・小鍛冶
26	都鳥、末広狩・小鍛冶

27	都鳥、末広狩・小鍛冶
28	都鳥、末広狩・小鍛冶
29	都鳥、末広狩・小鍛冶
30	都鳥、末広狩・小鍛冶、小テスト

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 美治郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
日本の伝統楽器である三味線を、長唄というジャンルでその特徴を体験し、さらに長唄の曲を演奏する事で日本の伝統音楽を感じてもらいたい。松の緑、末広狩を演奏出来る様にする事を目標とする。	
授業概要	
対面の授業により三味線の持ち方、撥の持ち方に始まり、調弦の仕方、楽譜の読み方を教え、長唄の松の緑、末広狩を演奏出来る様に指導する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	
------	--	-----	--

参考 URL
特記事項
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	楽器の持ち方譜面の読み方を教え、調弦の仕方の後に練習曲をレッスンする。
2	練習曲のレッスン。
3	練習曲のレッスン。
4	練習曲のレッスン。
5	練習曲のレッスン。
6	練習曲のレッスン。
7	松の緑のレッスン。
8	松の緑のレッスン。
9	松の緑のレッスン。
10	松の緑のレッスン。
11	松の緑のレッスン。
12	松の緑のレッスン。
13	松の緑のレッスン。
14	松の緑のレッスン。
15	松の緑のレッスン。
16	松の緑のレッスン。
17	末広狩のレッスン。
18	末広狩のレッスン。
19	末広狩のレッスン。
20	末広狩のレッスン。
21	末広狩のレッスン。
22	末広狩のレッスン。
23	末広狩のレッスン。
24	末広狩のレッスン。
25	末広狩のレッスン。
26	末広狩のレッスン。
27	松の緑、末広狩の復習。
28	松の緑、末広狩の復習。
29	松の緑、末広狩の復習。



科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 美治郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
日本の伝統楽器である三味線を、長唄というジャンルでその特徴を体験し、さらに長唄の曲を演奏する事で日本の伝統音楽を感じてもらいたい。松の緑、末広狩を演奏出来る様にする事を目標とする。	
授業概要	
対面の授業により三味線の持ち方、撥の持ち方に始まり、調弦の仕方、楽譜の読み方を教え、長唄の松の緑、末広狩を演奏出来る様に指導する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	
------	--	-----	--

参考 URL
特記事項
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	楽器の持ち方譜面の読み方を教え、調弦の仕方の後に練習曲をレッスンする。
2	練習曲のレッスン。
3	練習曲のレッスン。
4	練習曲のレッスン。
5	練習曲のレッスン。
6	練習曲のレッスン。
7	松の緑のレッスン。
8	松の緑のレッスン。
9	松の緑のレッスン。
10	松の緑のレッスン。
11	松の緑のレッスン。
12	松の緑のレッスン。
13	松の緑のレッスン。
14	松の緑のレッスン。
15	松の緑のレッスン。
16	松の緑のレッスン。
17	末広狩のレッスン。
18	末広狩のレッスン。
19	末広狩のレッスン。
20	末広狩のレッスン。
21	末広狩のレッスン。
22	末広狩のレッスン。
23	末広狩のレッスン。
24	末広狩のレッスン。
25	末広狩のレッスン。
26	末広狩のレッスン。
27	松の緑、末広狩の復習。
28	松の緑、末広狩の復習。
29	松の緑、末広狩の復習。



科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 美治郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
日本の伝統楽器である三味線を、長唄というジャンルでその特徴を体験し、さらに長唄の曲を演奏する事で日本の伝統音楽を感じてもらいたい。松の緑、末広狩を演奏出来る様にする事を目標とする。	
授業概要	
対面の授業により三味線の持ち方、撥の持ち方に始まり、調弦の仕方、楽譜の読み方を教え、長唄の松の緑、末広狩を演奏出来る様に指導する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	
------	--	-----	--

参考 URL
特記事項
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	楽器の持ち方譜面の読み方を教え、調弦の仕方の後に練習曲をレッスンする。
2	練習曲のレッスン。
3	練習曲のレッスン。
4	練習曲のレッスン。
5	練習曲のレッスン。
6	練習曲のレッスン。
7	松の緑のレッスン。
8	松の緑のレッスン。
9	松の緑のレッスン。
10	松の緑のレッスン。
11	松の緑のレッスン。
12	松の緑のレッスン。
13	松の緑のレッスン。
14	松の緑のレッスン。
15	松の緑のレッスン。
16	松の緑のレッスン。
17	末広狩のレッスン。
18	末広狩のレッスン。
19	末広狩のレッスン。
20	末広狩のレッスン。
21	末広狩のレッスン。
22	末広狩のレッスン。
23	末広狩のレッスン。
24	末広狩のレッスン。
25	末広狩のレッスン。
26	末広狩のレッスン。
27	松の緑、末広狩の復習。
28	松の緑、末広狩の復習。
29	松の緑、末広狩の復習。



科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	戸波 有香子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>箏の基本的な知識や記譜法や演奏方法を学び、箏を演奏することにより日本の伝統音楽を体験する。</p> <p>学校教育の場で箏を使った授業が出来ることを目標とする。</p>	
授業概要	
<p>前期はテキストや箏譜(縦譜)を用いて、箏の基礎知識や箏曲の基本的な演奏方法を学ぶ。また、チューナーを使っての正確な調絃での演奏をする。後期は演奏会の曲目を中心に演奏技法を習得し、年に一度行う演奏会では合奏を試みる。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>箏の理解を進めるため、前期は復習を、後期は予習復習を授業以外の個人練習で行うこと。楽器は一年間自分専用の箏を使用します。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期後期試験	30
演奏会参加と取り組み姿勢	20
受講姿勢(提出物等を含む)	50

教科書			
教科書1	「箏入門の為の小品集」		
出版社名	大日本家庭音楽会	著者名	吉崎克彦
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	必要に応じて適宜紹介する		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	

参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL			
特記事項			
教員実務経験	<p>箏・三絃・胡弓演奏家。箏・三絃・胡弓教授。</p> <p>舞台での演奏活・小学校教員としての経験を活かし、教育現場で実践出来るよう指導する。</p>		

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	箏の準備方法、箏の各部の名称、箏爪のあて方などの基礎を学ぶ。
2	箏爪のあて方や楽譜の読み方を学ぶ。
3	テキストを進めながら、箏の演奏に慣れる。
4	進度に合わせて様々な奏法を学ぶ。
5	様々な記譜法や奏法を学びながら教材を進める。
6	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
7	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
8	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
9	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
10	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
11	試験曲の練習を始める。
12	試験曲を通して、奏法や表現方を学ぶ。
13	試験曲の練習を進める。
14	試験曲の練習を進める。
15	前期のまとめと実技試験を行う。
16	前期の復習から始める。
17	演奏会の曲の譜読みと奏法の確認にとりかかる。
18	演奏会の曲の練習を進める。
19	演奏会の曲の練習を進める。
20	パート毎の練習を始める。
21	パート毎の練習をする。
22	パート毎の練習をする。
23	パート毎の練習、合奏への課題に取り組む。
24	合奏練習を始める。
25	各々の課題に取り組みながら合奏練習を進める。
26	各々の課題に取り組みながら合奏練習を進める。
27	各々の課題に取り組みながら合奏練習を進める。

28	テキストまたはプリントに取り組む。
29	テキストまたはプリントに取り組む。
30	後期のまとめ、レポート提出等で試験を行う。

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	戸波 有香子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>箏の基本的な知識や記譜法や演奏方法を学び、箏を演奏することにより日本の伝統音楽を体験する。</p> <p>学校教育の場で箏を使った授業が出来ることを目標とする。</p>	
授業概要	
<p>前期はテキストや箏譜(縦譜)を用いて、箏の基礎知識や箏曲の基本的な演奏方法を学ぶ。また、チューナーを使っての正確な調絃での演奏をする。後期は演奏会の曲目を中心に演奏技法を習得し、年に一度行う演奏会では合奏を試みる。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>箏の理解を進めるため、前期は復習を、後期は予習復習を授業以外の個人練習で行うこと。楽器は一年間自分専用の箏を使用します。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期後期試験	30
演奏会参加と取り組み姿勢	20
受講姿勢(提出物等を含む)	50

教科書			
教科書1	「箏入門の為の小品集」		
出版社名	大日本家庭音楽会	著者名	吉崎克彦
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	必要に応じて適宜紹介する		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	

参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL			
特記事項			
教員実務経験	<p>箏・三絃・胡弓演奏家。箏・三絃・胡弓教授。</p> <p>舞台での演奏活・小学校教員としての経験を活かし、教育現場で実践出来るよう指導する。</p>		

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	箏の準備方法、箏の各部の名称、箏爪のあて方などの基礎を学ぶ。
2	箏爪のあて方や楽譜の読み方を学ぶ。
3	テキストを進めながら、箏の演奏に慣れる。
4	進度に合わせて様々な奏法を学ぶ。
5	様々な記譜法や奏法を学びながら教材を進める。
6	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
7	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
8	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
9	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
10	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
11	試験曲の練習を始める。
12	試験曲を通して、奏法や表現方を学ぶ。
13	試験曲の練習を進める。
14	試験曲の練習を進める。
15	前期のまとめと実技試験を行う。
16	前期の復習から始める。
17	演奏会の曲の譜読みと奏法の確認にとりかかる。
18	演奏会の曲の練習を進める。
19	演奏会の曲の練習を進める。
20	パート毎の練習を始める。
21	パート毎の練習をする。
22	パート毎の練習をする。
23	パート毎の練習、合奏への課題に取り組む。
24	合奏練習を始める。
25	各々の課題に取り組みながら合奏練習を進める。
26	各々の課題に取り組みながら合奏練習を進める。
27	各々の課題に取り組みながら合奏練習を進める。

28	テキストまたはプリントに取り組む。
29	テキストまたはプリントに取り組む。
30	後期のまとめ、またはレポート提出等で試験を行う。

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	戸波 有香子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>箏の基本的な知識や記譜法や演奏方法を学び、箏を演奏することにより日本の伝統音楽を体験する。</p> <p>学校教育の場で箏を使った授業が出来ることを目標とする。</p>	
授業概要	
<p>前期はテキストや箏譜(縦譜)を用いて、箏の基礎知識や箏曲の基本的な演奏方法を学ぶ。また、チューナーを使っての正確な調絃での演奏をする。後期は演奏会の曲目を中心に演奏技法を習得し、年に一度行う演奏会では合奏を試みる。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>箏の理解を進めるため、前期は復習を、後期は予習復習を授業以外の個人練習で行うこと。楽器は一年間自分専用の箏を使用します。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期後期試験	30
演奏会参加と取り組み姿勢	20
受講姿勢(提出物等を含む)	50

教科書			
教科書1	「箏入門の為の小品集」		
出版社名	大日本家庭音楽会	著者名	吉崎克彦
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	必要に応じて適宜紹介する		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	

参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL			
特記事項			
教員実務経験	<p>箏・三絃・胡弓演奏家。箏・三絃・胡弓教授。</p> <p>舞台での演奏活・小学校教員としての経験を活かし、教育現場で実践出来るよう指導する。</p>		

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	箏の準備方法、箏の各部の名称、箏爪のあて方などの基礎を学ぶ。
2	箏爪のあて方や楽譜の読み方を学ぶ。
3	テキストを進めながら、箏の演奏に慣れる。
4	進度に合わせて様々な奏法を学ぶ。
5	様々な記譜法や奏法を学びながら教材を進める。
6	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
7	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
8	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
9	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
10	プリントや教材を使用しながら、進度に合わせて学習を進める。
11	試験曲の練習を始める。
12	試験曲を通して、奏法や表現方を学ぶ。
13	試験曲の練習を進める。
14	試験曲の練習を進める。
15	前期のまとめと実技試験を行う。
16	前期の復習から始める。
17	演奏会の曲の譜読みと奏法の確認にとりかかる。
18	演奏会の曲の練習を進める。
19	演奏会の曲の練習を進める。
20	パート毎の練習を始める。
21	パート毎の練習をする。
22	パート毎の練習をする。
23	パート毎の練習、合奏への課題に取り組む。
24	合奏練習を始める。
25	各々の課題に取り組みながら合奏練習を進める。
26	各々の課題に取り組みながら合奏練習を進める。
27	各々の課題に取り組みながら合奏練習を進める。

28	テキストまたはプリントに取り組む。
29	テキストまたはプリントに取り組む。
30	後期のまとめ、またはレポート提出等で試験を行う。

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 美治郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
日本の伝統楽器である三味線を、長唄というジャンルでその特徴を体験し、さらに長唄の曲を演奏する事で日本の伝統音楽を感じてもらいたい。松の緑、末広狩を演奏出来る様にする事を目標とする。	
授業概要	
対面の授業により三味線の持ち方、撥の持ち方に始まり、調弦の仕方、楽譜の読み方を教え、長唄の松の緑、末広狩を演奏出来る様に指導する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	
------	--	-----	--

参考 URL
特記事項
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	楽器の持ち方譜面の読み方を教え、調弦の仕方の後に練習曲をレッスンする。
2	練習曲のレッスン。
3	練習曲のレッスン。
4	練習曲のレッスン。
5	練習曲のレッスン。
6	練習曲のレッスン。
7	松の緑のレッスン。
8	松の緑のレッスン。
9	松の緑のレッスン。
10	松の緑のレッスン。
11	松の緑のレッスン。
12	松の緑のレッスン。
13	松の緑のレッスン。
14	松の緑のレッスン。
15	松の緑のレッスン。
16	松の緑のレッスン。
17	末広狩のレッスン。
18	末広狩のレッスン。
19	末広狩のレッスン。
20	末広狩のレッスン。
21	末広狩のレッスン。
22	末広狩のレッスン。
23	末広狩のレッスン。
24	末広狩のレッスン。
25	末広狩のレッスン。
26	末広狩のレッスン。
27	松の緑、末広狩の復習。
28	松の緑、末広狩の復習。
29	松の緑、末広狩の復習。



科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	米村 鈴笙				
クラス名					

授業目的と到達目標	
尺八を通して日本音楽の一端に触れ、和楽器の良さを体験出来るよう指導する。 その体験により日本伝統音楽についての理解を深めることを目標とする。	
授業概要	
まず前期では、練習曲を用いて尺八の基本的な吹奏技術(運指、正しい音の出し方など)を学び、 後期には尺八の二重奏曲などが吹けるように指導する。 一年間の成果を演奏会において発表する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
授業を休まずに、根気良く練習すること。 毎日短時間でも楽器に触れることが望ましい。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業、演奏会への取り組み	80
実技試験	20

教科書			
教科書1	授業内でプリントを配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			

出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
琴古流尺八演奏家

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	尺八の歴史、楽器の取り扱い方法について
2	楽器の正しい持ち方を学ぶ
3	楽譜の読み方を学ぶ
4	引き続き楽譜の読み方を学ぶ
5	息の使い方や音の出し方を練習する
6	乙音の練習
7	引き続き乙音を練習する
8	乙音を使って簡単な曲を練習する
9	引き続き乙音を使って簡単な曲を練習する
10	甲音の練習
11	引き続き甲音を練習する
12	甲音を使って簡単な曲を練習する
13	引き続き甲音を使って簡単な曲を練習する
14	乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
15	引き続き乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
16	前期の復習として授業中に簡単な実技試験を行う
17	前期の復習を行う
18	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の練習を開始する
19	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
20	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
21	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の1パートを練習する
22	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の1パートを練習する
23	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の2パートを練習する
24	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の2パートを練習する
25	合奏練習を開始する
26	引き続き合奏練習を行う
27	繰り返し合奏練習を行う

28	繰り返し合奏練習を行う
29	演奏会で一年間の成果を発表する
30	一年間の授業のまとめと簡単な実技試験を行う

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	米村 鈴笙				
クラス名					

授業目的と到達目標	
尺八を通して日本音楽の一端に触れ、和楽器の良さを体験出来るよう指導する。 その体験により日本伝統音楽についての理解を深めることを目標とする。	
授業概要	
まず前期では、練習曲を用いて尺八の基本的な吹奏技術(運指、正しい音の出し方など)を学び、 後期には尺八の二重奏曲などが吹けるように指導する。 一年間の成果を演奏会において発表する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
授業を休まずに、根気良く練習すること。 毎日短時間でも楽器に触れることが望ましい。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業、演奏会への取り組み	80
実技試験	20

教科書			
教科書1	授業内でプリントを配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			

出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
琴古流尺八演奏家

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	尺八の歴史、楽器の取り扱い方法について
2	楽器の正しい持ち方を学ぶ
3	楽譜の読み方を学ぶ
4	引き続き楽譜の読み方を学ぶ
5	息の使い方や音の出し方を練習する
6	乙音の練習
7	引き続き乙音を練習する
8	乙音を使って簡単な曲を練習する
9	引き続き乙音を使って簡単な曲を練習する
10	甲音の練習
11	引き続き甲音を練習する
12	甲音を使って簡単な曲を練習する
13	引き続き甲音を使って簡単な曲を練習する
14	乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
15	引き続き乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
16	前期の復習として授業中に簡単な実技試験を行う
17	前期の復習を行う
18	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の練習を開始する
19	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
20	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
21	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の1パートを練習する
22	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の1パートを練習する
23	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の2パートを練習する
24	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の2パートを練習する
25	合奏練習を開始する
26	引き続き合奏練習を行う
27	繰り返し合奏練習を行う

28	繰り返し合奏練習を行う
29	演奏会で一年間の成果を発表する
30	一年間の授業のまとめと簡単な実技試験を行う

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	米村 鈴笙				
クラス名					

授業目的と到達目標	
尺八を通して日本音楽の一端に触れ、和楽器の良さを体験出来るよう指導する。 その体験により日本伝統音楽についての理解を深めることを目標とする。	
授業概要	
まず前期では、練習曲を用いて尺八の基本的な吹奏技術(運指、正しい音の出し方など)を学び、 後期には尺八の二重奏曲などが吹けるように指導する。 一年間の成果を演奏会において発表する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
授業を休まずに、根気良く練習すること。 毎日短時間でも楽器に触れることが望ましい。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業、演奏会への取り組み	80
実技試験	20

教科書			
教科書1	授業内でプリントを配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			

出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	
琴古流尺八演奏家	

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	尺八の歴史、楽器の取り扱い方法について
2	楽器の正しい持ち方を学ぶ
3	楽譜の読み方を学ぶ
4	引き続き楽譜の読み方を学ぶ
5	息の使い方や音の出し方を練習する
6	乙音の練習
7	引き続き乙音を練習する
8	乙音を使って簡単な曲を練習する
9	引き続き乙音を使って簡単な曲を練習する
10	甲音の練習
11	引き続き甲音を練習する
12	甲音を使って簡単な曲を練習する
13	引き続き甲音を使って簡単な曲を練習する
14	乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
15	引き続き乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
16	前期の復習として授業中に簡単な実技試験を行う
17	前期の復習を行う
18	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の練習を開始する
19	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
20	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
21	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の1パートを練習する
22	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の1パートを練習する
23	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の2パートを練習する
24	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の2パートを練習する
25	合奏練習を開始する
26	引き続き合奏練習を行う
27	繰り返し合奏練習を行う

28	繰り返し合奏練習を行う
29	演奏会で一年間の成果を発表する
30	一年間の授業のまとめと簡単な実技試験を行う

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	米村 鈴笙				
クラス名					

授業目的と到達目標	
尺八を通して日本音楽の一端に触れ、和楽器の良さを体験出来るよう指導する。 その体験により日本伝統音楽についての理解を深めることを目標とする。	
授業概要	
まず前期では、練習曲を用いて尺八の基本的な吹奏技術(運指、正しい音の出し方など)を学び、 後期には尺八の二重奏曲などが吹けるように指導する。 一年間の成果を演奏会において発表する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
授業を休まずに、根気良く練習すること。 毎日短時間でも楽器に触れることが望ましい。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業、演奏会への取り組み	80
実技試験	20

教科書			
教科書1	授業内でプリントを配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			

出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	
琴古流尺八演奏家	

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	尺八の歴史、楽器の取り扱い方法について
2	楽器の正しい持ち方を学ぶ
3	楽譜の読み方を学ぶ
4	引き続き楽譜の読み方を学ぶ
5	息の使い方や音の出し方を練習する
6	乙音の練習
7	引き続き乙音を練習する
8	乙音を使って簡単な曲を練習する
9	引き続き乙音を使って簡単な曲を練習する
10	甲音の練習
11	引き続き甲音を練習する
12	甲音を使って簡単な曲を練習する
13	引き続き甲音を使って簡単な曲を練習する
14	乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
15	引き続き乙音甲音を使って簡単な曲を練習する
16	前期の復習として授業中に簡単な実技試験を行う
17	前期の復習を行う
18	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の練習を開始する
19	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
20	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の唱譜を練習する
21	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の1パートを練習する
22	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の1パートを練習する
23	演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の2パートを練習する
24	引き続き演奏会に向けての曲(尺八二重奏曲など)の2パートを練習する
25	合奏練習を開始する
26	引き続き合奏練習を行う
27	繰り返し合奏練習を行う

28	繰り返し合奏練習を行う
29	演奏会で一年間の成果を発表する
30	一年間の授業のまとめと簡単な実技試験を行う

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	志村 智恵子				
クラス名	箏曲実技				

授業目的と到達目標	
<p>箏(こと)を通して日本伝統音楽にふれ、音色の美しさや伝統音楽を知ることの必要性を感じてもらう。また基本的な奏法や簡単な歴史を学び、学校教育の場で箏を使った授業が出来るようになることを目標とする。</p>	
授業概要	
<p>《 対面授業 》</p> <p>前期は、教本やプリント等を用い、箏の基礎や簡単な歴史を学ぶ。また、チューナーを用いた正確な調絃方法を身に付け、「六段の調べ」(初段)が弾けるようにする。</p> <p>後期は、演奏会へ向けての練習を中心に授業を行う。年に一度行う演奏会では合奏を試みる。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>箏の素晴らしさを理解するためには、少しでも楽器(箏)に慣れる必要がある為、授業中におのみ楽器に触れることにならないよう個人練習をすること。(一年間自分専用のお箏を使用します。)</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期後期試験	30
演奏会への参加	20
平常点(受講姿勢、提出物等)	50

教科書			
教科書1	宮城道雄小曲集		
出版社名	邦楽社	著者名	宮城道雄
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	出席状態も成績の参考とする。 実技試験、演奏会への参加は必須。
教員実務経験	箏、三絃演奏家：生田流宮城社大師範・箏、三絃教授・演奏活動、コンクール審査員等の実技経験を活かし、基礎から舞台上で合奏が来るようになるまでを指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	爪のはめ方や座り方など演奏前の基礎から始める
2	練習曲により、爪のあて方、楽譜の読み方等を覚える
3	糸に慣れるよう練習曲を進める
4	押し手などの新しい奏法を取り入れて授業をすすめる
5	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
6	簡単な合奏を試みる
7	プリント、楽譜を使用しながら糸に慣れる練習
8	進度に合わせて、適宜、次の教材をすすめる
9	進度に合わせて、適宜、次の教材学習をすすめる
10	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
11	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
12	試験曲の練習を始める
13	試験曲の奏法や曲想を学ぶ
14	試験曲の練習
15	試験曲の最終確認と実技試験を行う
16	前期の復習曲から始める
17	演奏会に向けて新しい曲の譜読みに入る
18	演奏会へ向けての練習
19	演奏会へ向けての練習
20	パートに分かれての練習
21	パートに分かれての練習
22	パートに分かれて練習

23	特に弾き難い部分を重点的に練習
24	合奏練習
25	合奏練習
26	合奏練習
27	合奏練習(演奏会本番となることもあり)
28	演奏会で演奏した曲の復習又は次の曲へ進む
29	十七絃体験、または前回の復習
30	一年を通しての試験、又はレポート提出

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	志村 智恵子				
クラス名	箏曲実技				

授業目的と到達目標	
<p>箏(こと)を通して日本伝統音楽にふれ、音色の美しさや伝統音楽を知ることの必要性を感じてもらう。また基本的な奏法や簡単な歴史を学び、学校教育の場で箏を使った授業が出来るようになることを目標とする。</p>	
授業概要	
<p>《 対面授業 》</p> <p>前期は、教本やプリント等を用い箏の基礎を学ぶ。また、チューナーを用いた正確な調絃方法を身に付け、「六段の調べ」(初段)が弾けるようにする。</p> <p>後期は、演奏会へ向けての練習を中心に授業を行う。年に一度行う演奏会では合奏を試みる。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>箏の素晴らしさを理解するためには、少しでも楽器(箏)に慣れる必要がある為、授業中にのみ楽器に触れることにならないよう個人練習をすること。(一年間自分専用のお箏を使用します。)</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期後期試験	30
演奏会への参加	20
平常点(受講姿勢、提出物等)	50

教科書			
教科書1	宮城道雄小曲集		
出版社名	邦楽社	著者名	宮城道雄
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
出席状態も成績の参考とする。 実技試験、演奏会への参加は必須。
教員実務経験
箏、三絃演奏家： 生田流宮城社大師範 ・箏、三絃教授 ・演奏活動、コンクール審査員等の実技経験を活かし、基礎から舞台上で合奏が来るようになるまでを指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	爪のはめ方や座り方など演奏前の基礎から始める
2	練習曲により、爪のあて方、楽譜の読み方等を覚える
3	糸に慣れるよう練習曲を進める
4	押し手などの新しい奏法を取り入れて授業をすすめる
5	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
6	簡単な合奏を試みる
7	プリント、楽譜を使用しながら糸に慣れる練習
8	進度に合わせて、適宜、次の教材をすすめる
9	進度に合わせて、適宜、次の教材学習をすすめる
10	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
11	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
12	試験曲の練習を始める
13	試験曲の奏法や曲想を学ぶ
14	試験曲の練習
15	試験曲の最終確認と実技試験を行う
16	前期の復習曲から始める
17	演奏会に向けて新しい曲の譜読みに入る
18	演奏会へ向けての練習
19	演奏会へ向けての練習
20	パートに分かれての練習
21	パートに分かれての練習
22	パートに分かれて練習

23	特に弾き難い部分を重点的に練習
24	合奏練習
25	合奏練習
26	合奏練習
27	合奏練習(演奏会本番となることもあり)
28	演奏会で演奏した曲の復習又は次の曲へ進む
29	十七絃体験、または前回の復習
30	一年を通しての試験、又はレポート提出

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	志村 智恵子				
クラス名	箏曲実技				

授業目的と到達目標	
<p>箏(こと)を通して日本伝統音楽にふれ、音色の美しさや伝統音楽を知ることの必要性を感じてもらう。また基本的な奏法や簡単な歴史を学び、学校教育の場で箏を使った授業が出来るようになることを目標とする。</p>	
授業概要	
<p>《 対面授業 》</p> <p>前期は、教本やプリント等を用い、箏の基礎や簡単な歴史を学ぶ。また、チューナーを用いた正確な調絃方法を身に付け、「六段の調べ」(初段)が弾けるようにする。</p> <p>後期は、演奏会へ向けての練習を中心に授業を行う。年に一度行う演奏会では合奏を試みる。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>箏の素晴らしさを理解するためには、少しでも楽器(箏)に慣れる必要がある為、授業中にのみ楽器に触れることにならないよう個人練習をすること。(一年間自分専用の箏を使用)</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期後期試験	30
演奏会への参加	20
平常点(授業への取り組み、提出物等)	50

教科書			
教科書1	宮城道雄小曲集		
出版社名	邦楽社	著者名	宮城道雄
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
出席状態も成績の参考とする。 実技試験、演奏会への参加は必須
教員実務経験
箏、三絃演奏家： 生田流宮城社大師範 ・箏、三絃教授 ・演奏活動、コンクール審査員等の実技経験を活かし、基礎から舞台上で合奏が来るようになるまでを指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	爪のはめ方や座り方など演奏前の基礎から始める
2	練習曲により、爪のあて方、楽譜の読み方等を覚える
3	糸に慣れるよう練習曲を進める
4	押し手などの新しい奏法を取り入れて授業をすすめる
5	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
6	簡単な合奏を試みる
7	プリント、楽譜を使用しながら糸に慣れる練習
8	進度に合わせて、適宜、次の教材をすすめる
9	進度に合わせて、適宜、次の教材学習をすすめる
10	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
11	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
12	試験曲の練習を始める
13	試験曲の奏法や曲想を学ぶ
14	試験曲の練習
15	試験曲の最終確認と実技試験を行う
16	前期の復習曲から始める
17	演奏会に向けて新しい曲の譜読みに入る
18	演奏会へ向けての練習
19	演奏会へ向けての練習
20	パートに分かれての練習
21	パートに分かれての練習
22	パートに分かれて練習

23	特に弾き難い部分を重点的に練習
24	合奏練習
25	合奏練習
26	合奏練習
27	合奏練習(演奏会本番となることもあり)
28	演奏会で演奏した曲の復習又は次の曲へ進む
29	十七絃体験、または前回の復習
30	一年を通しての試験、又はレポート提出

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	志村 智恵子				
クラス名	箏曲実技				

授業目的と到達目標	
<p>箏(こと)を通して日本伝統音楽にふれ、音色の美しさや伝統音楽を知ることの必要性を感じてもらう。また基本的な奏法や簡単な歴史を学び、学校教育の場で箏を使った授業が出来るようになることを目標とする。</p>	
授業概要	
<p>《 対面授業 》</p> <p>前期は、教本やプリント等を用い、箏の基礎や簡単な歴史を学ぶ。また、チューナーを用いた正確な調絃方法を身に付け、「六段の調べ」(初段)が弾けるようにする。</p> <p>後期は、演奏会へ向けての練習を中心に授業を行う。年に一度行う演奏会では合奏を試みる。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>箏の素晴らしさを理解するためには、少しでも楽器(箏)に慣れる必要がある為、授業中にのみ楽器に触れることにならないよう個人練習をすること。(一年間自分専用の箏を使用)</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期後期試験	30
演奏会への参加	20
平常点(授業への取り組み、提出物等)	50

教科書			
教科書1	宮城道雄小曲集		
出版社名	邦楽社	著者名	宮城道雄
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
出席状態も成績の参考とする。 実技試験、演奏会への参加は必須。
教員実務経験
箏、三絃演奏家： 生田流宮城社大師範 ・箏、三絃教授 ・演奏活動、コンクール審査員等の実技経験を活かし、基礎から舞台上で合奏が来るようになるまでを指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	爪のはめ方や座り方など演奏前の基礎から始める
2	練習曲により、爪のあて方、楽譜の読み方等を覚える
3	糸に慣れるよう練習曲を進める
4	押し手などの新しい奏法を取り入れて授業をすすめる
5	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
6	簡単な合奏を試みる
7	プリント、楽譜を使用しながら糸に慣れる練習
8	進度に合わせて、適宜、次の教材をすすめる
9	進度に合わせて、適宜、次の教材学習をすすめる
10	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
11	進度に合わせて、適宜、次の教材に学習をすすめる
12	試験曲の練習を始める
13	試験曲の奏法や曲想を学ぶ
14	試験曲の練習
15	試験曲の最終確認と実技試験を行う
16	前期の復習曲から始める
17	演奏会に向けて新しい曲の譜読みに入る
18	演奏会へ向けての練習
19	演奏会へ向けての練習
20	パートに分かれての練習
21	パートに分かれての練習
22	パートに分かれて練習

23	特に弾き難い部分を重点的に練習
24	合奏練習
25	合奏練習
26	合奏練習
27	合奏練習(演奏会本番となることもあり)
28	演奏会で演奏した曲の復習又は次の曲へ進む
29	十七絃体験、または前回の復習
30	一年を通しての試験、又はレポート提出

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 長十郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>日本音楽の理解と、少しでも日本人として、その良さを、三味線と言う日本独自の、特長的な楽器を通して感じてもらいたい。</p> <p>まず初歩的な事をマスターしていく間に、その曲に込められた、日本的な音使いによる表現方法を学んでもらいたい。</p>	
授業概要	
<p>対面授業</p> <p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を練習曲から入りながら指導する。古典曲は「松の緑」を教え、どう弾くかをそのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。後期は、よりスムーズにメロディックに勘処の移行が出来るように、レベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>まじめに授業をうけ、遅刻をしない</p> <p>くり返しけいこをする</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業	50
演奏会での成果 注)試験とみなす	50

教科書			
教科書1	歌扇録(唄)三味線(赤譜)を直したもののコピーを渡す		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献
----------

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	<p>今藤長十郎…長唄・今藤流家元一般社団法人長唄協会副会長。一昨年はウィーン楽友協会での自身の公演。昨年は10月に三回目のカーネギーホールで自身の公演。京都宮川町京おどりの作曲は 35 年間毎年手掛ける。他自身のリサイタルは 25 年間毎年開催。他長唄協会での指導、NHK国立劇場主催公演多数。</p> <p>授業は自身の経験を踏まえて、本物の伝統音楽を伝えて行く事に心血を注いでいる。</p>
教員実務経験	

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p> <p>練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、</p> <p>リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。</p>
2	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p> <p>練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、</p> <p>リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。</p>
3	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p> <p>練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、</p> <p>リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。</p>
4	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p>

	練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
5	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
6	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
7	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
8	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
9	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
10	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
11	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
12	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、

	練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
13	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
14	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
15	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
16	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
17	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
18	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
19	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
20	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
21	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
22	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
23	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
24	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
25	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
26	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。

27	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
28	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
29	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
30	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 長十郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>日本音楽の理解と、少しでも日本人として、その良さを、三味線と言う日本独自の、特長的な楽器を通して感じてもらいたい。</p> <p>まず初歩的な事をマスターしていく間に、その曲に込められた、日本的な音使いによる表現方法を学んでもらいたい。</p>	
授業概要	
<p>対面授業</p> <p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を練習曲から入りながら指導する。古典曲は「松の緑」を教え、どう弾くかをそのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。後期は、よりスムーズにメロディックに勘処の移行が出来るように、レベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>まじめに授業をうけ、遅刻をしない</p> <p>くり返しけいこをする</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業	50
演奏会での成果 注)試験とみなす	50

教科書			
教科書1	歌扇録(唄)三味線(赤譜)を直したもののコピーを渡す		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献
----------

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	<p>今藤長十郎…長唄・今藤流家元一般社団法人長唄協会副会長。一昨年はウィーン楽友協会での自身の公演。昨年は10月に三回目のカーネギーホールで自身の公演。京都宮川町京おどりの作曲は 35 年間毎年手掛ける。他自身のリサイタルは 25 年間毎年開催。他長唄協会での指導、NHK国立劇場主催公演多数。</p> <p>授業は自身の経験を踏まえて、本物の伝統音楽を伝えて行く事に心血を注いでいる。</p>
教員実務経験	

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p> <p>練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、</p> <p>リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。</p>
2	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p> <p>練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、</p> <p>リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。</p>
3	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p> <p>練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、</p> <p>リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。</p>
4	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p>

	練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
5	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
6	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
7	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
8	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
9	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
10	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
11	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
12	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、

	練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
13	前期では、三味線の持ち方、パチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
14	前期では、三味線の持ち方、パチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
15	前期では、三味線の持ち方、パチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
16	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
17	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
18	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
19	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
20	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
21	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
22	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
23	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
24	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
25	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
26	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。

27	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
28	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
29	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。
30	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛治」を練習しながら、曲の理解を深める。

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	今藤 長十郎				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>日本音楽の理解と、少しでも日本人として、その良さを、三味線と言う日本独自の、特長的な楽器を通して感じてもらいたい。</p> <p>まず初歩的な事をマスターしていく間に、その曲に込められた、日本的な音使いによる表現方法を学んでもらいたい。</p>	
授業概要	
<p>対面授業</p> <p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を練習曲から入りながら指導する。古典曲は「松の緑」を教え、どう弾くかをそのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。後期は、よりスムーズにメロディックに勘処の移行が出来るように、レベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>まじめに授業をうけ、遅刻をしない</p> <p>くり返しけいこをする</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業	50
演奏会での成果 注)試験とみなす	50

教科書			
教科書1	歌扇録(唄)三味線(赤譜)を直したもののコピーを渡す		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献
----------

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	<p>今藤長十郎…長唄・今藤流家元一般社団法人長唄協会副会長。一昨年はウィーン楽友協会での自身の公演。昨年は10月に三回目のカーネギーホールで自身の公演。京都宮川町京おどりの作曲は 35 年間毎年手掛ける。他自身のリサイタルは 25 年間毎年開催。他長唄協会での指導、NHK国立劇場主催公演多数。</p> <p>授業は自身の経験を踏まえて、本物の伝統音楽を伝えて行く事に心血を注いでいる。</p>
教員実務経験	

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p> <p>練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、</p> <p>リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。</p>
2	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p> <p>練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、</p> <p>リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。</p>
3	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p> <p>練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、</p> <p>リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。</p>
4	<p>前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、</p>

	練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
5	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
6	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
7	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
8	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
9	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
10	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
11	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勘処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
12	前期では、三味線の持ち方、バチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、

	練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
13	前期では、三味線の持ち方、パチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
14	前期では、三味線の持ち方、パチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
15	前期では、三味線の持ち方、パチの持ち方から始まり、正しい演奏方法、どう弾いたら良い音が出せるかと云う事を、練習から入りながら指導する。古典曲も「松の緑」は前期に教え、その古典曲をどう弾くかを、そのフレーズの弾き方、リズムのとり方、正しい勤処(ポジション)、調弦の合わせ方を練習しながらマスターするように教える。
16	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
17	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
18	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
19	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
20	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
21	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
22	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
23	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
24	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
25	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
26	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。

27	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
28	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
29	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。
30	後期は、前期に引き続き、よりスムーズに、メロディックに勤処の移行が出来るように、古典曲はレベルに合わせて「都鳥」「小鍛冶」を練習しながら、曲の理解を深める。

科目名	邦楽1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	実習		
教員名	志村 哲				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>受講生各自が将来、学校教員・種々の音楽指導者・文化活動企画／実行委員として、あるいは、作曲家・演奏家・音楽愛好家として、日本伝統文化を深く、さらにはできるだけ広く理解しようとする意欲が持てるよう指導する。特に、日本楽器のなかで、国際的普及が顕著であり、かつ伝統音楽からポピュラー音楽まで、幅広く使用されている尺八について、その基礎知識習得と実技を通して魅力を知り、その経験を諸活動に役立てられるようにする。</p>	
授業概要	
<p>「邦楽1」では、時代劇に登場する虚無僧の音楽「古典本曲」を扱い、楽器と奏法の特徴を感得させ、独奏曲、吹き合わせ等の稽古を行なう。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>楽器演奏は、短時間でも毎日稽古することが、自己の能力やものの考え方の上で、新たな発見へとつながります。洗顔や歯磨きのように、楽器を手にしなければ落ち着かないようになるくらい習慣づけましょう。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
発表会	40
授業に取り組む姿勢	50
最終課題	10

教科書			
教科書1	授業内で配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	『古管尺八の楽器学』		
出版社名	東京: 出版芸術社	著者名	志村哲

参考書名2	『事典 世界音楽の本』		
出版社名	東京:岩波書店	著者名	志村哲ほか、共著
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	国際尺八フェスティバル他への招待講師・尺八演奏家であり、尺八の研究で博士(学術)取得。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1. 尺八の歴史と楽器の種類、音楽種目の拡がりを理解する。 楽器の取り扱い方法を学ぶ。
2	発音の原理を知り、練習方法を学ぶ。
3	各自の問題点の確認と実技に関する指導。
4	2. 実技指導に際しては、以下の内容を、各自の習得レベルに合わせて、毎週、繰り返し指導する。
5	・様々な楽器尺八の取り扱い方法を学ぶ。
6	・吹奏に際して、心身の事前準備、姿勢、呼吸法等を修得する。
7	・楽器の機構を理解し、正しい発音方法を身につける。
8	・練習曲により、音階と簡単な旋律の運指および、オクターブ間の吹分けの練習を行なう。
9	・楽器の機構を理解し、正しい発音方法を繰り返し確認しながら身につける。 ・音階と簡単な旋律の運指および、オクターブ間の吹分けの練習。
10	・楽器の機構を理解し、正しい発音方法を身につける。 ・音階と簡単な旋律の運指および、オクターブ間の吹分けの練習。
11	・記譜法の理解と楽曲の実技指導。
12	・記譜法の理解と楽曲の実技指導。
13	・記譜法の理解と楽曲の実技指導。
14	3. 楽曲の吹奏は、各自の習得レベルに応じて、以下の内容で、毎週、繰り返し稽古する。
15	・古典本曲の記譜法を理解する。
16	・古典本曲の記譜法を理解する。
17	・虚無僧尺八の基本的な吹奏技法を学ぶ。
18	・虚無僧尺八の基本的な吹奏技法を学ぶ。
19	・虚無僧尺八の基本的な吹奏技法を学ぶ。

20	・吹奏音の音色をよくするための稽古を実践する。
21	・吹奏音の音色をよくするための稽古を実践する。
22	・吹奏音の音色をよくするための稽古を実践する。
23	・虚無僧尺八の特徴を理解し、古典本曲《嘘鈴》を稽古する。
24	・虚無僧尺八の特徴を理解し、古典本曲《嘘鈴》を稽古する。
25	・虚無僧尺八の特徴を理解し、古典本曲《嘘鈴》を稽古する。
26	4. 1年間の修行の成果を発表会で吹奏し、確認する。
27	・尺八固有の運指法を簡単な楽曲の練習を通じて身につける。
28	・尺八固有の運指法を簡単な楽曲の練習を通じて身につける。
29	発表会の実施
30	一年間の復習

科目名	指揮法	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	福永 吉宏				
クラス名	AD コース対象				

授業目的と到達目標	
<p>音楽作品を演奏する際、合奏者に指揮者として自分の音楽を伝える手段として、人間の本能的な体の動きを使い音楽の内容までを深く感じ取らすことを目的とする。単に指揮を振るテクニックを学ぶものではなく、個人の持つ人間性と音楽の知識の深さをいかに相手(合奏者)に伝えるかを目標とする。</p>	
授業概要	
<p>指揮者の在存する前、つまり合奏を行う時に、指揮者が必要となる音楽の作品から取り組むことになる。いわゆるバロック音楽の作品から古典派、ロマン派、そして近代までの作品を取り上げる。その際、指揮者として音楽作品を解釈し、自らが「分かった」と理解することを体験するようにする。</p> <p>教員が指揮者としての経験を活かし、指揮法の様々な表現方法を修得させる。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>音楽作品のもつ要素(テンポ、リズム、アーティキュレーション、ダイナミック、音色など)を学習し、自分なりの作品の解釈を指揮法なるもので表現する。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業への積極性、質疑応答への参加、試験を総合的に評価	100

教科書			
教科書1	演奏の原理		
出版社名	シンフォニア出版	著者名	ハンス・ペーター・シュミッツ
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	授業の中で適宜指示する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	まずバロック音楽であるバッハやヘンデルの作品を中心に、モーツァルト、ベートーヴェンなどの作品を取り上げる。 バッハの管弦楽組曲を取りあげる。
2	バッハの管弦楽組曲を取りあげる。
3	バッハの管弦楽組曲を取りあげる。
4	バッハの管弦楽組曲を取りあげる。
5	ヴィヴァルディの合奏協奏曲「四季」を取りあげる。
6	ヴィヴァルディの合奏協奏曲「四季」を取りあげる。
7	ヴィヴァルディの合奏協奏曲「四季」を取りあげる。
8	モーツァルトの交響曲を取りあげる。
9	モーツァルトの交響曲を取りあげる。
10	モーツァルトの交響曲を取りあげる。
11	ベートーヴェンの交響曲を取りあげる。
12	ベートーヴェンの交響曲を取りあげる。
13	ベートーヴェンの交響曲を取りあげる。
14	ベートーヴェンの交響曲を取りあげる。
15	ベートーヴェンの交響曲を取りあげる。
16	ブラームス、シューベルトの作品からロマン派、近代への作品へと移り、最後はウィーンのワルツまで取り上げる。
17	シューベルトの交響曲を取りあげる。
18	シューベルトの交響曲を取りあげる。

19	シューベルトの交響曲を取りあげる。
20	ブラームスの交響曲を取りあげる。
21	ブラームスの交響曲を取りあげる。
22	ブラームスの交響曲を取りあげる。
23	ブラームスの交響曲を取りあげる。
24	ブラームスの交響曲を取りあげる。
25	ブラームスの交響曲を取りあげる。
26	ブラームスの交響曲を取りあげる。
27	ウィーンのワルツを取りあげる。
28	ウィーンのワルツを取りあげる。
29	ウィーンのワルツを取りあげる。
30	ウィーンのワルツを取りあげる。

科目名	指揮法	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	高谷 光信				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>音楽性豊かな表現をするための基本的な指揮法の習得を目的とする。</p> <p>本科目は、中高教科音楽を教授するに足る基礎的知識および技能等を修得し、教職実践力と関連づけて理解することを一目的とする。</p> <p>指揮者と指導者の目線で楽譜を捉えて、それを伝える身体的表現を身につける。教職課程履修学生は、学修内容を中高教科音楽の内容および教材に関連づけて主体的に探求する。</p>	
授業概要	
<p>実際に教職現場や社会人のコーラス、吹奏楽、オーケストラ等、指揮をする場面は多数あり、音楽を専門で勉強した学生には指揮する機会が訪れることが多い。合唱の指揮を主眼として実習を行い、その技法を通して必要な理論、知識を深め、実践力を養う。この授業では基本的なパトンテクニックを理解して、いかにして楽曲の指揮をして音楽的表現をしていくのかを追求する。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>基本的な指揮技術の復習および、楽曲研究をすること。</p> <p>教職課程履修学生は、中高教育実習での研究授業場面や卒業後の中高正規授業での指導場面を想定して、本科目の修得内容を活用しつつ、「中高教科の自主的教材研究」に主体的に取り組む。その際、当該教科の学習指導要領および教科書等を積極的に活用する。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業への積極的参加度	70
レポート	30

教科書			
教科書1	教材および資料等のプリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			

出版社名		著者名	
------	--	-----	--

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
東京混声合唱団 指揮者(2007-2023) ウクライナ・チェルニーヒウフィルハーモニー交響楽団(2002-2023)

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	第1回 はじめに (1)指揮について (2)指揮の必要性 (3)合唱と独唱・重唱の違いについて
2	第2回 基本的な指揮の知識 (1)腕、手、指の動きについて (2)指揮棒について
3	第3回 2拍子・4拍子と3拍子の振り方(基本形)
4	第4回 2拍子・4拍子と3拍子の振り方(アフタクトとニュアンス指示)
5	第5回 6拍子の振り方(基本形)
6	第6回 6拍子の振り方(アフタクトとニュアンス指示)
7	第7回 6拍子以外の複合拍子の振り方(基本形)
8	第8回 合唱の指揮について 息使い、フレーズの重要性について
9	第9回 歌詞の発音と指示
10	第10回 合唱指揮の実践

11	第 11 回 テンポ、リズム、歌い出しの指示について
12	第 12 回 各声部および伴奏とのバランス、伴奏者への指示について(基礎)
13	第 13 回 各声部および伴奏とのバランス、伴奏者への指示について(応用)
14	第 14 回 ニュアンス指示と左手の使い方(基礎/応用)
15	第 15 回 授業内レポート 及び 指揮法についてのまとめ
16	第 16 回 はじめに (1)合奏指揮と合唱指揮における共通、相違点について (2)楽器の編成と指揮の関係について
17	第 17 回 基本的な合奏指揮のための知識 (1)弦楽器について (2)管楽器について (3)打楽器について
18	第 18 回 リタルダンド、分割を含む楽曲の指揮法(基礎)
19	第 19 回 リタルダンド、分割を含む楽曲の指揮法(応用)
20	第 20 回 フェルマータ、休符を含むリズムのある楽曲の指揮法(基礎)
21	第 21 回 フェルマータ、休符を含むリズムのある楽曲の指揮法(応用)
22	第 22 回 合奏指揮について 合奏の編成規模について
23	第 23 回 各種楽曲の楽譜研究について 教育用楽器による編成の楽譜
24	第 24 回 吹奏楽の楽譜 管弦楽小編成の楽譜
25	第 25 回 合奏指揮の実践
26	第 26 回 教育用楽器による編成の楽曲指揮(基礎)
27	第 27 回 教育用楽器による編成の楽曲指揮(応用)
28	第 28 回 吹奏楽など小編成の楽曲指揮(基礎)
29	第 29 回 吹奏楽など小編成の楽曲指揮(応用)
30	第 30 回 まとめとテスト、レポート

科目名	基礎和声法1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	○橘 由美子、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期試験	40
授業内添削	20
後期試験	40

教科書			
教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員がオルガニストとしての演奏経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削
13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削

25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	○岡本 時子、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業内添削	20
前期試験	40
後期試験	40

教科書			
教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員が作曲家としての経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削
13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削

25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	○田坂 千禎、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期試験	40
授業内添削	20
後期試験	40

教科書			
教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員がオルガニストとしての演奏経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削
13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削

25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	○下石坂 徹、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期試験	40
後期試験	40
授業内添削	20

教科書			
教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員が作曲家としての経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削
13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削

25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	○田坂 千禎、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期試験	40
後期試験	40
授業内添削	20

教科書			
教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員がオルガニストとしての演奏経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削
13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削

25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標					
音楽を志す者にとって和声法の学習は不可欠です。同時に響く数個の音の組み合わせとその連結の技法を修得することで、作曲や演奏の学習に生かすことを目的とします。					
授業概要					
授業は「対面授業」で行います。 ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は3和音基本形の連結、後期は3和音第2転回形の連結までを範囲とし、バス課題の形で学びます。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。					

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業内添削	20
前期試験	40
後期試験	40

教科書			
教科書1	和声 理論と実習1		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員が国内外で多くの作品の楽譜出版、オペラ上演等されている作曲家としての経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	3和音基本形の配置と連結、課題演習と添削
3	3和音基本形の連結、課題演習と添削
4	3和音基本形の連結、課題演習と添削
5	3和音基本形の連結、課題演習と添削
6	3和音基本形の連結、課題演習と添削
7	3和音基本形の連結、課題演習と添削
8	3和音基本形の連結、課題演習と添削
9	3和音基本形の連結、課題演習と添削
10	3和音基本形の連結、課題演習と添削
11	3和音基本形の連結、課題演習と添削
12	3和音基本形の連結、課題演習と添削
13	3和音基本形の連結、課題演習と添削
14	3和音基本形の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	3和音第1転回形の配置と連結、課題演習と添削
18	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
19	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
20	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
21	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
22	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
23	3和音第1転回形の連結、課題演習と添削
24	3和音第2転回形の配置と連結、課題演習と添削

25	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
26	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
27	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
28	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
29	3和音第2転回形の連結、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	○田坂 千禎、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
基礎和声法1(初級)に続く授業です。4和音としての属7和音・ドッペル・ドミナント和音・副属7和音の使い方を修得し、作曲や演奏へ生かしながら、音楽の更なる理解を深めることを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 基礎和声法1に引き続き、ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は属7和音の連結、後期はドッペルドミナント和音、準固有和音、副属7和音の連結までを範囲とし、バス課題の形で学習します。折に触れて、ソプラノ課題、非和声音の扱い方も学びます。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期試験	40
授業内添削	20
後期試験	40

教科書			
教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員がオルガニストとしての演奏経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	属7和音の配置と連結、課題演習と添削
3	属7和音の連結、課題演習と添削
4	属7和音の連結、課題演習と添削
5	属7和音の連結、課題演習と添削
6	属7和音の連結、課題演習と添削
7	属7和音の連結、課題演習と添削
8	属7和音の連結、課題演習と添削
9	属7和音の連結、課題演習と添削
10	属7和音の連結、課題演習と添削
11	属7和音の連結、課題演習と添削
12	属7和音の連結、課題演習と添削
13	属7和音の連結、課題演習と添削
14	属7和音の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	ドッペルドミナント和音の配置と連結、課題演習と添削
18	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
19	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
20	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
21	準固有和音の配置と連結、課題演習と添削
22	準固有和音の連結、課題演習と添削

23	副属7和音の連結、課題演習と添削
24	副属7和音の連結、課題演習と添削
25	副属7和音の連結、課題演習と添削
26	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
27	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
28	ソプラノ課題、課題演習と添削
29	ソプラノ課題、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	○河合 摂子、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
基礎和声法1(初級)に続く授業です。4和音としての属7和音・ドッペル・ドミナント和音・副属7和音の使い方を修得し、作曲や演奏へ生かしながら、音楽の更なる理解を深めることを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 基礎和声法1に引き続き、ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は属7和音の連結、後期はドッペルドミナント和音、準固有和音、副属7和音の連結までを範囲とし、バス課題の形で学習します。折に触れて、ソプラノ課題、非和声音の扱い方も学びます。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
後期試験	40
授業内添削	20
前期試験	40

教科書			
教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員が作曲家としての経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	属7和音の配置と連結、課題演習と添削
3	属7和音の連結、課題演習と添削
4	属7和音の連結、課題演習と添削
5	属7和音の連結、課題演習と添削
6	属7和音の連結、課題演習と添削
7	属7和音の連結、課題演習と添削
8	属7和音の連結、課題演習と添削
9	属7和音の連結、課題演習と添削
10	属7和音の連結、課題演習と添削
11	属7和音の連結、課題演習と添削
12	属7和音の連結、課題演習と添削
13	属7和音の連結、課題演習と添削
14	属7和音の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	ドッペルドミナント和音の配置と連結、課題演習と添削
18	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
19	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
20	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
21	準固有和音の配置と連結、課題演習と添削
22	準固有和音の連結、課題演習と添削

23	副属7和音の連結、課題演習と添削
24	副属7和音の連結、課題演習と添削
25	副属7和音の連結、課題演習と添削
26	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
27	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
28	ソプラノ課題、課題演習と添削
29	ソプラノ課題、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

科目名	基礎和声法2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	○下石坂 徹、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
基礎和声法1(初級)に続く授業です。4和音としての属7和音・ドッペル・ドミナント和音・副属7和音の使い方を修得し、作曲や演奏へ生かしながら、音楽の更なる理解を深めることを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 基礎和声法1に引き続き、ソプラノ、アルト、テノール、バスの4声体による和音の連結を学習します。前期は属7和音の連結、後期はドッペルドミナント和音、準固有和音、副属7和音の連結までを範囲とし、バス課題の形で学習します。折に触れて、ソプラノ課題、非和声音の扱い方も学びます。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃より色々な和音の響きに興味を持ち、様々な楽曲の中での和音の使い方方に接しておくことが望ましい。毎回の授業で実施した和声課題を自身でピアノで弾いて、響きを確認しておくこと。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
後期試験	40
前期試験	40
授業内添削	20

教科書			
教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	池内友次郎 他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員が作曲家としての経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	属7和音の配置と連結、課題演習と添削
3	属7和音の連結、課題演習と添削
4	属7和音の連結、課題演習と添削
5	属7和音の連結、課題演習と添削
6	属7和音の連結、課題演習と添削
7	属7和音の連結、課題演習と添削
8	属7和音の連結、課題演習と添削
9	属7和音の連結、課題演習と添削
10	属7和音の連結、課題演習と添削
11	属7和音の連結、課題演習と添削
12	属7和音の連結、課題演習と添削
13	属7和音の連結、課題演習と添削
14	属7和音の連結、課題演習と添削
15	前期のまとめと試験
16	前期の復習
17	ドッペルドミナント和音の配置と連結、課題演習と添削
18	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
19	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
20	ドッペルドミナント和音の連結、課題演習と添削
21	準固有和音の配置と連結、課題演習と添削
22	準固有和音の連結、課題演習と添削

23	副属7和音の連結、課題演習と添削
24	副属7和音の連結、課題演習と添削
25	副属7和音の連結、課題演習と添削
26	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
27	学習した全ての和音を含む連結、課題演習と添削
28	ソプラノ課題、課題演習と添削
29	ソプラノ課題、課題演習と添削
30	後期のまとめと試験

出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
<p>【MALTA】サクソフォンプレイヤー ライオネル・ハンプトン楽団(U.S.A.)コンサート・マスターに就任。オリジナル楽曲は数々の企業 CM、TV 等で起用。50 枚を超える CD と DVD に収録し発表。</p> <p>[MALTA Official ホームページ, <a href="https://www.malta-jazzclub.com">https://www.malta-jazzclub.com</a>]</p>

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ポピュラー音楽全般 1 ポピュラー音楽の成り立ちや、多種の音楽の相関関係などについて
2	ポピュラー音楽全般 2 ポピュラー音楽の成り立ちや、多種の音楽の相関関係などについて
3	ブルースの本質 1 人間の歴史と音楽のリスニングなど
4	ブルースの本質 2 人間の歴史と音楽のリスニング2など
5	ジャズの歴史と人間 1 時代背景と進化する音楽理論1
6	ジャズの歴史と人間 2 時代背景と進化する音楽理論2
7	ジャズ・フュージョン系といわれるジャンルのリスニング1
8	ジャズ・フュージョン系といわれるジャンルのリスニング2
9	スタンダードのコード・プログレッションのアナリーゼ1
10	スタンダードのコード・プログレッションのアナリーゼ2
11	J-POPSの歴史と進化1
12	J-POPSの歴史と進化2
13	MALTA作品(ミュージック)の解説・分析・アナライズ1
14	MALTA作品(ミュージック)の解説・分析・アナライズ2
15	オリジナル作曲への基礎作り、創作、制作意欲1
16	オリジナル作曲への基礎作り、創作、制作意欲2
17	オリジナル作曲への基礎作り、創作、制作意欲3
18	フォーウエイクローズダブルリード・アレンジ方法1
19	フォーウエイクローズダブルリード・アレンジ方法2

20	フォーウエイクローズダブルリード・アレンジ方法3
21	オリジナル作曲への創作、アレンジ法1
22	オリジナル作曲への創作、アレンジ法2
23	オリジナル作曲への創作、アレンジ法3
24	ポピュラー界のレジェンドたちの映像の視聴1
25	ポピュラー界のレジェンドたちの映像の視聴2
26	ポピュラー界のレジェンドたちの映像の視聴3
27	ポピュラー界のレジェンドたちの映像の視聴4
28	音楽とビジネス、Art for Art, OR Art for Money,
29	21世紀のアジアから世界発信へ
30	一年間の要約と試験

科目名	ポピュラー音楽演習C【隔週】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	カルロス 菅野				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>ラテン音楽の歴史と特徴を学び、それらを通じて豊富なリズムに対する理解を深め、それを音楽制作のアイデアとして取り込んでいけることを目指す。</p> <p>多様な音楽ジャンルを掘り下げていくことの重要性を認識する。</p>	
授業概要	
<p>Orquesta De La Luz、熱帯 JAZZ 楽団の35年におけるラテン音楽界での経験をもとに、映像や音源資料を基にラテン音楽を幅広く解説。</p> <p>ラテン音楽の根幹であるリズム感を養うために、メトロノームを使った基礎的トレーニングやボディームーブメントによる体幹からのグルーブ感のトレーニングの方法を解説し、実際に打楽器を演奏したり、ダンスステップを体験することでリズム感を養う。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>配布する譜面などで授業の度に内容の復習が必要</p> <p>実践授業には積極的に参加すること</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期レポート	40
後期レポート	40
最終リズム感テスト	20

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
単位取得に際しては出席率も考慮する
教員実務経験
<p>1984 年～89 年 松岡直也グループに参加</p> <p>1990 年～95 年 世界的に活躍した日本人サルサバンド「Orquesta De La Luz」のリーダーとして海外活動。93 年国連平和賞受賞、95 年グラミー賞トロピカルラテン部門ノミネート、同年レコード大賞特別賞受賞</p> <p>1995 年 デラルス脱退後ラテンジャズビッグバンド「熱帯 JAZZ 楽団」を結成。2020 年結成 25 周年を迎える。同楽団でアルバム 18 枚、DVD3 枚をリリース。</p>

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	<p>授業内容の解説</p> <p>ラテンアメリカの地理的条件を解説</p> <p>ラテン音楽の歴史</p> <p>民族的背景</p>
2	<p>リズムトレーニング1.</p> <p>リズム感テスト</p> <p>ボディームーヴメント1</p> <p>ウォーキング(歩き方とリズム感)</p>
3	<p>ラテン打楽器の種類</p> <p>ラテンリズムの核”クラベ”について</p> <p>アフロルーツのリズム</p>
4	<p>リズムトレーニング2</p> <p>打楽器の実践 振る、こする、叩く</p> <p>シンプルな楽器によるボディームーヴメントの確認</p>
5	<p>クラベ再考</p> <p>アフロリズム～ルンバへ</p> <p>ルンバクラベとポリリズム</p>
6	<p>リズムトレーニング3</p> <p>アフロリズムアンサンブル実践</p>
7	<p>中南米の民族的背景</p> <p>キューバ音楽</p>

	ルンバ、ソン、チャチャチャ
8	リズムトレーニング4 チャチャチャ実践 コンガ、ティンパレスの基礎
9	ルンバ、ソンからマンボへ マンボとは マンボの時代背景 キューバ革命
10	リズムトレーニング5 メトロノームトレーニング法 2拍4拍、8分裏、16分裏、スウィング、2拍3連、その他
11	ブラジル音楽 サンバの打楽器 サンバとボサノバ
12	サンババトウカーダの実践 サンバ打楽器によるアンサンブル体験
13	前期レポート題材 DVD「熱帯 JAZZ 楽団ラテン音楽の作法」鑑賞
14	同上 及び、作品の背景について
15	前期振り返り 後期授業概要の説明
16	ブラジル音楽 ブラジルのポピュラー音楽 MPB 世界的な広がり
17	マンボからサルサへ サルサとは 時代的背景 アメリカのエンターテインメントビジネスのあり方
18	リズムトレーニング6 ボディームーヴメント2 サルサダンス体験
19	ラテン音楽とダンス カリブ海のリズム メレンゲ、プレナ、ボンバ、ガイタ、ホローポその他 南米の音楽 フォルクローレ、タンゴなど
20	ラテンジャズ マンボとラテンジャズの関係 現代キューバ音楽とジャズ ソンゴについて
21	ラテンジャズの発展 ラテンジャズのドキュメンタリー映画「Calle 54」鑑賞
22	ラテンジャズのドキュメンタリー映画「Calle 54」鑑賞 内容の解説。現代の Jazz におけるラテンリズムの重要性について
23	ポピュラー音楽の中のラテン

	<p>サンタナ～マイアミサウンドマシーン</p> <p>ラテンポップについて</p>
24	<p>リズムトレーニング7</p> <p>サルサダンスその2 ペアダンス</p> <p>ラテン民族におけるダンスの重要性</p>
25	<p>現代のアメリカ音楽の中のラテン的要素</p> <p>ラテンディーバたちの活躍</p>
26	<p>ダンス音楽 DTM におけるラテン ラテンハウス、レゲトン、サルサの中のラップ</p> <p>メカニカルなリズムパターンの応用</p>
27	<p>日本のポピュラー音楽の中のラテン的要素</p> <p>マンボブームからラテン歌謡</p> <p>ニューミュージック時代のラテン</p>
28	<p>日本のラテンジャズ</p> <p>アフロキューバンジャズからラテンフュージョンへ</p> <p>J-pop におけるラテン</p>
29	<p>世界的な音楽ビジネスの現状</p>
30	<p>後期レポート提出</p> <p>一年間の振り返り</p>

科目名	情報音楽基礎演習	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	岡本 久				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>今日、どのような音楽を学ぶ者にとっても必要不可欠であるといえる「音楽の情報処理」の基礎的な知識および技術の習得を目的とし、2年次以降より高度な音楽制作や、自ら目指す専門領域で役立てることができるための能力を備えることを到達目標とする。</p>	
授業概要	
<p>★この授業は演習科目であり、また教室パソコンの音楽系ソフトを使用するため「対面授業」で実施します。</p> <p>コンピュータを用いた音楽情報処理の3つの基本である楽譜作成・MIDI 編集・サウンド編集について、基礎から実用までの内容を網羅する。とりわけどの音楽分野でも不可欠な楽譜制作に関する学習はより実践的に活用できるレベルまでの習得を目指す。また情報社会における音楽の様々な実例や、ルールやマナーなどについても随時紹介する。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>パソコンの操作が行えることを前提として授業を進めるため、基本操作に慣れておくこと。また随時有料／無料アプリケーションなどの紹介も行うので、自主的にそれらを手し、日々習得に務めることがなによりも大切です。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
取り組み姿勢および理解度	65
課題評価	35

教科書			
教科書1	授業で配布する資料および楽譜、オンライン・テキスト等。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
実務経験:作曲・編曲、コンピュータ音楽制作、音環境研究、システム・エンジニア、音響業務等の実務・教育経験を持っている。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	オリエンテーション。授業内容説明および諸注意。 音楽用パソコン等の基本的な使い方など。 ※以下授業計画は一応の目安とし、各クラスでの理解度や進捗状況、また各コースの目的にあった形で順番や期間、扱う音楽ジャンルなども随時調整していく。
2	楽譜作成ソフトの基本操作の習得1。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
3	楽譜作成ソフトの基本操作の習得2。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
4	楽譜作成ソフトの基本操作の習得3。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
5	楽譜作成ソフトの基本操作の習得4。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
6	楽譜作成ソフトの基本操作の習得5。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
7	楽譜作成ソフト実用レベルの習得1。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
8	楽譜作成ソフト実用レベルの習得2。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
9	楽譜作成ソフト実用レベルの習得3。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
10	楽譜作成ソフト実用レベルの習得4。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
11	楽譜作成ソフト実用レベルの習得5。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。

12	楽譜作成課題1。 アレンジを伴う実用レベルのスコア譜・パート譜の課題制作。
13	楽譜作成課題2。 アレンジを伴う実用レベルのスコア譜・パート譜の課題制作。
14	楽譜作成課題3。 アレンジを伴う実用レベルのスコア譜・パート譜の課題制作。
15	課題提出および前期総括
16	MIDI の基礎1。 MIDI の基礎知識および自動演奏ソフトの基本的な打ち込み方や操作方法の習得。
17	MIDI の基礎2。 MIDI の基礎知識および自動演奏ソフトの基本的な打ち込み方や操作方法の習得。
18	MIDI の基礎3。 MIDI の基礎知識および自動演奏ソフトの基本的な打ち込み方や操作方法の習得。
19	MIDI の応用1。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
20	MIDI の応用2。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
21	MIDI の応用3。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
22	MIDI の応用4。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
23	MIDI 編集の課題制作1。 アレンジ、そして豊かなアーティキュレーション表現などの習得を目指した実践レベルの MIDI 作品制作課題。
24	MIDI 編集の課題制作2。 アレンジ、そして豊かなアーティキュレーション表現などの習得を目指した実践レベルの MIDI 作品制作課題。
25	MIDI 編集の課題制作3。 アレンジ、そして豊かなアーティキュレーション表現などの習得を目指した実践レベルの MIDI 作品制作課題。
26	サウンド編集の基礎1。 サウンドソフトの基本的な使用方法、音の加工や変換方法などの基礎を学習。
27	サウンド編集の基礎2。 サウンドソフトの基本的な使用方法、音の加工や変換方法などの基礎を学習。
28	サウンド編集の応用1。 サウンドのより実践的・実用的な編集テクニックを学習。
29	サウンド編集の応用2。 サウンドのより実践的・実用的な編集テクニックを学習。
30	サウンド制作課題。総括。

科目名	情報音楽基礎演習	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	岡本 久				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>今日、どのような音楽を学ぶ者にとっても必要不可欠であるといえる「音楽の情報処理」の基礎的な知識および技術の習得を目的とし、2年次以降より高度な音楽制作や、自ら目指す専門領域で役立てることができるための能力を備えることを到達目標とする。</p>	
授業概要	
<p>★この授業は演習科目であり、また教室パソコンの音楽系ソフトを使用するため「対面授業」で実施します。</p> <p>コンピュータを用いた音楽情報処理の3つの基本である楽譜作成・MIDI 編集・サウンド編集について、基礎から実用までの内容を網羅する。とりわけどの音楽分野でも不可欠な楽譜制作に関する学習はより実践的に活用できるレベルまでの習得を目指す。また情報社会における音楽の様々な実例や、ルールやマナーなどについても随時紹介する。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>パソコンの操作が行えることを前提として授業を進めるため、基本操作に慣れておくこと。また随時有料/無料アプリケーションなどの紹介も行うので、自主的にそれらを手し、日々習得に務めることがなによりも大切です。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
取り組み姿勢および理解度	65
課題評価	35

教科書			
教科書1	授業で配布する資料および楽譜、オンライン・テキスト等。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
実務経験:作曲・編曲、コンピュータ音楽制作、音環境研究、システム・エンジニア、音響業務等の実務・教育経験を持っている。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	オリエンテーション。授業内容説明および諸注意。 音楽用パソコン等の基本的な使い方など。 ※以下授業計画は一応の目安とし、各クラスでの理解度や進捗状況、また各コースの目的にあった形で順番や期間、扱う音楽ジャンルなども随時調整していく。
2	楽譜作成ソフトの基本操作の習得1。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
3	楽譜作成ソフトの基本操作の習得2。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
4	楽譜作成ソフトの基本操作の習得3。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
5	楽譜作成ソフトの基本操作の習得4。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
6	楽譜作成ソフトの基本操作の習得5。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
7	楽譜作成ソフト実用レベルの習得1。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
8	楽譜作成ソフト実用レベルの習得2。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
9	楽譜作成ソフト実用レベルの習得3。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
10	楽譜作成ソフト実用レベルの習得4。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
11	楽譜作成ソフト実用レベルの習得5。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。

12	楽譜作成課題1。 アレンジを伴う実用レベルのスコア譜・パート譜の課題制作。
13	楽譜作成課題2。 アレンジを伴う実用レベルのスコア譜・パート譜の課題制作。
14	楽譜作成課題3。 アレンジを伴う実用レベルのスコア譜・パート譜の課題制作。
15	課題提出および前期総括
16	MIDI の基礎1。 MIDI の基礎知識および自動演奏ソフトの基本的な打ち込み方や操作方法の習得。
17	MIDI の基礎2。 MIDI の基礎知識および自動演奏ソフトの基本的な打ち込み方や操作方法の習得。
18	MIDI の基礎3。 MIDI の基礎知識および自動演奏ソフトの基本的な打ち込み方や操作方法の習得。
19	MIDI の応用1。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
20	MIDI の応用2。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
21	MIDI の応用3。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
22	MIDI の応用4。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
23	MIDI 編集の課題制作1。 アレンジ、そして豊かなアーティキュレーション表現などの習得を目指した実践レベルの MIDI 作品制作課題。
24	MIDI 編集の課題制作2。 アレンジ、そして豊かなアーティキュレーション表現などの習得を目指した実践レベルの MIDI 作品制作課題。
25	MIDI 編集の課題制作3。 アレンジ、そして豊かなアーティキュレーション表現などの習得を目指した実践レベルの MIDI 作品制作課題。
26	サウンド編集の基礎1。 サウンドソフトの基本的な使用方法、音の加工や変換方法などの基礎を学習。
27	サウンド編集の基礎2。 サウンドソフトの基本的な使用方法、音の加工や変換方法などの基礎を学習。
28	サウンド編集の応用1。 サウンドのより実践的・実用的な編集テクニックを学習。
29	サウンド編集の応用2。 サウンドのより実践的・実用的な編集テクニックを学習。
30	サウンド制作課題。総括。

科目名	情報音楽基礎演習	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	岡本 久				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>今日、どのような音楽を学ぶ者にとっても必要不可欠であるといえる「音楽の情報処理」の基礎的な知識および技術の習得を目的とし、2年次以降より高度な音楽制作や、自ら目指す専門領域で役立てることができるための能力を備えることを到達目標とする。</p>	
授業概要	
<p>★この授業は演習科目であり、また教室パソコンの音楽系ソフトを使用するため「対面授業」で実施します。</p> <p>コンピュータを用いた音楽情報処理の3つの基本である楽譜作成・MIDI 編集・サウンド編集について、基礎から実用までの内容を網羅する。とりわけどの音楽分野でも不可欠な楽譜制作に関する学習はより実践的に活用できるレベルまでの習得を目指す。また情報社会における音楽の様々な実例や、ルールやマナーなどについても随時紹介する。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>パソコンの操作が行えることを前提として授業を進めるため、基本操作に慣れておくこと。また随時有料/無料アプリケーションなどの紹介も行うので、自主的にそれらを手し、日々習得に務めることがなによりも大切です。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
取り組み姿勢および理解度	65
課題評価	35

教科書			
教科書1	授業で配布する資料および楽譜、オンライン・テキスト等。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
実務経験:作曲・編曲、コンピュータ音楽制作、音環境研究、システム・エンジニア、音響業務等の実務・教育経験を持っている。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	オリエンテーション。授業内容説明および諸注意。 音楽用パソコン等の基本的な使い方など。 ※以下授業計画は一応の目安とし、各クラスでの理解度や進捗状況、また各コースの目的にあった形で順番や期間、扱う音楽ジャンルなども随時調整していく。
2	楽譜作成ソフトの基本操作の習得1。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
3	楽譜作成ソフトの基本操作の習得2。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
4	楽譜作成ソフトの基本操作の習得3。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
5	楽譜作成ソフトの基本操作の習得4。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
6	楽譜作成ソフトの基本操作の習得5。 様々な打ち込み方法や編集・レイアウト・印刷などの一連の制作方法を学習。
7	楽譜作成ソフト実用レベルの習得1。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
8	楽譜作成ソフト実用レベルの習得2。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
9	楽譜作成ソフト実用レベルの習得3。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
10	楽譜作成ソフト実用レベルの習得4。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。
11	楽譜作成ソフト実用レベルの習得5。 所定の楽譜をもとに簡単なアレンジ展開を行い、より実践的な楽譜作成ソフトの利用方法を学習する。

12	楽譜作成課題1。 アレンジを伴う実用レベルのスコア譜・パート譜の課題制作。
13	楽譜作成課題2。 アレンジを伴う実用レベルのスコア譜・パート譜の課題制作。
14	楽譜作成課題3。 アレンジを伴う実用レベルのスコア譜・パート譜の課題制作。
15	課題提出および前期総括
16	MIDI の基礎1。 MIDI の基礎知識および自動演奏ソフトの基本的な打ち込み方や操作方法の習得。
17	MIDI の基礎2。 MIDI の基礎知識および自動演奏ソフトの基本的な打ち込み方や操作方法の習得。
18	MIDI の基礎3。 MIDI の基礎知識および自動演奏ソフトの基本的な打ち込み方や操作方法の習得。
19	MIDI の応用1。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
20	MIDI の応用2。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
21	MIDI の応用3。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
22	MIDI の応用4。 MIDI 編集ソフトによる、より発展的な自動演奏表現(アーティキュレーション等)の学習。
23	MIDI 編集の課題制作1。 アレンジ、そして豊かなアーティキュレーション表現などの習得を目指した実践レベルの MIDI 作品制作課題。
24	MIDI 編集の課題制作2。 アレンジ、そして豊かなアーティキュレーション表現などの習得を目指した実践レベルの MIDI 作品制作課題。
25	MIDI 編集の課題制作3。 アレンジ、そして豊かなアーティキュレーション表現などの習得を目指した実践レベルの MIDI 作品制作課題。
26	サウンド編集の基礎1。 サウンドソフトの基本的な使用方法、音の加工や変換方法などの基礎を学習。
27	サウンド編集の基礎2。 サウンドソフトの基本的な使用方法、音の加工や変換方法などの基礎を学習。
28	サウンド編集の応用1。 サウンドのより実践的・実用的な編集テクニックを学習。
29	サウンド編集の応用2。 サウンドのより実践的・実用的な編集テクニックを学習。
30	サウンド制作課題。総括。

科目名	情報音楽基礎演習【DA】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	佐藤 一平				
クラス名	【D】				

授業目的と到達目標	
パソコンを使用しての基礎的な音楽編集。	
授業概要	
カットイン、カットアウト、フェードアウト、フェードイン、クロスフェード、テンポチェンジ、キーチェンジ	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
遅刻3回で欠席1回とみなす。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・筆記用具</li> <li>・イヤホン(ヘッドホン)※有線</li> <li>・メモリー</li> </ul>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
総合評価 授業態度・課題提出・筆記テスト	100

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	カットイン
2	カットアウト
3	フェードイン
4	フェードアウト
5	クロスフェード
6	テンポチェンジ
7	キーチェンジ
8	課題曲編集1
9	課題曲編集2
10	課題曲編集3
11	課題曲編集4
12	課題曲編集5
13	課題曲編集5
14	課題曲編集6
15	課題曲編集7
16	課題曲編集8
17	課題曲編集9
18	課題曲編集10
19	課題曲編集応用1
20	課題曲編集応用2
21	課題曲編集応用3
22	課題曲編集応用4
23	課題曲編集応用5
24	課題曲編集応用6
25	課題曲編集応用7
26	課題曲編集応用8

27	課題曲編集応用9
28	課題曲編集応用10
29	筆記テスト
30	課題曲編集応用11

科目名	情報音楽基礎演習【DB】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	佐藤 一平				
クラス名	【D】				

授業目的と到達目標	
パソコンを使用しての基礎的な音楽編集。	
授業概要	
カットイン、カットアウト、フェードアウト、フェードイン、クロスフェード、テンポチェンジ、キーチェンジ	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
遅刻3回で欠席1回とみなす。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・筆記用具</li> <li>・イヤホン(ヘッドホン)※有線</li> <li>・メモリー</li> </ul>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
総合評価 授業態度・課題提出・筆記テスト	100

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	カットイン
2	カットアウト
3	フェードイン
4	フェードアウト
5	クロスフェード
6	テンポチェンジ
7	キーチェンジ
8	課題曲編集1
9	課題曲編集2
10	課題曲編集3
11	課題曲編集4
12	課題曲編集5
13	課題曲編集5
14	課題曲編集6
15	課題曲編集7
16	課題曲編集8
17	課題曲編集9
18	課題曲編集10
19	課題曲編集応用1
20	課題曲編集応用2
21	課題曲編集応用3
22	課題曲編集応用4
23	課題曲編集応用5
24	課題曲編集応用6
25	課題曲編集応用7
26	課題曲編集応用8

27	課題曲編集応用9
28	課題曲編集応用10
29	筆記テスト
30	課題曲編集応用11

科目名	サウンドスケープ研究	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	辻本 香子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>私たちの生活環境には、音楽に限らず多種多様な音があふれている。サウンドスケープ Soundscape はそれらすべての音に着目する考え方で、日本語で「音の風景」と訳される。この授業では、演習の形式を生かし、ディスカッションを重視して音を使った作品や表現、さまざまな文化における音の聴かれ方を学ぶ。それらを総合し、感覚がとらえる事柄をさまざまな形で伝える手段と技法を身につける。</p>	
授業概要	
<p>各自、そこにある音の環境について考察をるところから授業を開始する。それを踏まえて、サウンドスケープという概念が生まれた背景にある音楽や文化のなりたち注目して、19 世紀から 20 世紀の世界において、音のありかたがどのように着目されてきたかを学ぶ。前期は、サウンドスケープを軸にした多様な研究領域の論文から、各自の関心に近いものを選んで発表する。後期はそれを踏まえて、自分自身の音の聴き方を核とした研究発表にまとめることで、受講生自身が専攻する領域に役立てることをめざす。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>演習形式のため、各回、受講生の発表とそれについてのディスカッションが主な内容となる。前期・後期ともに、初回と第二回で発表のスケジュールを決定する。発表が試験の代わりとなるため、レポート等の課題を課すことはない。発表担当の日時に必ず内容を完成させ、出席して発表すること(発表担当日に無断欠席した場合はその時点で不可とする)。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合 (%)
文献講読の発表	35
研究発表	35
通常授業への貢献度(自分の発表担当回以外のほかの受講生へのコメント、授業への参加度などを換算する)	30

教科書			
教科書 1			
出版社名		著者名	
教科書 2			
出版社名		著者名	
教科書 3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献	
参考書名 1	世界の調律—サウンドスケープとはなにか

出版社名	平凡社	著者名	R. マリー・シェーファー
参考書名2	サウンドスケープ—その思想と実践		
出版社名	鹿島出版会	著者名	鳥越けい子
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
受講生同士の発表を聞く場を中心とするので、積極的な参加が求められる。前後期の発表を試験の代わりとする。単位についての質問、相談等は発表前日まで受け付けるので、必ず成績発表より前に相談すること。
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	[イヤークリーニング]身近な音環境を聴きなおす
2	[サウンドスケープ概念のあゆみ]トピックの概観と文献講読発表の説明
3	[サウンドスケープの生まれた背景と歴史](1)20世紀の現代音楽におけるさまざまな試み
4	[サウンドスケープの生まれた背景と歴史](2)サウンドスケープ概念の誕生
5	[サウンドスケープの発展した過程](1)サウンドスケープ概念の発展
6	[サウンドスケープの発展した過程](2)日本での受容
7	[サウンドスケープの発展した過程](3)日本での発展
8	[サウンドスケープ的な活動の現在]事例の調査と検討
9	[サウンドスケープと周辺領域](1)コミュニケーションの手段としての音
10	[サウンドスケープと周辺領域](2)音をめぐるフィールドワークの方法
11	[サウンドスケープと周辺領域](3)音の民族誌
12	[サウンドスケープと周辺領域](4)音・音楽・ことば:聴くことをめぐる多様な文化
13	[産業とサウンドスケープ](1)ものづくりと音
14	[産業とサウンドスケープ](2)騒音問題とサウンドスケープ
15	前期の復習と総合ディスカッション
16	個人研究発表に向けたガイダンス:サウンドスケープについて調査し、まとめる方法について
17	[音響メディア]音響再生産技術の変遷をたどる
18	[音と展示](1)環境音と音楽作品
19	[音と展示](2)サウンド・アート
20	[聴覚と視覚の関係](1)映像における音響

21	[聴覚と視覚の関係](2)音を記録する方法
22	[音の記録と記憶](1)サウンド・マップ作成
23	[音の記録と記憶](2)サウンド・マップ完成
24	[音のフィールドワーク](1)通過儀礼と音
25	[音のフィールドワーク](2)日本の祭り、世界の祭り
26	[サウンド・エデュケーション](1)音楽教育とサウンドスケープ
27	[サウンド・エデュケーション](2)まちおこしとサウンドスケープ
28	[サウンドスケープ、聴覚文化論、サウンドスタディーズ]音と耳をめぐる研究の最前線
29	後期発表のまとめと講評、総合ディスカッション
30	全体のまとめと総復習、今後の各自の活動とサウンドスケープの展望を考える

科目名	フィールドワーク1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	志村 哲				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽、楽器研究の領域におけるフィールドワークの方法を学ぶ。特に録音録画技術、情報処理技術、ITを応用した研究方法を理解する。	
授業概要	
音楽学、楽器学における研究事例を理解するとともに、(1)フィールドワーク、(2)資料の分析とドキュメンテーション、(3)資料の保存と社会的応用の方法を学ぶ。その後、各自が研究対象を設定し、課題を作成する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
本授業は、フィールドワーク資料のドキュメンテーションの方法を身につけることが目的である。そこで、高度かつ困難を伴うフィールドワークの実施は目的とはしていない。もしもフィールドワークを行なう場合は、自己責任のもと、安全には十分に配慮すること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
プレゼンテーションとディスカッション	30
授業に取り組む姿勢	40
最終課題	30

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	『事典 世界音楽の本』徳丸吉彦;高橋悠治;北中正和;渡辺裕(編)		
出版社名	東京:岩波書店	著者名	志村哲ほか、共著
参考書名2	『古管尺八の楽器学』		
出版社名	東京:出版芸術社	著者名	志村哲

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	本科目の参考文献の執筆者であり、長年のフィールドワークを伴う研究方法で博士(学術)の学位を取得した。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	<オリエンテーション> ・授業の進め方の説明と作品の紹介 ・マナーと注意事項の説明
2	<概論編> 楽器の歴史と個々の時代の音楽(古代、中世、近世の楽器について)
3	音楽創作と楽器の歴史的变化(1)虚無僧の音楽
4	音楽創作と楽器の歴史的变化(2)三曲合奏
5	音楽創作と楽器の歴史的变化(3)新日本音楽運動
6	音楽創作と楽器の歴史的变化(4)現代の日本音楽
7	音楽創作と楽器の歴史的变化(5)箏の歴史
8	同時代の音楽創作における楽器の多様性と個別性(1)尺八の場合
9	同時代の音楽創作における楽器の多様性と個別性(2)三味線の場合
10	フィールドワーク、ドキュメンテーション、データベース化の方法(1)
11	フィールドワーク、ドキュメンテーション、データベース化の方法(2)
12	<演習編> テーマ選定と調査方法および、諸問題の検討
13	フィールドワーク実施の心構え、安全への配慮および、著作権、著作隣接権等について
14	夏休みの課題提示
15	夏休みの研究計画書の提出とディスカッション
16	夏休みの成果発表(1)
17	夏休みの成果発表(2)
18	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況の確認と助言)
19	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況の確認と助言)
20	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況の確認と助言)

21	中間発表会(1)
22	中間発表会(2)
23	課題提出と制作レポート作成の方法の説明(目次、参考文献表、図表の作成方法、各種メディアの取り扱い等)
24	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況の確認と助言)
25	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況の確認と助言)
26	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況の確認と助言)
27	作品発表会(1)
28	作品発表会(2)
29	課題提出と確認
30	フィールドワークとドキュメンテーション、情報発信の意義についての今後の展望

科目名	フィールドワーク2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	泉川 秀文				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>フィールドワーク演習の3年次では、いわゆる民族音楽学的な枠組みにとどまらず、社会への積極的な応用も視野に入れ、より広い意味での音楽情報の調査、記録、分析、資料化とプレゼンテーションの方法を身につけることを目的とする。</p> <p>また「フィールドワーク1」や「音楽データベース」等で学んだ「音楽への研究の眼差し」を活かし、受講生自身が今後、社会の中で長くに渡って「フィールドワーク力」を発揮し、活躍するための考え方、方法論や技術を身につけることを目標とする。</p>	
授業概要	
<p>対面授業</p> <p>本科目では「音楽学の社会への応用」がキーワードとなる。</p> <p>ライフワーク、つまり生涯に渡って続けたい取り組み・研究テーマと出会うことは、音楽する者にとってこの上ない喜びであろう。そのために本授業では、既存の枠にとらわれず、伝統芸能から地域文化、最新の音楽トレンドまで、広く現代社会を対象とした音楽フィールドワークの手法を展開してゆくとともに、グローバル化、多様性といった言葉が浸透してゆく今日の世界において、「いかに自分にとって価値がある、やりがいのある音楽研究テーマを発見するか」という観点を、それぞれが探ってゆく。</p> <p>また受講生自身の「自文化にまつわる音楽・楽器・地域芸能」等を対象として、資料を収集分析する視点や能力を養うとともに、これからの時代における音楽研究の意義と可能性を探りながら、音楽とより良い関係を結んでゆくための考え方を、身につけてゆく。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>演習科目は、各週の授業が連続的に関連した内容として学習が進められるので、欠席、遅刻をしないこと。またフィールドワークを行なう場合は、自己責任のもと、安全には十分に配慮すること。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
平常授業への取り組み	40
最終課題	30
プレゼンテーションとディスカッション	30

教科書			
教科書1	配布資料		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	『事典 世界音楽の本』徳丸吉彦;高橋悠治他;北中正和;渡辺裕(編)		
出版社名	岩波書店	著者名	志村哲 他(共著)
参考書名2	『応用音楽学』		
出版社名	放送大学教育振興会	著者名	山口修
参考書名3	『フィールドワークの学び方 ～国際学生との協働からオンライン調査まで』		
出版社名	『フィールドワークの学び方 ～国際学生との協働からオンライン調査まで』	著者名	村田晶子(編著)、箕曲在弘(編著)、佐藤慎司(編著)
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
音楽研究者、作曲家、演奏家であり、社会で幅広く教育業に勤める教員が、多様なフィールドワークにおける経験を活かして、音楽研究とその応用性について指導する。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	<オリエンテーション> ・授業の進め方の説明と研究事例の紹介 ・研究を進める上でのモラルとマナーおよび注意事項について
2	コロキウム～音楽情報への幅広い視野と多視点のために
3	事例研究の解説: 様々な研究事例を教材として採用し、理解を深める。 フィールドワークの応用と展開(1)フィールドワーク力とはなにか
4	地域伝統芸能を対象としたフィールドワーク(1)日本の伝統芸能・祭り
5	民族・民俗音楽を対象としたフィールドワーク(1)アジアの音文化、異文化理解
6	様々な音文化を対象としたフィールドワーク(1)フィールドワーク概念の拡大
7	様々な音文化を対象としたフィールドワーク(2)音環境・サウンドスケープへの視点
8	様々な音文化を対象としたフィールドワーク(3)現代社会・音楽シーンへの視点
9	テーマと調査方法の検討(1)研究テーマの設定
10	テーマと調査方法の検討(2)コロキウムおよび意見交換会
11	フィールドワーク、ドキュメンテーションの方法
12	研究成果のまとめ方、オーサリングの方法
13	研究成果の伝達方法・技術について、プレゼンテーション技術の考察
14	夏季休暇中のフィールドワーク課題提示、研究テーマの選定について

15	前期の総括とまとめ、夏季休暇中の研究テーマの確認
16	夏季休暇課題の成果発表(1)
17	夏季休暇課題の成果発表(2)
18	コロキウムおよび意見交換会～最終課題に向けて
19	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況に応じて期間を調整)
20	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況に応じて期間を調整)
21	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況に応じて期間を調整)
22	中間発表会(1)およびコロキウム
23	中間発表会(2)およびコロキウム
24	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況に応じて期間を調整)
25	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況に応じて期間を調整)
26	各自の課題作成に伴う個別指導(進行状況に応じて期間を調整)
27	研究発表会(1)
28	研究発表会(2)
29	研究発表会(3)
30	全体総括・まとめ、課題提出と研究成果の確認

科目名	音楽資料研究	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	長野 順子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽に関する様々なトピックについて英語の文献資料を読む力を身につける。それを通して、テキストの読解方法、資料の扱い方、議論の整理の仕方を学ぶ。	
授業概要	
対面授業 英語で書かれた音楽関係の研究書または雑誌記事、事典項目等を正確に読解する。 テキストは、受講者の関心を考慮して決定する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
テキストとそれに関連する専門用語や思想背景についての予習・復習が必須である。各自の関心を深めてほしい。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
平常点	60
小テストとレポート	40

教科書			
教科書1	授業中に指示またはプリントを配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	授業中に紹介する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	

参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ガイダンス I
2	テキストの読解(1)
3	テキストの読解(2)
4	テキストの読解(3)
5	テキストの読解(4)
6	テキストの読解(5)
7	テキストの読解(6)
8	テキストの読解(7)
9	テキストの読解(8)
10	テキストの読解(9)
11	テキストの読解(10)
12	テキストの読解(11)
13	テキストの読解(12)
14	テキストの読解(13)
15	前期のまとめと小テスト
16	ガイダンス II
17	テキストの読解(1)
18	テキストの読解(2)
19	テキストの読解(3)
20	テキストの読解(4)
21	テキストの読解(5)
22	テキストの読解(6)
23	各自の研究発表(1)
24	各自の研究発表(2)
25	各自の研究発表(3)
26	各自の研究発表(4)
27	各自の研究発表(5)
28	各自の研究発表(6)

29	各自の研究発表(7)
30	後期のまとめ

科目名	音楽制作演習1	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
クラシック音楽の読譜、記譜の基礎的な力を養い、2年次以降の音響技術や作曲の演習につなげることを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 クラシック音楽の読譜、記譜のための色々な練習から始めます。作曲の演習として、前期は三部形式のピアノ作品、後期はピアノのための変奏曲を作曲します。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃より様々なクラシック音楽の作品に触れ、音色を聞き分けたり、楽譜を見る習慣を付けておいてください。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
総合評価(作品提出、レポート提出、普段の授業態度を考慮し、総合的に評価する)	100

教科書			
教科書1	適宜プリント教材を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
教員が国内外で多くの作品の楽譜出版、オペラ上演等されている作曲家としての経験を生かして指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	読譜の基礎
3	拍子とリズムの関係
4	リズム作曲
5	三和音の種類と判別
6	和音構成音と非和声音、和音進行とメロディ
7	三部形式のメロディ作曲
8	大譜表の書き方、ピアノ譜の写譜 その1
9	大譜表の書き方、ピアノ譜の写譜 その2
10	ピアノ伴奏の付け方
11	三部形式のピアノのための作品、作曲と添削
12	三部形式のピアノのための作品、作曲と添削
13	アーティキュレーションの書き方
14	三部形式の作品の仕上げ
15	作品提出
16	スコアの読み方
17	音源を聴きながらスコアを追う練習 その1
18	音源を聴きながらスコアを追う練習 その2
19	アンサンブル・スコアの写譜
20	変奏曲についての理解
21	与えられたメロディの変奏 その1
22	与えられたメロディの変奏 その2
23	変奏曲の主題作曲、添削
24	変奏曲の作曲、添削
25	変奏曲の作曲、添削

26	変奏曲の作曲、添削
27	変奏曲の作曲、添削
28	変奏曲の作曲、添削
29	変奏曲の仕上げ
30	作品提出

科目名	音楽制作演習2	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
西洋古典音楽(クラシック音楽)作曲の導入として「音楽制作演習1」で器楽作曲を学びました。その続きとして、この「音楽制作演習2」では、まず前期に、オーケストラの楽器を学習し、アンサンブル作品を作曲します。さらに後期には、詩という要素をともなう歌曲を学習します。日本語の情感を大切に、言葉を生かした旋律作りを目指します。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 前期には、オーケストラの楽器を使い、アンサンブル作品を作曲します。 後期は、対位法的作品(バッハ作品)、ソナタ形式(ベートーベン作品)の分析をします。さらに歌曲を作曲し、言葉と音楽の融合を学びます。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
毎回の授業で出される課題を、次の授業で必ず提出すること。アンサンブル作品、歌曲への関心を日頃より高めておくことが望ましい。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
総合評価(作品提出、レポート提出、普段の授業態度を考慮し、総合的に評価する)	100

教科書			
教科書1	適宜プリント教材を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
教員が国内外で多くの作品の楽譜出版、オペラ上演等されている作曲家としての経験を生かして指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入。 オーケストラの楽器について。
2	木管楽器について。
3	木管楽器について。
4	金管楽器について。
5	管楽器ソロ作品の作曲、添削を受ける。
6	管楽器ソロ作品の提出。
7	アンサンブル作品について。 楽器編成、スコアの書き方。
8	管楽器ソロ作品、授業内作品発表演奏会(リハーサル)
9	管楽器ソロ作品、授業内作品発表演奏会
10	アンサンブル作品の作曲、添削を受ける。
11	アンサンブル作品の作曲、添削を受ける。(前回の続き)
12	アンサンブル作品の作曲、添削を受ける。(前回の続き)
13	アンサンブル作品の作曲、添削を受ける。(前回の続き)
14	アンサンブル作品の作曲、添削を受ける。(前回の続き)
15	アンサンブル作品提出。
16	対位法的作品について。 バッハ作曲・インヴェンションの分析。
17	対位法的作品について。 バッハ作曲・インヴェンションの分析(前回の続き)
18	ソナタ形式について。

	ベートーヴェン作曲・ピアノソナタの分析。
19	ソナタ形式について。 ベートーヴェン作曲・ピアノソナタの分析(前回の続き)
20	歌について考える。 メロディーの作曲法について。
21	メロディーの作曲、添削を受ける。
22	メロディーの作曲、添削を受ける。
23	日本歌曲を実際に歌ってみる。「花」「からたちの花」「この道」など。
24	歌詞について。 日本語のアクセントと旋律の関係を見て、いくつかの詩のアクセントを分析する。
25	歌曲の旋律とピアノ伴奏の関係について。
26	アクセントを分析した複数の詩の中から気に入ったものを選び、 旋律を作り、添削を受ける。
27	旋律にピアノ伴奏を付け、添削を受ける。
28	旋律にピアノ伴奏を付け、添削を受ける。(前回の続き)
29	旋律にピアノ伴奏を付け、添削を受ける。(前回の続き)
30	歌曲作品提出。

科目名	音楽制作演習3	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
「音楽制作演習1、2」に引き続き「3では」、ポリフォニー(複数の声部により構成される音楽形態)的視点から、対位法の技術を伸ばしつつ、さらなる作曲技術を習得する。フーガも学習する。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 対位法: 個人の学習状況に応じて、2声～3声～4声の課題を実施する。 フーガ: 主題を対位法的、調的規則に則って展開させながら楽曲を構成する技法を学ぶ。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃よりポリフォニー的手法による作曲形態の作品(例えば、バッハの2声・3声のインベンション、平均律クラヴィア曲集のフーガなど)に親しみ、関心を高めておく事が望ましい。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
総合評価(普段の学習への取り組みの態度、レポート提出、作品提出)	100

教科書			
教科書1	適宜プリント教材を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			

出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員が国内外で多くの作品の楽譜出版、オペラ上演等されている作曲家としての経験を生かして指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
2	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
3	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
4	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
5	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
6	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
7	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
8	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
9	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
10	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
11	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
12	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
13	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
14	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
15	対位法(2声～3声～4声)の課題を実施し、添削を受ける。
16	フーガの主唱
17	フーガの答唱、及び、変応
18	フーガの答唱、及び、変応
19	フーガの対唱
20	フーガの対唱
21	フーガの対唱
22	フーガの第1提示部
23	フーガの第1提示部

24	フーガの第1提示部
25	フーガの第1提示部
26	フーガの第1嬉遊部以降について
27	フーガの第1嬉遊部以降について
28	フーガの第1嬉遊部以降について
29	フーガの第1嬉遊部以降について
30	フーガの第1嬉遊部以降について

科目名	音楽制作演習3	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	五木田 岳彦				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>小編成のアコースティック楽器のための作品の作曲からオーケストラや合唱曲などの作曲を学ぶ。また DAW やオーケストレーションも紹介し、クラシカルなオーケストラ作品からスタジオオーケストラを使ったアニメや映画など、映像のための音楽(フィルムスコアリング)の制作方法など、今の時代に求められる実践的な作曲術を学ぶ。</p> <p>個々の生徒の習熟度や興味に合わせて、作曲の知識と感性を高める。また、古典的な記譜法以外の楽譜を用いた作曲や、微分音階調性音楽、チャンスミュージックなど、実験的な作品の作曲など、幅広い作曲技法を研究する</p>	
授業概要	
<p>対面授業(状況により リモート授業)</p> <p>生徒の習熟度に合わせて、実践的なオリジナル作品の作曲術を個別に指導する。</p> <p>調性音楽、無調性音楽、即興音楽、微分音階調性音楽制作、ミュージック・コンクレートなど、古典から現代までの様々な作曲手法を理解し、実際にアコースティック楽器や DAW を使った作品を作曲してみる。</p> <p>作品制作やフィルム・スコアリング、サウンド・トラックなど、映像のための作曲術を学び作品を制作する。</p> <p>最新のデジタル機材や DAW を使ったレコーディング術を紹介し、作曲から音源制作、映像とのシンクロ(同期)までをトータルに学んでいく。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業への積極的な参加と理解、作品制作	100

教科書			
教科書1	教科書は使用しない		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献	
参考書名1	必要に応じて紹介する

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
<p>ハーバード大学大学院作曲科を特待奨学生として修了、博士号取得。他にニューイングランド音楽院作曲学科修士取得、パークリー音楽大学ジャズ作曲科中退、ニューヨーク大学(フィルム・スコアリング、映画音楽制作コース履修)。ハーバード大学最優秀講師賞、スプラグュー作曲賞、イタリア賞など受賞。長期にわたりボストン、ニューヨークを拠点に作曲家として多くの実績を持ち、国内外のメジャーオーケストラの委嘱作品から「NHK スペシャル」「NHK クローズアップ現代」などの報道番組、アニメ音楽など、幅広く作曲。作品が世界 200 カ国の国</p>

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	音楽制作演習 概要
2	作曲の演習 1
3	作曲の演習 2
4	作曲の演習 3
5	作曲の演習 4
6	作曲の演習 5
7	作曲の演習 6
8	作曲の演習 7
9	作曲の演習 8
10	作曲の演習 9
11	作曲の演習 10
12	作曲の演習 11
13	作曲の演習 12
14	作曲の演習 13
15	前期のまとめ
16	作曲の演習 14
17	作曲の演習 15

18	作曲の演習 16
19	作曲の演習 17
20	作曲の演習 18
21	作曲の演習 19
22	作曲の演習 20
23	作曲の演習 21
24	作曲の演習 22
25	作曲の演習 23
26	作曲の演習 24
27	作曲の演習 25
28	作曲の演習 26
29	後期のまとめ
30	プレゼンテーション

科目名	コード理論1【演奏 PM コース対象】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	山口 聖代				
クラス名					

授業目的と到達目標	
ポピュラー音楽に於いて、演奏、作曲、編曲などに必要な、基本的音楽理論の履修。コード・プログレッションを中心に学習。エクササイズを取り入れながら、実践に応用できる事を目指す。	
授業概要	
<p>対面授業とする。</p> <p>音程、スケール、調号などの基本の確認。実際の楽曲のコード進行の分析。</p> <p>実用的なコード進行を用いた簡単な作曲、代理コードを使用した編曲法の取得。</p> <p>授業はクラシックからポップスまで幅広いジャンルの作編曲やピアノ演奏を行なう教員が指導する。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
五線紙を持参。対面授業とする。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業に取り組む姿勢	50
学期末試験	50

教科書			
教科書1	現代のポピュラーミュージックセオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	中村正史
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			

出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認
2	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認
3	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認
4	全キーのトライアドコード、7thコード、テトラドコード
5	全キーのトライアドコード、7thコード、テトラドコード
6	ダイアトニック・スケール&コード
7	コード・ファンクション、サブドミナント・マイナー
8	ドミナント・モーション、ケーデンス
9	Ⅱ-V-Iのコード進行を用いた楽曲分析
10	Ⅱ-V-Iのコード進行を用いた楽曲分析
11	全キーのテンションコード(9th)
12	全キーのテンションコード(11th)
13	全キーのテンションコード(13th)
14	セカンダリー・ドミナント
15	前期のまとめ、コードによる楽曲分析
16	前期で学んだ内容の復習、確認
17	前期で学んだ内容の復習、確認
18	Roopを用いた楽曲のコード分析
19	Roopを用いた楽曲のコード分析
20	Roopを用いた楽曲のコード分析
21	循環コード使用の楽曲分析(Pops)
22	循環コード使用の楽曲分析(スタンダードジャズ)
23	循環コードの Variation
24	裏代理コードの理解
25	裏代理コードの理解
26	童謡など簡単なコード進行の楽曲のリハモナイズ
27	童謡など簡単なコード進行の楽曲のリハモナイズ

28	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)
29	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)
30	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)

科目名	コード理論1【演奏 PM コース対象】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	山口 聖代				
クラス名					

授業目的と到達目標	
ポピュラー音楽に於いて、演奏、作曲、編曲などに必要な、基本的音楽理論の履修。コード・プログレッションを中心に学習。エクササイズを取り入れながら、実践に応用できる事を目指す。	
授業概要	
<p>対面授業とする。</p> <p>音程、スケール、調号などの基本の確認。実際の楽曲のコード進行の分析。</p> <p>実用的なコード進行を用いた簡単な作曲、代理コードを使用した編曲法の取得。</p> <p>授業はクラシックからポップスまで幅広いジャンルの作編曲やピアノ演奏を行なう教員が指導する。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
五線紙を持参。対面授業とする。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業に取り組む姿勢	50
学期末試験	50

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	現代のポピュラーミュージックセオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	中村正史
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			

出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認
2	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認
3	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認
4	全キーのトライアドコード、7thコード、テトラドコード
5	全キーのトライアドコード、7thコード、テトラドコード
6	ダイアトニック・スケール&コード
7	コード・ファンクション、サブドミナント・マイナー
8	ドミナント・モーション、ケーデンス
9	Ⅱ-V-I のコード進行を用いた楽曲分析
10	Ⅱ-V-I のコード進行を用いた楽曲分析
11	全キーのテンションコード(9th)
12	全キーのテンションコード(11th)
13	全キーのテンションコード(13th)
14	セカンダリー・ドミナント
15	前期のまとめ、コードによる楽曲分析
16	前期で学んだ内容の復習、確認
17	前期で学んだ内容の復習、確認
18	Roop を用いた楽曲のコード分析
19	Roop を用いた楽曲のコード分析
20	Roop を用いた楽曲のコード分析
21	循環コード使用の楽曲分析(Pops)
22	循環コード使用の楽曲分析(スタンダードジャズ)
23	循環コードの Variation
24	裏代理コードの理解
25	裏代理コードの理解
26	童謡など簡単なコード進行の楽曲のリハモナイズ
27	童謡など簡単なコード進行の楽曲のリハモナイズ

28	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)
29	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)
30	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)

科目名	コード理論1【演奏 PM コース対象】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	小林 淑子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>ポピュラー音楽に於いて、演奏、作曲、編曲などに必要な、基本的音楽理論の履修。</p> <p>コード・プログレッションを中心に学習。</p> <p>Exercise を取り入れながら、実践に応用できる事を目指す。</p>	
授業概要	
<p>【対面授業】</p> <p>音程、スケール、調号などの基本の確認。</p> <p>14 種の Tetrad Chord. Tension Note. Diatonic Chord.</p> <p>II m7_ V7。循環・逆循環コード進行。Substituted Chord。</p> <p>Avoid Note。音楽用語・記号。教員が作編曲家としての経験をいかし作曲 編曲 演奏する上での基本的な知識を習得させる。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
各自、Text、空五線譜、筆記用具持参の事。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業内小テスト・学期末テスト	60
平常点	40

教科書			
教科書1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	中村正史
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	授業内で紹介		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験
《実務経験》プレイヤー、作・編曲家として活動。「株式会社 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス」よりアレンジ作品、曲集が多数出版されている。また、ヤマハ音楽院に於いて永年に渡り指導し、数多くの音楽指導者、音楽家を輩出。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	年間カリキュラムガイダンス① 実力テスト。
2	年間カリキュラムガイダンス② Over-Tone。 Low-Interval-Limited。 Maj-Scale。 Min-Scale 3種 その他ポピュラー音楽でよく使用されるScaleの紹介。
3	ポピュラー音楽: ジャンル、スタイル、アーティスト、等の紹介。 Triad Chord: maj-Triad, min-Triad
4	4Tetrad : Maj7th, Dominant7th, min-Maj7th, min7th
5	Tetrad : Exercise。 5th変化typeのchord ①: diminished7th, Augumented (Aug-Maj7th, Aug-7th)
6	5th変化typeのchord ②: Halh-diminished7th, Dominant7th, Flatted 5th, 掛留 : Dominant7th suspended 4th 付加 : 付加6、付加9(add 9th)
7	Tetrad 全14種 Exercise (筆記&聴音)
8	転回形の説明。 ポピュラー音楽で使用する音楽用語・記号①
9	ポピュラー音楽で使用する音楽用語・記号②
10	Diatonic Chord Chord Function(Tonic, Dominant, sub-dominant, sub-dominant minor)
11	Dominant Motion & Tri-Tone Leading-Note 5th-Down Motion
12	V7 ≡ b II7 (裏Chord) II m7-V7 (Two-Five) Deceptive-Cadence

13	Chord Progress Analyze
14	Secondary Dominant (副属七、借用属七)
15	前期学習項目総括及び、授業内小テスト
16	循環・逆循環 Chord進行
17	色々な終止形 Cliche/Double Cliche
18	Tension Note (Natural, Altered)
19	Chord Typeと Tension Note
20	Tension Note 総合Exercise
21	Substituted Chord①
22	Substituted Chord②
23	Substituted Chord③
24	Reharmonize 実例
25	Chord Tone Non Chord Tone Avoid Note
26	後期 総合Exercise 及び、解説
27	ポピュラー音楽史 (アメリカのポピュラー・ミュージック)概論基礎
28	学年末授業内小テスト 模擬試験 及び、解説。
29	学年末学習項目総括。及び、学年末授業内小テスト 試験
30	授業内小テスト 試験 解答と解説

科目名	コード理論1【演奏 PM コース対象】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	木村 知之				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>ポピュラー音楽に於いて、演奏、作曲、編曲などに必要な、基本的音楽理論の履修。コード・プログレッションを中心に学習。Exercise を取り入れながら、実践に応用できる事を目指す。</p>	
授業概要	
<p>対面授業 音程、スケール、調号などの基本の確認。 14 種の Tetrad Chord. Tension Note. Diatonic Chord。 II m7_V7。循環・逆循環コード進行。Substituted Chord。 Avoid Note。音楽用語・記号。など</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
各自、Text、空五線譜、筆記用具持参の事。	

成績評価方法・基準	
種別	割合 (%)
平常点	30
授業内小テスト。学年末小テスト	70

教科書			
教科書1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			

出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	カテスト。年間カリキュラム概要説明。
2	Over-Tone。 Low-Interval-Limited。 Maj-Scale。 Min-Scale 3種 その他ポピュラー音楽でよく使用されるScaleの紹介。
3	ポピュラー音楽： ジャンル、スタイル、アーティスト、等の紹介。 Triad Chord: maj-Triad, min-Triad
4	Tetrad : Maj7th, Dominant7th, min-Maj7th, min7th
5	Tetrad : Exercise。 5th変化typeのchord ①:diminished7th, Augumented (Aug-Maj7th, Aug-7th)
6	th変化typeのchord ②:Half-diminished7th, Dominant7th, Flatted 5th, 掛留 :Dominant7th suspended 4th 付加 :付加6、付加9(add 9th)
7	Tetrad 全14種 Exercise (筆記&聴音)
8	転回形の説明。 ポピュラー音楽で使用する音楽用語・記号①
9	ポピュラー音楽で使用する音楽用語・記号②
10	Diatonic Chord Chord Function(Tonic, Dominant, sub-dominant, sub-dominant minor)
11	Dominant Motion&Tri-Tone Leading-Note 5th-Down Motion
12	V7≡b II7 (裏Chord) II m7-V7 (Two-Five) Deceptive-Cadence
13	Chord Progress Analyze
14	Secondary Dominant (副属七、借用属七)

15	前期学習項目総括及び、授業内小テスト
16	循環・逆循環 Chord進行
17	色々な終止形 Cliche/Double Cliche
18	Tension Note (Natural, Altered)
19	hord Typeと Tension Note
20	Tension Note 総合Exercise
21	Substituted Chord①
22	Substituted Chord②
23	Substituted Chord③
24	Reharmonize 実例
25	Chord Tone Non Chord Tone Avoid Note
26	後期 総合Exercise 及び、解説
27	ポピュラー音楽史 (アメリカのポピュラー・ミュージック)概論基礎
28	学年末授業内小テスト 模擬試験 及び、解説
29	学年末学習項目総括。及び、学年末授業内小テスト 試験
30	授業内小テスト 試験 解答と解説

科目名	コード理論1【音楽ADコース対象】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	松尾 泰伸				
クラス名	【AD クラス】				

授業目的と到達目標	
和音のコード化を知ることで、音楽情報伝達手段の多様性を習得する。 現代のあらゆる音楽形態への、柔軟かつ的確・スピーディーな適応・対応が図れるようになる為に。 コード表記の利便性への理解を深める。	
授業概要	
<p>対面授業</p> <p>音程の復習。</p> <p>コードネームの必要性和利便性について。</p> <p>現場レベルで通用する、全てのコードネームの仕組み。</p> <p>クラシック音楽等、既成曲へのコード表記。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>音楽理論(楽典・通論等)の、スケール・調号・音程・和音までの復習。</p> <p>講義は30回全部が関連付けられて進んでいくので、毎回の授業内容をよく理解把握して進めていくこと。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
1年を通して授業中に実施される、演習課題の成績評価	70
授業に取り組む姿勢	30

教科書			
教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	
実務経験:	作曲家・ピアニストとして多くの作曲・編曲・演奏経験を持つ担当教員が、コードによる有益な使用法を習得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	【対面】 音程 復習 コード理論概要(必要性・利便性 etc.)
2	【対面】 コードの仕組み 音程 単音程 復習
3	【対面】 コードの仕組み2 コードの表記 音程 複音程 復習 長音階上の3和音
4	【対面】 コードの仕組み3 コードの表記の仕組み 音程まとめ 演習
5	【対面】 コード 3和音(トライアド) メジャーダイアトニック メジャーコードとマイナーコードの関係
6	【対面】 コード 3和音(トライアド) # b の付いたコード
7	【対面】 コード 3和音(トライアド)まとめ 演習
8	【対面】 コード 4和音(7th)
9	【対面】 7th の和音 M7 m7 7
10	【対面】 7th の和音 M7 m7 7 # b の付いたコード
11	【対面】 7th の和音 まとめ 演習

12	【対面】 7th の和音のヴァリエーション (b5)(#5) mM7
13	【対面】 特殊なコード aug aug7 dim dim7
14	【対面】 特殊なコード sus4 7sus4
15	【対面】 特殊なコード add2 add9 6 69 omit
16	【対面】 テンションコードの仕組み
17	【対面】 テンションコード 9th
18	【対面】 テンションコード 9th 演習
19	【対面】 テンションコード 11th 演習
20	【対面】 テンションコード 13th 演習
21	【対面】 3和音(トライアド) 4和音(7th) 特殊なコード テンションコード まとめ
22	【対面】 3和音(トライアド) 4和音(7th) 特殊なコード テンションコード まとめ 演習
23	【対面】 3和音(トライアド) 4和音(7th) 特殊なコード テンションコード まとめ 演習
24	【対面】 オンコード 分数コード(転回形) ベース音が、Root(根音)以外の構成音のいずれかの場合
25	【対面】 オンコード 分数コード(転回形) 演習
26	【対面】 オンコード 分数コード(テンション系) ベース音が、上にのる和音の構成音以外の場合
27	【対面】 オンコード 分数コード(テンション系) 演習
28	【対面】 既成曲のコードネーム化
29	【対面】 既成曲へのコードネーム付け
30	【対面】 既成曲へのコードネーム付け

科目名	基礎作曲法	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	○橋 由美子、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
基礎和声法 1・2 に続く授業で、中級(上級)和声法の知識、技法を学びます。更に、これまでの和声の知識を応用しながら作曲を経験してみると、音楽への理解を一層深めることを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 基礎和声法 1・2 に続く段階の学習(非和声音、借用和音、転調を含む課題の演習・添削)を指導します。作曲課題としては、前期は、ソロ楽器(フルート、もしくは、ヴァイオリン)とピアノによるアンサンブル作品、後期は、アカペラの合唱曲を添削指導を受けながら作曲します。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
作曲は時間のかかる作業ですから、少しずつ書き進めて毎回の添削に臨んでください。日頃より、色々な楽曲について、和音や楽器の使い方に目を向けながら親しんでおいてください。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
教室内添削	20
提出作曲作品(前期)	20
小試験(前期)	20
提出作曲作品(後期)	20
小試験(後期)	20

教科書			
教科書 1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	島岡譲
教科書 2			
出版社名		著者名	
教科書 3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名 1			
出版社名		著者名	
参考書名 2			

出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員が作曲家としての経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入。基礎和声法 1・2 までの復習。
2	和声法演習: 非和声音について。
3	和声法演習: 非和声音について(続き)。
4	作曲演習: ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。
5	作曲演習: ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。(続き) ソロ楽器の特性について。
6	和声法演習: ドッペルドミナントについて。
7	和声法演習: ドッペルドミナントについて。(続き)
8	和声法演習: 副属七を含む課題。
9	和声法演習: 副属七を含む課題。(続き)
10	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
11	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
12	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
13	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
14	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
15	前期まとめ、小試験。
16	和声法演習: 前期までの復習。
17	和声法演習: 転調について。
18	和声法演習: 転調について。(続き)
19	作曲演習: 合唱曲について。誌プリント配布。
20	作曲演習: 誌とメロディーの関係について。
21	作曲演習: 混声 4 部合唱曲の書き方について。
22	和声法演習: 転調を含む課題の添削。

23	和声法演習: 転調を含む課題の添削。(続き)
24	和声法演習: 総合復習。
25	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
26	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
27	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
28	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
29	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
30	後期まとめ、小試験。

科目名	基礎作曲法	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	○河合 摂子、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
基礎和声法 1・2 に続く授業で、中級(上級)和声法の知識、技法を学びます。更に、これまでの和声の知識を応用しながら作曲を経験してみると、音楽への理解を一層深めることを目的とします。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 基礎和声法 1・2 に続く段階の学習(非和声音、借用和音、転調を含む課題の演習・添削)を指導します。作曲課題としては、前期は、ソロ楽器(フルート、もしくは、ヴァイオリン)とピアノによるアンサンブル作品、後期は、アカペラの合唱曲を添削指導を受けながら作曲します。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
作曲は時間のかかる作業ですから、少しずつ書き進めて毎回の添削に臨んでください。日頃より、色々な楽曲について、和音や楽器の使い方に目を向けながら親しんでおいてください。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
教室内添削	20
提出作曲作品(前期)	20
小試験(前期)	20
提出作曲作品(後期)	20
小試験(後期)	20

教科書			
教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	島岡譲
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			

出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員が作曲家としての経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入。基礎和声法 1・2 までの復習。
2	和声法演習: 非和声音について。
3	和声法演習: 非和声音について(続き)。
4	作曲演習: ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。
5	作曲演習: ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。(続き) ソロ楽器の特性について。
6	和声法演習: ドッペルドミナントについて。
7	和声法演習: ドッペルドミナントについて。(続き)
8	和声法演習: 副属七を含む課題。
9	和声法演習: 副属七を含む課題。(続き)
10	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
11	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
12	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
13	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
14	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
15	前期まとめ、小試験。
16	和声法演習: 前期までの復習。
17	和声法演習: 転調について。
18	和声法演習: 転調について。(続き)
19	作曲演習: 合唱曲について。誌プリント配布。
20	作曲演習: 誌とメロディーの関係について。
21	作曲演習: 混声 4 部合唱曲の書き方について。
22	和声法演習: 転調を含む課題の添削。

23	和声法演習: 転調を含む課題の添削。(続き)
24	和声法演習: 総合復習。
25	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
26	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
27	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
28	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
29	作曲演習: 合唱曲の添削指導。
30	後期まとめ、小試験。

科目名	基礎作曲法	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	○下石坂 徹、田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
<p>基礎和声法 1・2 に続く授業で、中級(上級)和声法の知識、技法を学びます。</p> <p>更に、これまでの和声の知識を応用しながら作曲を経験してみることで、音楽への理解を一層深めることを目的とします。</p>	
授業概要	
<p>授業は「対面授業」で行います。</p> <p>基礎和声法 1・2 に続く段階の学習(非和声音、借用和音、転調を含む課題の演習・添削)を指導します。作曲課題としては、前期は、ソロ楽器(フルート、もしくは、ヴァイオリン)とピアノによるアンサンブル作品、後期は、アカペラの合唱曲を添削指導を受けながら作曲します。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>作曲は時間のかかる作業ですから、少しずつ書き進めて毎回の添削に臨んでください。日頃より、色々な楽曲について、和音や楽器の使い方に目を向けながら親しんでおいてください。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
提出作曲作品(前期)	20
教室内添削	20
小試験(前期)	20
小試験(後期)	20
提出作曲作品(後期)	20

教科書			
教科書1	和声 理論と実習 II		
出版社名	音楽之友社	著者名	島岡譲
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	

参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	教員が作曲家としての経験を生かし指導します。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入。基礎和声法 1・2 までの復習。
2	和声法演習: 非和声音について。
3	和声法演習: 非和声音について(続き)。
4	作曲演習: ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。
5	作曲演習: ソロ楽器とピアノのアンサンブルについて。(続き) ソロ楽器の特性について。
6	和声法演習: ドッペルドミナントについて。
7	和声法演習: ドッペルドミナントについて。(続き)
8	和声法演習: 副属七を含む課題。
9	和声法演習: 副属七を含む課題。(続き)
10	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
11	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
12	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
13	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
14	作曲演習: ソロ楽器とピアノのためのアンサンブル作品の添削指導。
15	前期まとめ、小試験。
16	和声法演習: 前期までの復習。
17	和声法演習: 転調について。
18	和声法演習: 転調について。(続き)
19	作曲演習: 合唱曲について。誌プリント配布。
20	作曲演習: 誌とメロディーの関係について。
21	作曲演習: 混声 4 部合唱曲の書き方について。
22	和声法演習: 転調を含む課題の添削。
23	和声法演習: 転調を含む課題の添削。(続き)

24	和声法演習:総合復習。
25	作曲演習:合唱曲の添削指導。
26	作曲演習:合唱曲の添削指導。
27	作曲演習:合唱曲の添削指導。
28	作曲演習:合唱曲の添削指導。
29	作曲演習:合唱曲の添削指導。
30	後期まとめ、小試験。

科目名	ポピュラー作・編曲法1【演奏 PM コース 対象】	年次	カリキュラムに より異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	中村 正史				
クラス名					

授業目的と到達目標	
ポピュラー作・編曲法 初級クラス。 ヴォーカル+4リズム・アレンジ	
授業概要	
4リズム・スタイルの理解。 Vocal,Drums,Guitar,Bass,Keyboard(Piano)の楽器法及び記譜法の理解。 。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
各自、空五線譜、筆記用具持参の事。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
平常点	30
レポート提出課題の評価。	70

教科書			
教科書1	特になし。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	中村正史
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			

出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	教員が作・編曲家としての経験を活かし、ポピュラー音楽の作・編曲法を習得させる。
教員実務経験	

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	年間カリキュラム概要説明。 基礎的な音楽理論の復習
2	実力テスト／解答と解説
3	コード理論1の復習
4	コード理論1の復習
5	Vo+4Rhythm①
6	Vo+4Rhythm②
7	Vo+4Rhythm③
8	Vo+4Rhythm④
9	Vo+4Rhythm⑤
10	Vo+4Rhythm⑥
11	ベース・ライン
12	2声のハーモナイズ①
13	2声のハーモナイズ②
14	Transposeと移調楽器 Trumpet,Sax,etc.
15	前期学習項目総括。及び、総合Exercise
16	前期復習
17	ラテンパーカッション①
18	ラテンパーカッション②
19	ラテンパーカッション③
20	様々な音楽ジャンル①
21	様々な音楽ジャンル②
22	様々な音楽ジャンル③
23	reharmonize①
24	reharmonize②
25	reharmonize③

26	学年末提出課題の説明（課題発表） 実例紹介。
27	Analyze ①／楽曲分析 Jazz Standards
28	Analyze ②／楽曲分析 J-Pop
29	Analyze ③／楽曲分析 J-Pop
30	提出課題の添削。 作・編曲法①まとめ提出課題の添削。

科目名	ポピュラー作・編曲法1【演奏 PM コース 対象】	年次	カリキュラムに より異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	小林 淑子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
ポピュラー音楽の 作・編曲に於いて必要となる基礎的な知識、メロディーライティング、ハーモナイズを学習。 ポピュラー音楽の様々なジャンルを学び、4Rhythm の編曲を習得する。	
授業概要	
【対面授業】 メロディーの作り方、発展の手法、またハーモナイズを学ぶ。 様々なコード進行に於いて、メロディーライン、ベースライン、コンピングなどを学ぶ。 カウンターライン、ハモリの書き方。 リハーモナイズ 様々な楽曲を分析 4Rhythm Arrange	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
空の五線紙、筆記具を持参	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業に取り組む姿勢	30
課題・授業内テスト	70

教科書			
教科書1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	中村正史
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			

出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	《実務経験》プレイヤー、作・編曲家として活動。「株式会社 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス」よりアレンジ作品、曲集が多数出版されている。また、ヤマハ音楽院に於いて永年に渡り指導し、数多くの音楽指導者、音楽家を輩出。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	年間カリキュラムガイダンス① 基礎的な音楽理論①
2	年間カリキュラムガイダンス② 基礎的な音楽理論②
3	基本的なコード進行とメロディーライン①
4	基本的なコード進行とメロディーライン②
5	メロディーへのハーモナイズ(Basic)①
6	メロディーへのハーモナイズ(Basic)②
7	コードパターンにメロディーを作成①
8	コードパターンにメロディーを作成②
9	既成曲のアナリゼにより、メロディー、ハーモニー等を考察する①
10	既成曲のアナリゼにより、メロディー、ハーモニー等を考察する②
11	Bass Line と Counter Melody
12	ポピュラー楽曲に於ける 1Chorus の構成について。 メロディー、ハーモニーの特色。
13	1Chorus のメロディー、ハーモニーを作成、記譜。発表 ①
14	1Chorus のメロディー、ハーモニーを作成、記譜。発表 ②
15	前期のまとめと復習テスト
16	4Rhythm について、楽器と記譜①
17	4Rhythm について、楽器と記譜②
18	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色①
19	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色②

20	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色③
21	Reharmonize 実習①
22	Reharmonize 実習②
23	イントロ&エンディング①
24	イントロ&エンディング②
25	アレンジのスケッチと組み立てについて
26	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ①
27	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ②
28	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ(実習)③
29	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ(実習)④
30	1年のまとめとテスト

科目名	ポピュラー作・編曲法1【演奏 PM コース 対象】	年次	カリキュラムに より異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 通年	形態	演習		
教員名	小林 淑子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
ポピュラー音楽の 作・編曲に於いて必要となる基礎的な知識、メロディーライティング、ハーモナイズを学習。 ポピュラー音楽の様々なジャンルを学び、4Rhythm の編曲を習得する。	
授業概要	
【対面授業】 メロディーの作り方、発展の手法、またハーモナイズを学ぶ。 様々なコード進行に於いて、メロディーライン、ベースライン、コンピングなどを学ぶ。 カウンターライン、ハモリの書き方。 リハーモナイズ 様々な楽曲を分析 4Rhythm Arrange	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
空の五線紙、筆記具を持参	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業に取り組む姿勢	30
課題・授業内テスト	70

教科書			
教科書1	現代のポピュラー・ミュージック・セオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	中村正史
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			

出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	《実務経験》プレイヤー、作・編曲家として活動。「株式会社 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス」よりアレンジ作品、曲集が多数出版されている。また、ヤマハ音楽院に於いて永年に渡り指導し、数多くの音楽指導者、音楽家を輩出。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	年間カリキュラムガイダンス① 基礎的な音楽理論①
2	年間カリキュラムガイダンス② 基礎的な音楽理論②
3	基本的なコード進行とメロディーライン①
4	基本的なコード進行とメロディーライン②
5	メロディーへのハーモナイズ(Basic)①
6	メロディーへのハーモナイズ(Basic)②
7	コードパターンにメロディーを作成①
8	コードパターンにメロディーを作成②
9	既成曲のアナリゼにより、メロディー、ハーモニー等を考察する①
10	既成曲のアナリゼにより、メロディー、ハーモニー等を考察する②
11	Bass Line と Counter Melody
12	ポピュラー楽曲に於ける 1Chorus の構成について。 メロディー、ハーモニーの特色。
13	1Chorus のメロディー、ハーモニーを作成、記譜。発表 ①
14	1Chorus のメロディー、ハーモニーを作成、記譜。発表 ②
15	前期のまとめと復習テスト
16	4Rhythm について、楽器と記譜①
17	4Rhythm について、楽器と記譜②
18	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色①
19	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色②

20	ポピュラー音楽のジャンル、リズムスタイル、特色③
21	Reharmonize 実習①
22	Reharmonize 実習②
23	イントロ&エンディング①
24	イントロ&エンディング②
25	アレンジのスケッチと組み立てについて
26	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ①
27	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ②
28	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ (実習)③
29	リズムセクション・4Rhythm のアレンジ (実習)④
30	1年のまとめとテスト

科目名	ポピュラー作・編曲法1【音楽ADコース対象】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 通年	形態	演習		
教員名	小野田 享子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
ポピュラー音楽に於いて、演奏、作曲、編曲などに必要な、基本的音楽理論の履修。コード・プログレッションを中心に学習。エクササイズを取り入れながら、実践に応用できる事を目指す。	
授業概要	
<p>対面授業とする。</p> <p>音程、スケール、調号などの基本の確認。</p> <p>実際の楽曲のコード進行の分析。</p> <p>実用的なコード進行を用いた簡単な作曲、代理コードを使用した編曲法の取得。</p> <p>教員はバンドスタイルから、フルオーケストラの作編曲を行なっているプロのアレンジャーが指導する。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>五線紙を持参</p> <p>対面授業とする。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業に取り組む姿勢	50
学期末試験	50

教科書			
教科書1	現代のポピュラーミュージックセオリー		
出版社名	サーベル社	著者名	中村正史
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献	
参考書名1	

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
教員実務経験

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認
2	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認
3	コードネーム、音程、スケール、音楽用語、記号など基礎の確認
4	全キーのトライアドコード、7thコード、テトラドコード
5	全キーのトライアドコード、7thコード、テトラドコード
6	全キーのテンションコード(9th,11th,13th)
7	テンションコード(9th,11th,13th)を使用した楽曲の分析
8	♭5、#5のコード ♭9th、#9thのコード
9	Ⅱ-V-1のコード進行を用いた楽曲分析
10	Ⅱ-V-1のコード進行を用いた楽曲分析
11	コード理論に沿った調号判別の仕方
12	基礎的なブルース進行
13	基礎的なブルース進行
14	代理コードを用いたブルース進行(JAZZブルース)
15	代理コードを用いたブルース進行(JAZZブルース)
16	前期で学んだ内容の復習、確認
17	前期で学んだ内容の復習、確認
18	Roopを用いた楽曲のコード分析
19	Roopを用いた楽曲のコード分析
20	Roopを用いた楽曲のコード分析

21	循環コード使用の楽曲分析 (Pops)
22	循環コード使用の楽曲分析 (スタンダードジャズ)
23	循環コードの Variation
24	裏代理コードの理解
25	裏代理コードの理解
26	童謡など簡単なコード進行の楽曲のリハモナイズ
27	童謡など簡単なコード進行の楽曲のリハモナイズ
28	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)
29	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)
30	今までの内容を踏まえた楽曲制作 (A メロ、B メロ、サビのコード進行制作)

科目名	日本音楽の歴史と理論	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	4
授業期間	2023年度 通年	形態	講義		
教員名	出口 実紀				
クラス名					

授業目的と到達目標	
日本音楽について、まずは「知る」ことから始める。授業を通じて日本音楽の各種目についての基礎知識を学ぶとともに、歴史や文化的背景も含めて音楽の特徴を理解する。	
授業概要	
日本音楽の中の主要な種目(雅楽、声明、琵琶楽、能、文楽、歌舞伎、地歌、箏曲、尺八など)をとりあげ、配布資料や視聴覚教材を使用して授業をおこなう。必要に応じて実際に楽器を使用し、音色や構造についても講義する。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
学習期間中、日本音楽や和楽器に興味、関心を持ち、機会があれば実際に鑑賞するのが望ましい。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
平常点(授業態度や取り組み姿勢)	30
授業内小レポート	30
学期末試験またはレポート	40

教科書			
教科書1	授業内でプリントを配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	『日本音楽との出会い 日本音楽の歴史と理論』		
出版社名	東京堂出版	著者名	月溪恒子
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	
------	--	-----	--

参考 URL
特記事項
出席が全体の3分の2に満たない場合は不可とします。 また授業では視聴覚教材を使用するため、授業中の私語は厳禁。騒がしい場合には退出してもらいます。
教員実務経験
担当教員は、日本音楽の研究および演奏活動や各地の教育委員会における民俗芸能調査を務めており、これらの実務経験を 生かして授業をおこなう。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ガイダンス
2	日本音楽の概論
3	日本音楽の時代区分と種目
4	雅楽
5	雅楽
6	雅楽
7	声明
8	声明
9	琵琶楽
10	琵琶楽
11	能・狂言
12	能・狂言
13	歌舞伎
14	歌舞伎
15	前期授業のまとめ 試験またはレポート
16	人形浄瑠璃(文楽)
17	人形浄瑠璃(文楽)
18	地歌(三味線音楽)
19	地歌(三味線音楽)
20	箏曲
21	箏曲
22	尺八
23	近・現代の音楽
24	近・現代の音楽
25	アイヌの音楽
26	沖縄の音楽
27	沖縄の音楽

28	民俗音楽
29	民俗音楽
30	後期授業のまとめ 試験またはレポート

科目名	西洋音楽の歴史と理論	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	4
授業期間	2023年度 通年	形態	講義		
教員名	嶋田 久美				
クラス名					

授業目的と到達目標					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・西洋音楽史に関する基礎的な知識を習得する。</li> <li>・時代ごとの音楽様式の特徴と歴史的背景を理解し、自身の演奏や制作活動とのつながりを考え、説明する力を身につける。</li> </ul>					
授業概要					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・前期: 古代ギリシア・ローマからバロック期までの音楽史の流れを学ぶ。</li> <li>・後期: 古典派から現代にいたるまでの音楽史の流れを学ぶ。</li> </ul>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回の授業でリアクションペーパーの作成を実施するので、積極的に取り組むこと。</li> <li>・配布資料と参考書、および自身のノートを活用し、前回までの講義の流れを振り返っておくこと。</li> <li>・入門的なものでかまわないので、西洋音楽史に関する図書をあらかじめ通読しておくことが望ましい。</li> </ul>					

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
リアクションペーパー	50
期末レポート	50

教科書			
教科書1	適宜、資料配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	決定版 はじめての音楽史		
出版社名	音楽之友社	著者名	片桐功ほか
参考書名2	音楽史を学ぶ		
出版社名	教育芸術社	著者名	久保田慶一編
参考書名3	グラウト/パリスカ 新西洋音楽史 上・中・下		
出版社名	グラウト/パリスカ 新西洋音楽史 上・中・下	著者名	D.J. グラウト & C.V. パリスカ

参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL	
特記事項	受講生の関心や理解度に応じて、適宜、進度を調整する。
教員実務経験	

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ガイダンス:一年の授業計画・成績評価の基準・リアクションペーパーの作成要領の説明、音楽に関するアンケートの実施
2	前期の概説
3	古代ギリシア・ローマ
4	中世①
5	中世②
6	中世③
7	中世④
8	ルネサンス①
9	ルネサンス②
10	ルネサンス③
11	ルネサンス④
12	バロック①
13	バロック②
14	バロック③
15	バロック④
16	前期の振り返り、後期の概説
17	期末レポート作成要領の説明
18	前古典派①
19	前古典派②
20	古典派①
21	古典派②
22	古典派③
23	古典派④
24	ロマン派①
25	ロマン派②

26	ロマン派③
27	現代①
28	現代②
29	現代③
30	総括

科目名	コンポーザング論	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 前期	形態	講義		
教員名	田中 久美子				
クラス名					

授業目的と到達目標	
クラシック音楽の作曲法に関する理論全般の解説と主要な作品について様々な角度からの楽曲構造分析を行い、音楽の実際を学びます。	
授業概要	
授業は「対面授業」で行います。 色々な音楽作品に触れながら、楽典、和声法、楽式論、楽器論、管弦楽法の基本を学びつつ、クラシック音楽の広い理解を目指します。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
日頃よりクラシックの音楽作品に触れ、関心を高めておくことが望ましい。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
総合評価(普段の授業への取り組み、レポート提出)	100

教科書			
教科書1	適宜プリント教材を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			



科目名	音楽とテクノロジー	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 後期	形態	講義		
教員名	志村 哲				
クラス名					

授業目的と到達目標	
音楽に関わる様々なテクノロジーの在り方を歴史的作品的分析を通して考察し、芸術とテクノロジーの結合について、将来にわたって考える姿勢を養う。	
授業概要	
本講義の前半は、主に20世紀に発展した科学技術と関わって生み出された新しい楽器と音楽が、現代の私たちに何を示しているかを考察する。 後半は、これまで音楽史上ではあまり論じられてこなかったが、今後のテクノロジー発展の方向性を模索するために不可欠な概念としての「音楽文化を支える音の匠」の重要性について論じる。	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
自己の関わる音楽がどのようにすればさらに向上するかを絶えず考え続けること。	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
授業に取り組む姿勢	40
授業内ミニレポート	20
最終課題	40

教科書			
教科書1	適宜プリント配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	『コンピュータと音楽の世界』		
出版社名	東京: 共立出版	著者名	志村哲、他(共著)
参考書名2			
出版社名		著者名	



科目名	楽式論	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	4
授業期間	2023 年度 通年	形態	講義		
教員名	嶋田 久美				
クラス名	(AD・P・V・PM コース対象)				

授業目的と到達目標	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的な楽曲の形式とその構造に関する知識を習得する。</li> <li>・形式ごとの特色を理解し、自身の演奏や制作活動とのつながりを考え、説明する力を身につける。</li> </ul>	
授業概要	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・前期: 基本的な楽曲の形式とその構造を学ぶ。</li> <li>・後期: 自分が関心のある音楽を取り上げ、その形式(形態)の特徴について考察し、成果をレポートする。</li> </ul>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・毎回の授業で小課題、ないしリアクションペーパーの作成を実施するので、積極的に取り組むこと。</li> <li>・配布資料と参考書、および自身のノートを活用し、前回までの講義の流れを振り返っておくこと。</li> </ul>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
試験(前期)	30
小課題(前期)	20
プレゼンテーション(後期)	35
リアクションペーパー(後期)	15

教科書			
教科書1	適宜、資料配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	新版 楽式論		
出版社名	音楽之友社	著者名	石桁真礼生
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	

参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL			
特記事項	受講生の関心や理解度に応じて、適宜、進度を調整する。		
教員実務経験			

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ガイダンス:一年の授業計画・成績評価の基準の説明、音楽に関するアンケート
2	動機、小楽節、大楽節、1部形式
3	2部形式
4	3部形式①
5	3部形式②
6	複合3部形式①
7	複合3部形式②
8	ロンド形式①
9	ロンド形式②
10	ロンド形式③
11	ソナタ形式①
12	ソナタ形式②
13	ソナタ形式③
14	ソナタ形式④
15	前期のまとめ、および試験
16	音楽形式の応用と分析方法についての概説
17	取り上げる音楽の決定、および基本情報の調査方法の説明
18	プレゼンテーション資料作成要領の説明
19	プレゼンテーション①:選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
20	プレゼンテーション②:選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
21	プレゼンテーション③:選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
22	プレゼンテーション④:選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
23	プレゼンテーション⑤:選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
24	プレゼンテーション⑥:選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
25	プレゼンテーション⑦:選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
26	プレゼンテーション⑧:選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
27	プレゼンテーション⑨:選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
28	プレゼンテーション⑩:選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション

29	プレゼンテーション⑩: 選定した音楽の形式の検討、およびディスカッション
30	総括

科目名	楽式論	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	4
授業期間	2023年度 通年	形態	講義		
教員名	河合 摂子				
クラス名	(W・PMコース対象)				

授業目的と到達目標					
音楽を作ったり演奏するには、曲の構成の理解が重要である。楽曲の動機、小楽節、大楽節等の基礎知識から、調判定、和音分析、重要な形式の細部の分析までの理解をすることを目標とする。その結果として演奏、指導にいかされるようにすることにつなげたい。					
授業概要					
前期は主に楽式の基礎学び、ピアノ作品を通して主な形式を分析をとおして学ぶ。後期はバロック作品、変奏曲等にも触れ、様々な楽器の作品の分析も行い、それをふまえての演奏も行う。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
テキストや、配布したプリント、楽譜を必ず持参し、授業内容をノート、楽譜に記入し、それをもとに自分で楽式分析を出来るようにする。					

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
前期試験	40
後期試験	40
授業に取り組む姿勢	20

教科書			
教科書1	和声と楽式のアナリーゼ =バイエルからソナタアルバムまで=		
出版社名	音楽之友社	著者名	島岡 譲
教科書2	適宜配る楽譜やプリント		
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	バイエルピアノ教則本 op.101		
出版社名	全音楽譜出版社	著者名	
参考書名2	ブルグミュラー25の練習曲		
出版社名	全音楽譜出版社	著者名	
参考書名3	ソナチネアルバム 1		

出版社名	ソナチネアルバム 1	著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL
特記事項
演奏するのに大切な形式の授業です、流れをもった授業計画になっていますので、なるべく欠席、遅刻しないでください。出欠も成績に反映します。 後期の作品分析と演奏は特にしっかり取り組んでください。
教員実務経験
作曲家

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	一年間の授業計画の説明と、楽式を学ぶための基礎知識の説明 動機、小楽節、大楽節、和音分析等を学ぶ。
2	2部、3部形式の基礎知識の説明① 作品を通しての楽式分析、和声分析
3	2部、3部形式の基礎知識の説明② 前回と違う形式の楽式分析、和声分析
4	複合2、3部形式の基礎知識の説明① 主に2、3部形式との違いを通して理解を深める
5	複合3部形式を作品を通して楽式分析をし、和声分析等を学ぶ。 数曲、分析をして、特徴をまとめる
6	ロンド形式の基礎知識の説明① 楽曲を例に楽式、テーマの展開、和声分析等学ぶ。
7	ロンド形式の楽式分析② 前回と違う時代の作曲家の作品を通して楽式分析等を学ぶ。
8	ロンド形式の楽式分析③ 受講生の発表をもとに質疑応答を通して、アドバイス、補足をおこない、ロンド形式をまとめる。
9	ソナタ形式の基礎知識の説明① ロンド形式との違いを説明し、楽式分析をするときのソナタ形式の特徴を学ぶ。
10	ソナタ形式の分析① 前回の基礎知識をもとに、短いソナタ形式を楽式、和声、テーマ等の分析を学ぶ。
11	ソナタ形式の分析② ソナチネ、ソナタアルバムのソナタ形式の楽式分析を学ぶ。
12	ソナタ形式の分析③

	有名な古典派の作曲家(ハイドン、モーツァルト、ベートーベン等)のソナタ形式の楽式分析、和声分析等を学ぶ。
13	変奏曲 変奏曲の基礎知識学び、楽式分析を学ぶ。
14	これまでの学んだ楽式を復習、補足をし、試験にむけての分析の仕方を習得する。
15	前期の楽式のまとめと試験
16	前期の復習と、バロック作品の音楽の形式について学ぶ。 対位作品へのアプローチの基礎知識を説明。
17	バロック作品の分析 短い作品を通して対位楽曲の楽式分析、和声分析等の説明
18	バロック作品の組曲の楽式分析① 組曲のそれぞれの作品の楽式分析を説明。 楽式分析を通して組曲の魅力をさぐる。
19	フーガ① フーガの楽式分析の基礎知識を学ぶ。 インベンションの作品を通して楽式分析を説明
20	様々な編成の作品の分析① Duo の作品の分析、旋律楽器、ピアノの役割をふまえて特徴をさぐる
21	弦楽器とピアノの作品の分析 作品を聴いて楽式、和声、アンサンブルの作品の書法を学ぶ
22	管楽器とピアノの作品の分析 作品の楽式、和声、アンサンブルの作品の書法等を学ぶ
23	学生の専攻の楽器の作品を取り上げる。 その作品の楽式、和声等を説明、楽器の特性、楽譜の特性等を学ぶ
24	学生の専攻の楽器の作品を取り上げる。 作品の楽式、和声等を説明し、楽器の特性、作品の特性等を学ぶ
25	弦楽四重奏の作品をとりあげ、弦楽器ならではの作品の特徴や楽器の特性を学び、作品分析を行う
26	歌曲の作品をとりあげ、詞の取り扱い方や詞の世界観をどう音にしているのかを考え、作品分析や和声分析を行い、魅力に触れる
27	オーケストラ作品を取り上げ、オーケストラの楽器について、楽譜について学び、作品分析を行う。 オーケストレーションの特性から音色や響きの多彩さを学ぶ。
28	ブラスバンドの作品を取り上げ、ブラスバンドの楽器の特性や楽譜について、学び、作品分析を行う。 ブラスバンドの作品の魅力を楽譜を通して学ぶ。
29	近代、現代の作品の楽式の傾向と、楽式の変遷をとおして音楽史の流れ、作曲家の作風へのアプローチをする。
30	一年間の授業のまとめと後期試験

科目名	音楽科指導法 I 【19以降生】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 前期	形態	講義		
教員名	尾張 佳子				
クラス名	【19以降生対象】				

授業目的と到達目標	
【授業目的】	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領に則り、音楽科教育の指導内容について理解する</li> <li>・指導内容に基づき、指導と評価の一体化を図り、指導法の充実を図る</li> <li>・学習指導案やレポートの作成を通して教員に求められる資質能力の向上を図る</li> </ul>	
【到達目標】	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現および鑑賞領域において授業構成のための基礎基本を習得する</li> </ul>	
授業概要	
[対面授業]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領の理解</li> <li>・学習指導案の作成</li> <li>・実技指導法「歌唱・器楽」の習得</li> </ul>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽科教育の基礎知識の習得と実践を通して音楽科指導法について理解する</li> <li>・A 表現:歌唱は共通教材等のピアノ伴奏および模唱を習得する</li> <li>・A 表現:器楽は模範演奏技能を習得する</li> </ul>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技テスト・指導案・模擬授業・レポート・提出物等	70
平常点	30

教科書			
教科書1	中学校学習指導要領解説一音楽編		
出版社名		著者名	文部科学省
教科書2	中学音楽 音楽のおくりもの 1/2・3 上下 中学器楽		
出版社名		著者名	教育出版
教科書3	中学生の音楽 1/2・3 上下 中学生の器楽		
出版社名		著者名	教育芸術社

参考書・参考文献	
参考書名1	



科目名	音楽科指導法 I 【19以降生】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023 年度 前期	形態	講義		
教員名	尾張 佳子				
クラス名	【19以降生対象】				

授業目的と到達目標	
【授業目的】	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領に則り、音楽科教育の指導内容について理解する</li> <li>・指導内容に基づき、指導と評価の一体化を図り、指導法の充実を図る</li> <li>・学習指導案やレポートの作成を通して教員に求められる資質能力の向上を図る</li> </ul>	
【到達目標】	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現および鑑賞領域において授業構成のための基礎基本を習得する</li> </ul>	
授業概要	
[対面授業]	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領の理解</li> <li>・学習指導案の作成</li> <li>・実技指導法「歌唱・器楽」の習得</li> </ul>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽科教育の基礎知識の習得と実践を通して音楽科指導法について理解する</li> <li>・A 表現:歌唱は共通教材等のピアノ伴奏および模唱を習得する</li> <li>・A 表現:器楽は模範演奏技能を習得する</li> </ul>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技テスト・指導案・模擬授業・レポート・提出物等	70
平常点	30

教科書			
教科書1	中学校学習指導要領解説一音楽編		
出版社名		著者名	文部科学省
教科書2	中学音楽 音楽のおくりもの 1/2・3 上下 中学器楽		
出版社名		著者名	教育出版
教科書3	中学生の音楽 1/2・3 上下 中学生の器楽		
出版社名		著者名	教育芸術社

参考書・参考文献	
参考書名1	



科目名	音楽科指導法Ⅱ【19以降生】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 後期	形態	講義		
教員名	尾張 佳子				
クラス名	【19以降生対象】				

授業目的と到達目標	
【授業目的】・学習指導要領に則り、音楽科教育の指導内容について理解する   指導内容に基づき、指導と評価の一体化を図り、指導法の充実を図る   学習指導案作成等を通して教員に求められる資質能力の向上を図る   【到達目標】・表現および鑑賞領域において授業構成のための基礎基本を習得する	
授業概要	
[対面授業] <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領の理解</li> <li>・学習指導案の作成</li> <li>・「主体的・対話的で深い学び」の実践</li> <li>・実技指導法の充実</li> <li>・評価についての理解</li> <li>・授業内容の理解と定着は確認テストで行う</li> </ul>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽科教育の基礎知識の習得と実践を通して音楽科指導法について理解する</li> <li>・A 表現: 歌唱は共通教材のピアノ伴奏および模唱を習得する</li> </ul>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技テスト・指導案・模擬授業・レポート・提出物・確認テスト等	70
平常点	30

教科書			
教科書1	中学校学習指導要領解説―音楽編		
出版社名		著者名	文部科学省
教科書2	中学音楽 音楽のおくりもの 1/2・3 上下 中学器楽		
出版社名		著者名	教育出版
教科書3	中学生の音楽 1/2・3 上下 中学生の器楽		
出版社名		著者名	教育芸術社

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	



科目名	音楽科指導法Ⅱ【19以降生】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 後期	形態	講義		
教員名	尾張 佳子				
クラス名	【19以降生対象】				

授業目的と到達目標	
【授業目的】・学習指導要領に則り、音楽科教育の指導内容について理解する   指導内容に基づき、指導と評価の一体化を図り、指導法の充実を図る   学習指導案作成等を通して教員に求められる資質能力の向上を図る   【到達目標】・表現および鑑賞領域において授業構成のための基礎基本を習得する	
授業概要	
[対面授業] <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領の理解</li> <li>・学習指導案の作成</li> <li>・「主体的・対話的で深い学び」の実践</li> <li>・実技指導法の充実</li> <li>・評価についての理解</li> <li>・授業内容の理解と定着は確認テストで行う</li> </ul>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽科教育の基礎知識の習得と実践を通して音楽科指導法について理解する</li> <li>・A 表現: 歌唱は共通教材のピアノ伴奏および模唱を習得する</li> </ul>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
実技テスト・指導案・模擬授業・レポート・提出物・確認テスト等	70
平常点	30

教科書			
教科書1	中学校学習指導要領解説―音楽編		
出版社名		著者名	文部科学省
教科書2	中学音楽 音楽のおくりもの 1/2・3 上下 中学器楽		
出版社名		著者名	教育出版
教科書3	中学生の音楽 1/2・3 上下 中学生の器楽		
出版社名		著者名	教育芸術社

参考書・参考文献			
参考書名1			
出版社名		著者名	



科目名	音楽科指導法Ⅲ【19以降生】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 前期	形態	講義		
教員名	小牟田 啓				
クラス名	【19以降生】				

授業目的と到達目標	
<p>本授業は、音楽の授業で音楽家を育てるのではなく、子ども達の「感性」を大切に「人間力」を育む「愛の教科」とあるという視点に立ち、</p> <p>「指導者が生徒に学ばせたい、身につけさせたい音楽的事項」を「学習指導要領」に則った、各自の授業デザインとして、具体的な授業構成ができる技能を学びます。</p> <p>■授業目的は、音楽科指導法Ⅰ・Ⅱの授業内容を踏まえ、生徒の活動目標となる「題材目標」を「3観点」(①知識及び技能、②思考力判断力表現力等、③主体的に学習に取り組む態度)で設定し、指導者の評価の物差しとなる「評価規準」と表裏一体</p>	
授業概要	
<p>[対面授業]</p> <p>■講義内容の主要ポイント理解の定着確認については、毎回の授業課題「授業内 KIZUKI 報告」と「授業内試験」で見取ります。</p> <p>■講義は、2社の検定教科書から、①「2 領域・4 分野」の具体的な授業教材を選択し、②指導事項、[共通事項]に即した学ばせたい音楽的事項を決め、③音楽的な見方・考え方を働かせ、④「主体的・対話的で深い学び」による学習形態を追求します。</p> <p>■また、小・中、2社の検定教科書を、小中 9 年間の学びの連続性と系統性から見取り、「教科書採択演習」としても比較検討の研究をします。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>■2社の検定教科書から、下記の「2 領域・4 分野」の教材を事前に選択し、授業構想を事前に研究・準備しておいて下さい。</p> <p>※最近の教育実習では、必ず4分野の授業を実施する前提になる実習校がほとんどです。</p> <p>【A 表現(1)「歌唱」】</p> <p>2社の検定教科書から、歌唱共通教材(7曲)から、学内で実施された弾き歌い歌唱曲(2曲)以外の5曲についても、模範唱(簡易伴奏可)ができるように事前練習をしておくこと。</p> <p>【A 表現(2)「器楽」】</p> <p>2社の検定教科書から、「アルトリコーダーの楽曲」、「和楽器の楽曲」を選択し、事前練習を</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
■毎回の授業内での「KIZUKI 課題」の提出	30%
<p>■授業内での「授業内試験」(詳細はガイダンスで)</p> <p>①学習指導要領「音楽科の目的」の理解</p> <p>②学習指導要領「音楽科の指導事項と[共通事項]」の理解</p> <p>③学習指導要領「音楽科の評価のあり方」の理解</p> <p>④学習指導要領「題材目標と評価規準による指導と評価の一体化」の理解</p>	50%
■主体的な授業への取り組み姿勢	20%

教科書			
教科書1	■『中学校学習指導要領解説-音楽編』(平成29年告示版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	(著)文部科学省(2018)
教科書2	■中学生の音楽1、2・3上下、中学生の器楽(令和3年度版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	
教科書3	■中学音楽 音楽のおくりもの1、2・3上下、中学器楽(令和3年度版)		
出版社名	(出)教育出版社/必須購入	著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	■「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料		
出版社名	(出)東洋館出版社	著者名	(著)文部科学省国立教育政策研究所/令和2年度版
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
<p>■授業では、①検定教科書(2社8冊)、②学習指導要領、③PCを常に持参活用しながらの参加を基本とします。</p> <p>■尚、A表現(1)歌唱の共通教材5曲とは、「赤とんぼ」「花」「荒城の月」「早春賦」「花の街」を示します。また、B鑑賞では”日本の伝統文化”からの楽曲を扱います。</p> <p>■特に授業では、近年の教育現場のGIGAスクール構想(1人一台タブレット)の導入に伴う、情報機器を活用した教材提示力のスキル(Microsoft-Office、楽譜作成ソフト MuseScore、音楽制作アプリ GarageBand 等)を必要</p>
教員実務経験
大阪府中学校音楽教育研究会顧問、堺市吹奏楽連盟顧問、JBA 日本吹奏楽指導者協会会員、元中学校校長・教育委員会総括指導主事等

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	<p>1.【音楽科における”学びの本質”と”意義”】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「音楽科で育む”感性”とは」</li> <li>・「なぜ学校の授業で音楽科を学ぶのか”音楽科の授業を学ぶ意義”」</li> </ul>
2	2.【これまでの「学習指導要領」の成果と課題】

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「音楽科の2領域・4分野の定着の成果の課題」</li> <li>・〔共通事項〕を支えとした知覚・感受の感受性の育成</li> </ul>	
3	<p>3.【新学習指導要領改訂の背景と基本的な考え方】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「新学習指導要領の内容構成の改善と考え方」</li> <li>・「小・中・高の概要と構成の比較を通して」</li> </ul>	
4	<p>4.【新学習指導要領改訂の主要なポイント】</p> <p>【授業内試験】学習指導要領の理解①、②</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一体的な「主体的・対話的で深い学び」とは何か</li> <li>・ 音楽科における「見方・考え方」とは何か</li> </ul>	【授業内】
5	<p>5.【題材構成を要とした”学習指導案”の作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学ばせたい音楽的事項を”題材名”にする重要性とは</li> <li>・学ばせたい音楽的事項が適切に指導計画されているか</li> </ul>	
6	<p>6.【音楽科で育成される3つの資質・能力】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「知識及び技能」の習得</li> <li>・「思考力、判断力、表現力等」の育成</li> <li>・「学びに向かう力、人間性等」の涵養</li> </ul>	
7	<p>7.【中等科音楽科教育における教育評価のあり方①】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「概ね満足Bと判断する”評価規準”を大切にする視点」</li> <li>・「概ね満足Bと判断する”評価規準”と”評価基準”との関係」</li> </ul>	
8	<p>8.【中等科音楽科教育における教育評価のあり方②】</p> <p>の理解③、④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「指導計画」と「評価計画」を表裏一体にする意味</li> <li>・「評価から評定」の関係と「指導と評価の一体化」</li> </ul>	【授業内試験】学習指導要領
9	<p>9.【小中校種間の連携と音楽科の学力】①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小中学校 “検定教科書”から観る音楽の力</li> <li>・「教科書採択」演習</li> </ul>	
10	<p>10.【小中校種間の連携と音楽科の学力】②</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導事項及び〔共通事項〕からの系統性</li> <li>・小中・世代を繋ぐ「日本の四季の歌」の魅力</li> </ul>	
11	<p>11.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】①</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「A 表現(1) 歌唱分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方のコツ</li> </ul>	
12	<p>12.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】②</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「A 表現(2) 器楽分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方のコツ</li> </ul>	
13	<p>13.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】③</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「A 表現(3) 創作分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方捉え方のコツ</li> </ul>	
14	<p>14.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】④</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「鑑賞領域 B 鑑賞分野」指導事項ア、イの捉え方捉え方のコツ</li> </ul>	
15	<p>15.【講義のまとめと総括】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽科指導法Ⅳ、直前の教育実習に向けた授業計画の準備</li> </ul>	

科目名	音楽科指導法Ⅲ【19以降生】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 前期	形態	講義		
教員名	小牟田 啓				
クラス名	【19以降生】				

授業目的と到達目標	
<p>本授業は、音楽の授業で音楽家を育てるのではなく、子ども達の「感性」を大切に「人間力」を育む「愛の教科」とあるという視点に立ち、</p> <p>「指導者が生徒に学ばせたい、身につけさせたい音楽的事項」を「学習指導要領」に則った、各自の授業デザインとして、具体的な授業構成ができる技能を学びます。</p> <p>■授業目的は、音楽科指導法Ⅰ・Ⅱの授業内容を踏まえ、生徒の活動目標となる「題材目標」を「3観点」(①知識及び技能、②思考力判断力表現力等、③主体的に学習に取り組む態度)で設定し、指導者の評価の物差しとなる「評価規準」と表裏一体</p>	
授業概要	
<p>[対面授業]</p> <p>■講義内容の主要ポイント理解の定着確認については、毎回の授業課題「授業内 KIZUKI 報告」と「授業内試験」で見取ります。</p> <p>■講義は、2社の検定教科書から、①「2 領域・4 分野」の具体的な授業教材を選択し、②指導事項、〔共通事項〕に即した学ばせたい音楽的事項を決め、③音楽的な見方・考え方を働かせ、④「主体的・対話的で深い学び」による学習形態を追求します。</p> <p>■また、小・中、2社の検定教科書を、小中 9 年間の学びの連続性と系統性から見取り、「教科書採択演習」としても比較検討の研究をします。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>■2社の検定教科書から、下記の「2 領域・4 分野」の教材を事前に選択し、授業構想を事前に研究・準備しておいて下さい。</p> <p>※最近の教育実習では、必ず4分野の授業を実施する前提になる実習校がほとんどです。</p> <p>【A 表現(1)「歌唱」】</p> <p>2社の検定教科書から、歌唱共通教材(7曲)から、学内で実施された弾き歌い歌唱曲(2曲)以外の5曲についても、模範唱(簡易伴奏可)ができるように事前練習をしておくこと。</p> <p>【A 表現(2)「器楽」】</p> <p>2社の検定教科書から、「アルトリコーダーの楽曲」、「和楽器の楽曲」を選択し、事前練習を</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
■毎回の授業内での「KIZUKI 課題」の提出	30%
<p>■授業内での「授業内試験」(詳細はガイダンスで)</p> <p>①学習指導要領「音楽科の目的」の理解</p> <p>②学習指導要領「音楽科の指導事項と〔共通事項〕」の理解</p> <p>③学習指導要領「音楽科の評価のあり方」の理解</p> <p>④学習指導要領「題材目標と評価規準による指導と評価の一体化」の理解</p>	50%
■主体的な授業への取り組み姿勢	20%

教科書			
教科書1	■『中学校学習指導要領解説-音楽編』(平成29年告示版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	(著)文部科学省(2018)
教科書2	■中学生の音楽1、2・3上下、中学生の器楽(令和3年度版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	
教科書3	■中学音楽 音楽のおくりもの1、2・3上下、中学器楽(令和3年度版)		
出版社名	(出)教育出版社/必須購入	著者名	

参考書・参考文献			
参考書名1	■「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料		
出版社名	(出)東洋館出版社	著者名	(著)文部科学省国立教育政策研究所/令和2年度版
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
<p>■授業では、①検定教科書(2社8冊)、②学習指導要領、③PCを常に持参活用しながらの参加を基本とします。</p> <p>■尚、A表現(1)歌唱の共通教材5曲とは、「赤とんぼ」「花」「荒城の月」「早春賦」「花の街」を示します。また、B鑑賞では”日本の伝統文化”からの楽曲を扱います。</p> <p>■特に授業では、近年の教育現場のGIGAスクール構想(1人一台タブレット)の導入に伴う、情報機器を活用した教材提示力のスキル(Microsoft-Office、楽譜作成ソフト MuseScore、音楽制作アプリ GarageBand等)を必要</p>
教員実務経験
大阪府中学校音楽教育研究会顧問、堺市吹奏楽連盟顧問、JBA 日本吹奏楽指導者協会会員、元中学校校長・教育委員会総括指導主事等

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	<p>1.【音楽科における”学びの本質”と”意義”】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「音楽科で育む”感性”とは」</li> <li>・「なぜ学校の授業で音楽科を学ぶのか”音楽科の授業を学ぶ意義”」</li> </ul>
2	2.【これまでの「学習指導要領」の成果と課題】

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「音楽科の2領域・4分野の定着の成果の課題」</li> <li>・〔共通事項〕を支えとした知覚・感受の感受性の育成</li> </ul>	
3	<p>3.【新学習指導要領改訂の背景と基本的な考え方】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「新学習指導要領の内容構成の改善と考え方」</li> <li>・「小・中・高の概要と構成の比較を通して」</li> </ul>	
4	<p>4.【新学習指導要領改訂の主要なポイント】</p> <p>業内試験】学習指導要領の理解①、②</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一体的な「主体的・対話的で深い学び」とは何か</li> <li>・ 音楽科における「見方・考え方」とは何か</li> </ul>	【授
5	<p>5.【題材構成を要とした”学習指導案”の作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学ばせたい音楽的事項を”題材名”にする重要性とは</li> <li>・学ばせたい音楽的事項が適切に指導計画されているか</li> </ul>	
6	<p>6.【音楽科で育成される3つの資質・能力】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「知識及び技能」の習得</li> <li>・「思考力、判断力、表現力等」の育成</li> <li>・「学びに向かう力、人間性等」の涵養</li> </ul>	
7	<p>7.【中等科音楽科教育における教育評価のあり方①】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「概ね満足Bと判断する”評価規準”を大切にする視点」</li> <li>・「概ね満足Bと判断する”評価規準”と”評価基準”との関係」</li> </ul>	
8	<p>8.【中等科音楽科教育における教育評価のあり方②】</p> <p>の理解③、④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「指導計画」と「評価計画」を表裏一体にする意味</li> <li>・「評価から評定」の関係と「指導と評価の一体化」</li> </ul>	【授業内試験】学習指導要領
9	<p>9.【小中校種間の連携と音楽科の学力】①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小中学校 “検定教科書”から観る音楽の力</li> <li>・「教科書採択」演習</li> </ul>	
10	<p>10.【小中校種間の連携と音楽科の学力】②</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導事項及び〔共通事項〕からの系統性</li> <li>・小中・世代を繋ぐ「日本の四季の歌」の魅力</li> </ul>	
11	<p>11.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】①</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「A 表現(1) 歌唱分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方のコツ</li> </ul>	
12	<p>12.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】②</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「A 表現(2) 器楽分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方のコツ</li> </ul>	
13	<p>13.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】③</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「A 表現(3) 創作分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方捉え方のコツ</li> </ul>	
14	<p>14.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】④</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「鑑賞領域 B 鑑賞分野」指導事項ア、イの捉え方捉え方のコツ</li> </ul>	
15	<p>15.【講義のまとめと総括】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽科指導法Ⅳ、直前の教育実習に向けた授業計画の準備</li> </ul>	

科目名	音楽科指導法Ⅳ【19以降生】	年次	カリキュラムにより異なります	単位数	2
授業期間	2023年度 後期	形態	講義		
教員名	小牟田 啓				
クラス名	【19以降生】				

授業目的と到達目標	
<p>本授業は、音楽科指導法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの授業内容を踏まえた、教育実習直前の音楽科指導法の総まとめとして、「難しいことを簡単に」「簡単なことをやさしく」「やさしく簡単なことを楽しく」をモットーに、履修学生全員参加による2領域・4分野の授業デザイン(学習指導案&amp;ワークシート)による、「2023.版 研究収録冊子」の作成完成をめざします。</p> <p>■授業目的は、教育実習に向けた2領域・4分野の教材研究による実践演習を中心に進め、更なる授業展開の実践力を高めます。</p> <p>■また、全中、近中、府中音楽教育研究会が開催した研究資料をも</p>	
授業概要	
[対面授業]	
<p>■講義は、①「2領域・4分野」の教材選択力と各分野の有効性、②学習指導要領の示す「留意事項」を踏まえた授業構成、③今日的課題を踏まえた授業構成、④「出合授業」の演習等の研究を協働的に進めていきます。</p> <p>■講義内容の主要ポイント理解の定着確認については、毎回の授業課題「授業内KIZUKI報告」と「授業内試験」で見取ります。</p>	
準備学修(予習・復習)・受講上の注意	
<p>■教育実習における生徒との初めての出会いとなる「オープニング授業(出合授業)」(約7分)の授業構想では、自分の専門性を生かした”音と音楽”を活用した出会い構想を準備しておいて下さい。</p> <p>■また、日頃より、自らの専門分野を生かした音楽的見地を授業開発に活かせるよう心がけ、研究しておいて下さい。</p>	

成績評価方法・基準	
種別	割合(%)
■ 毎回の授業内「KIZUKI 課題」の提出と「授業内試験」及び「演習試験」	50%
■ 「2023.版 研究収録冊子」への学習指導案&WSの合格完成版の入稿	30%
■ 主体的な授業への取り組み姿勢	20%

教科書			
教科書1	■『中学校学習指導要領解説-音楽編』(平成29年告示版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	(著)文部科学省(2018)
教科書2	■中学生の音楽1、2・3上下、中学生の器楽(令和3年度版)		
出版社名	(出)教育芸術社/必須購入	著者名	
教科書3	■中学音楽 音楽のおくりもの1、2・3上下、中学器楽(令和3年度版)		
出版社名	(出)教育出版社/必須購入	著者名	

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「音楽科の2領域・4分野の定着の成果の課題」</li> <li>・〔共通事項〕を支えとした知覚・感受の感受性の育成</li> </ul>	
3	<p>3.【新学習指導要領改訂の背景と基本的な考え方】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「新学習指導要領の内容構成の改善と考え方」</li> <li>・「小・中・高の概要と構成の比較を通して」</li> </ul>	
4	<p>4.【新学習指導要領改訂の主要なポイント】</p> <p>業内試験】学習指導要領の理解①、②</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一体的な「主体的・対話的で深い学び」とは何か</li> <li>・ 音楽科における「見方・考え方」とは何か</li> </ul>	【授
5	<p>5.【題材構成を要とした”学習指導案”の作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学ばせたい音楽的事項を”題材名”にする重要性とは</li> <li>・学ばせたい音楽的事項が適切に指導計画されているか</li> </ul>	
6	<p>6.【音楽科で育成される3つの資質・能力】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「知識及び技能」の習得</li> <li>・「思考力、判断力、表現力等」の育成</li> <li>・「学びに向かう力、人間性等」の涵養</li> </ul>	
7	<p>7.【中等科音楽科教育における教育評価のあり方①】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「概ね満足Bと判断する”評価規準”を大切にする視点」</li> <li>・「概ね満足Bと判断する”評価規準”と”評価基準”との関係」</li> </ul>	
8	<p>8.【中等科音楽科教育における教育評価のあり方②】</p> <p>の理解③、④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「指導計画」と「評価計画」を表裏一体にする意味</li> <li>・「評価から評定」の関係と「指導と評価の一体化」</li> </ul>	【授業内試験】学習指導要領
9	<p>9.【小中校種間の連携と音楽科の学力】①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小中学校 “検定教科書”から観る音楽の力</li> <li>・「教科書採択」演習</li> </ul>	
10	<p>10.【小中校種間の連携と音楽科の学力】②</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導事項及び〔共通事項〕からの系統性</li> <li>・小中・世代を繋ぐ「日本の四季の歌」の魅力</li> </ul>	
11	<p>11.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】①</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「A 表現(1) 歌唱分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方のコツ</li> </ul>	
12	<p>12.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】②</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「A 表現(2) 器楽分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方のコツ</li> </ul>	
13	<p>13.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】③</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「A 表現(3) 創作分野」指導事項ア、イ、ウの捉え方捉え方のコツ</li> </ul>	
14	<p>14.【授業づくりのポイントを踏まえた「授業構想チェックシート」の作成】④</p> <p>【授業内演習】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「鑑賞領域 B 鑑賞分野」指導事項ア、イの捉え方捉え方のコツ</li> </ul>	
15	<p>15.【講義のまとめと総括】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽科指導法Ⅳ、直前の教育実習に向けた授業計画の準備</li> </ul>	